

中 等 教 育



中華民國三十三年五月三十日第三種郵政特准掛號

第 五 拾 號

明 治 三 十 六 年 五 月 十 日 發 行
(每 月 一 回 十 日 發 行)



發賣廣告 !!

近世文學界の大傑作！

佛國文豪デュマ原作
長田秋濤譯
全壹冊
紙數四百八拾頁



正價 並製金八拾五錢 郵税金拾貳錢 (三色版及コロタイプ數葉入)
特製金壹圓 郵税金拾四錢

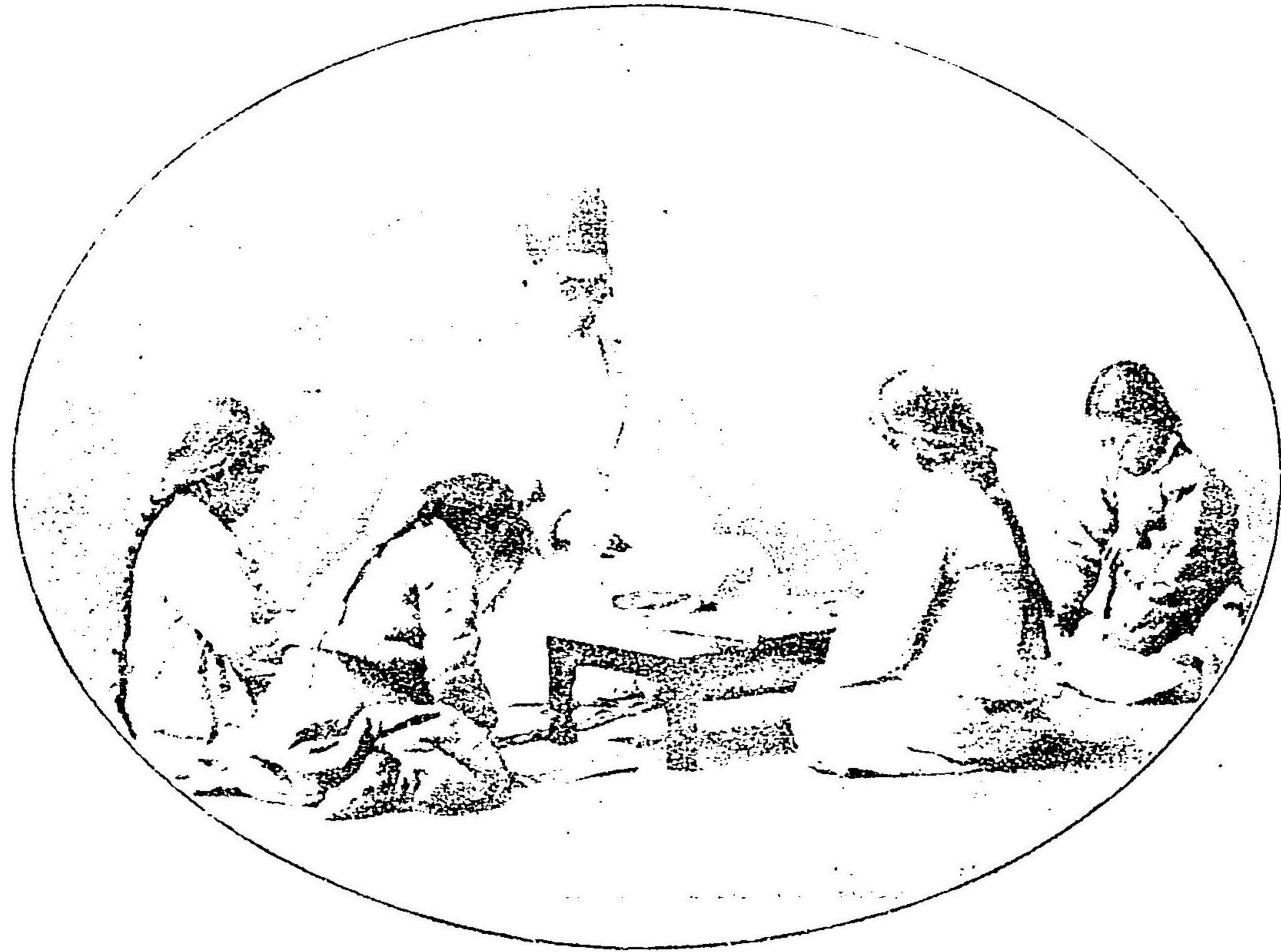
現時法曹界の一問題！

發行所 東京牛込區早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區博文館

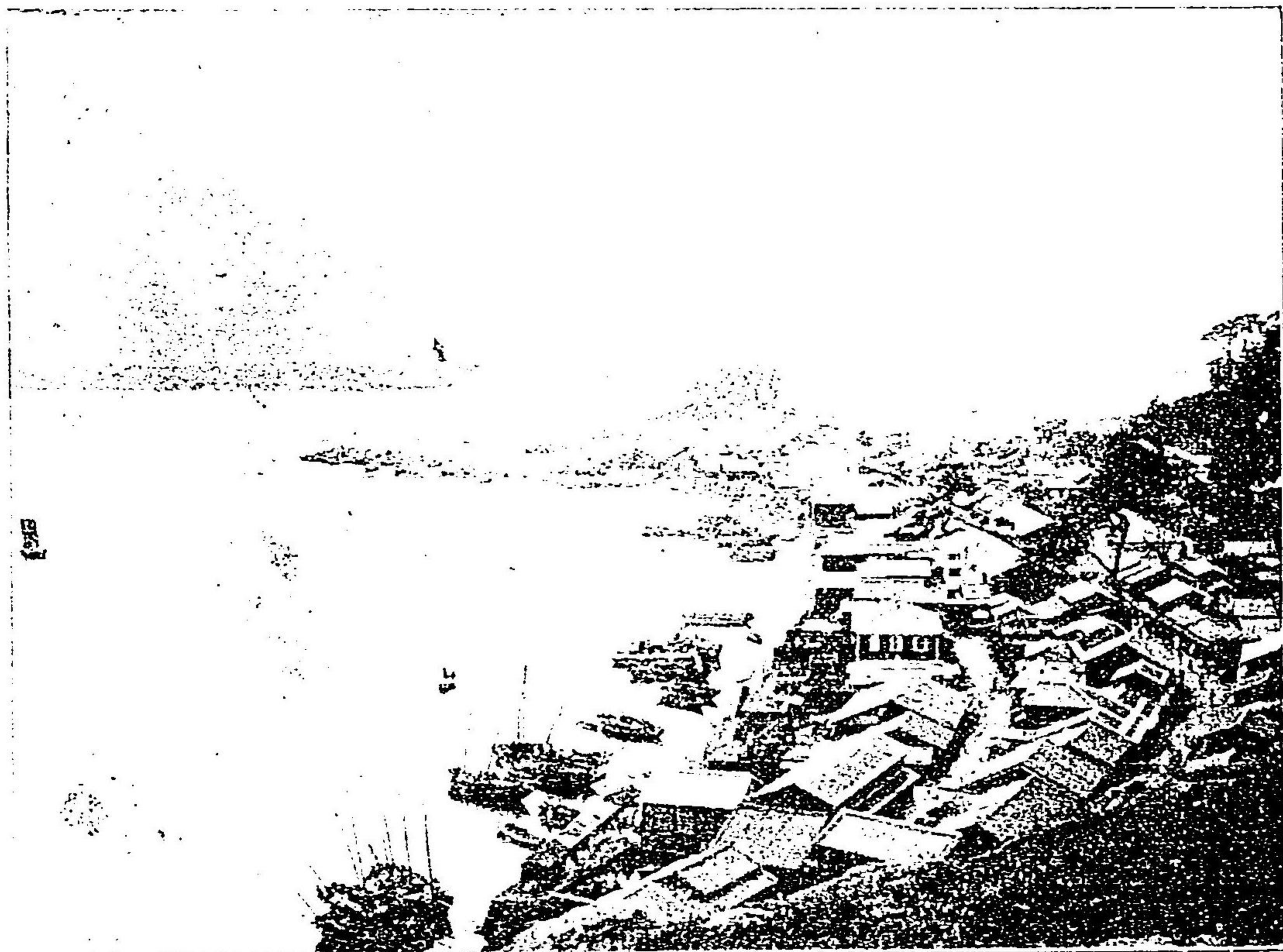
講師 浮田和民
文學士 高桑駒吉 講述

歷史講話

中等教育會



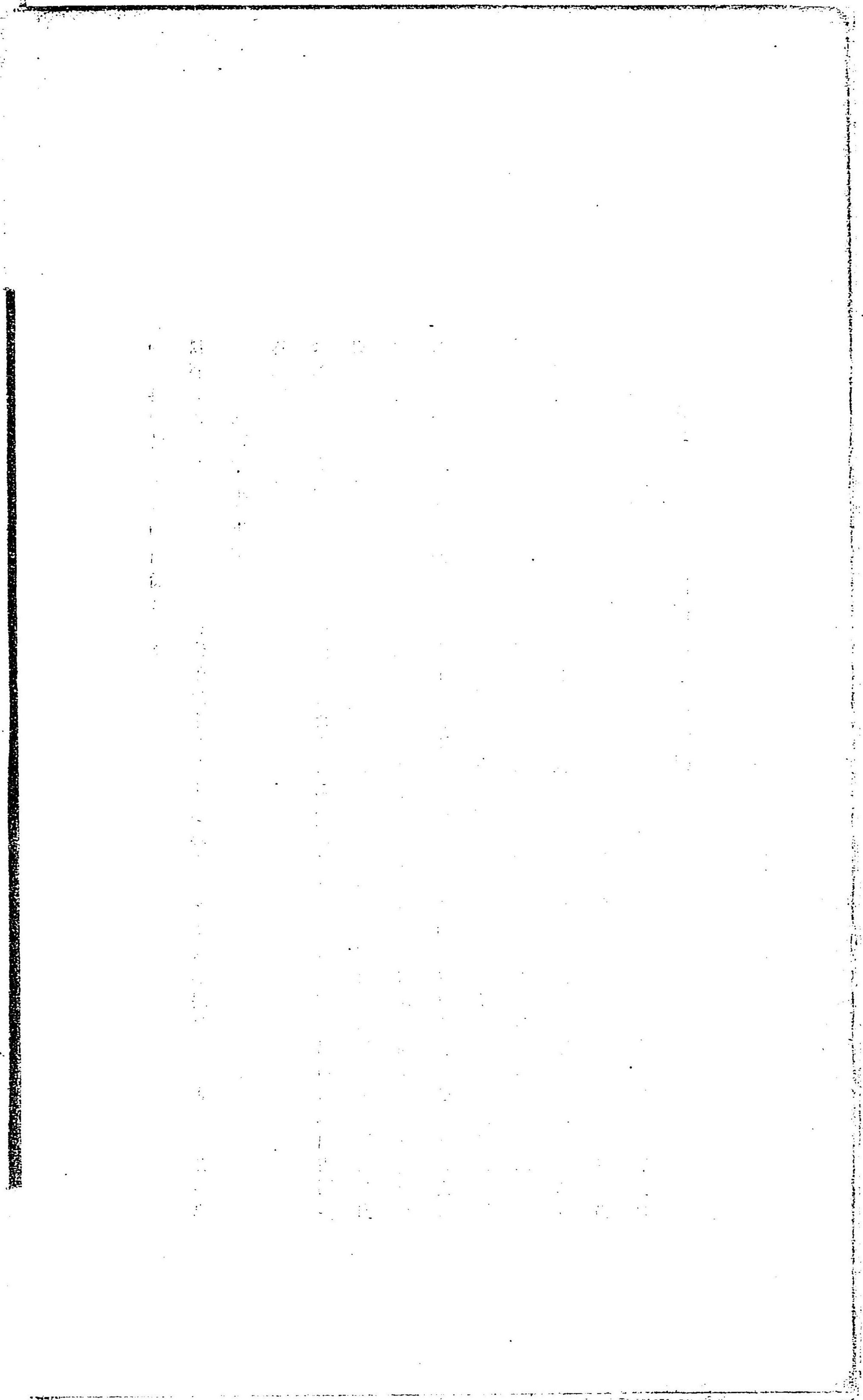
朝野寺小屋



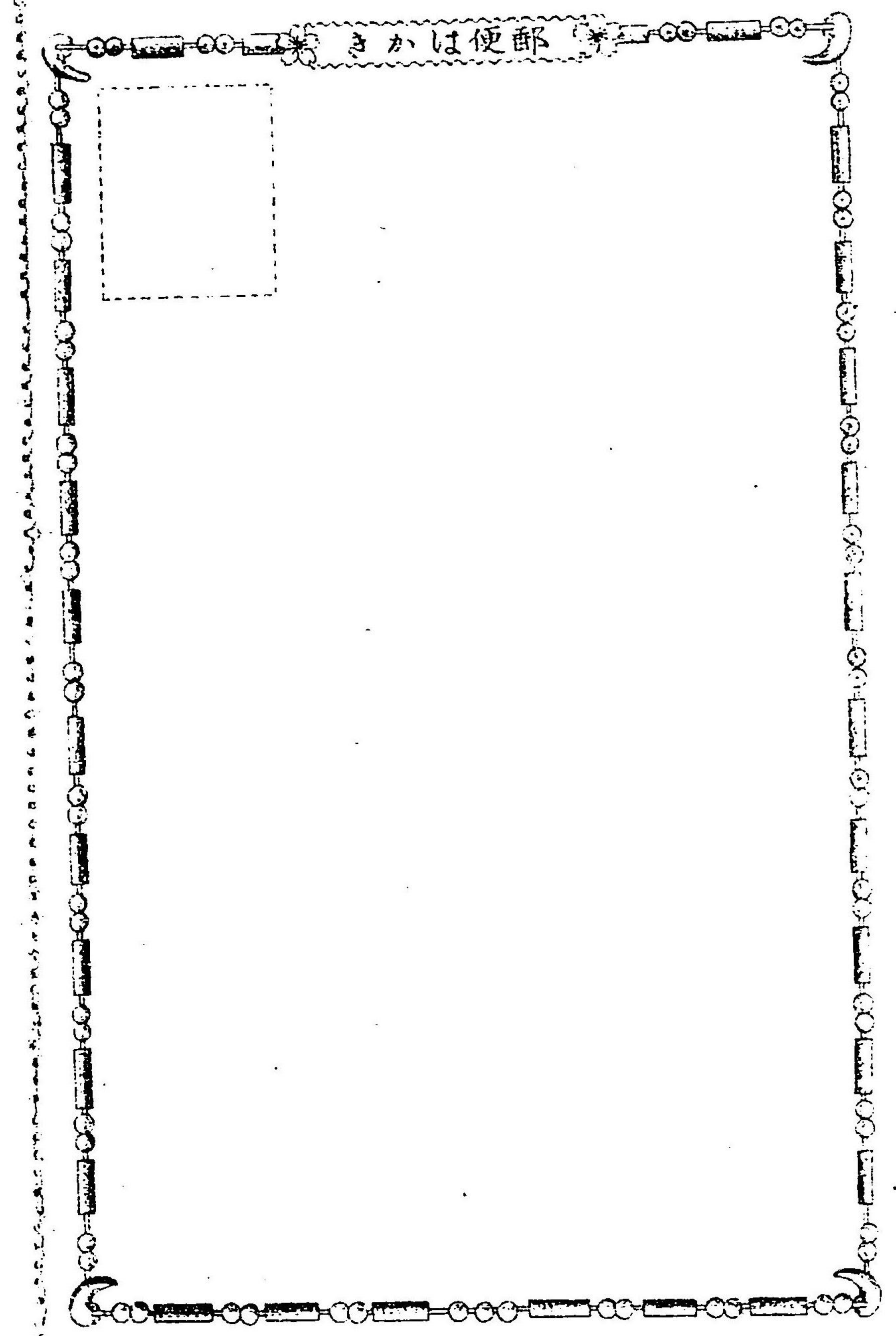
釜山日本居留地絶影島

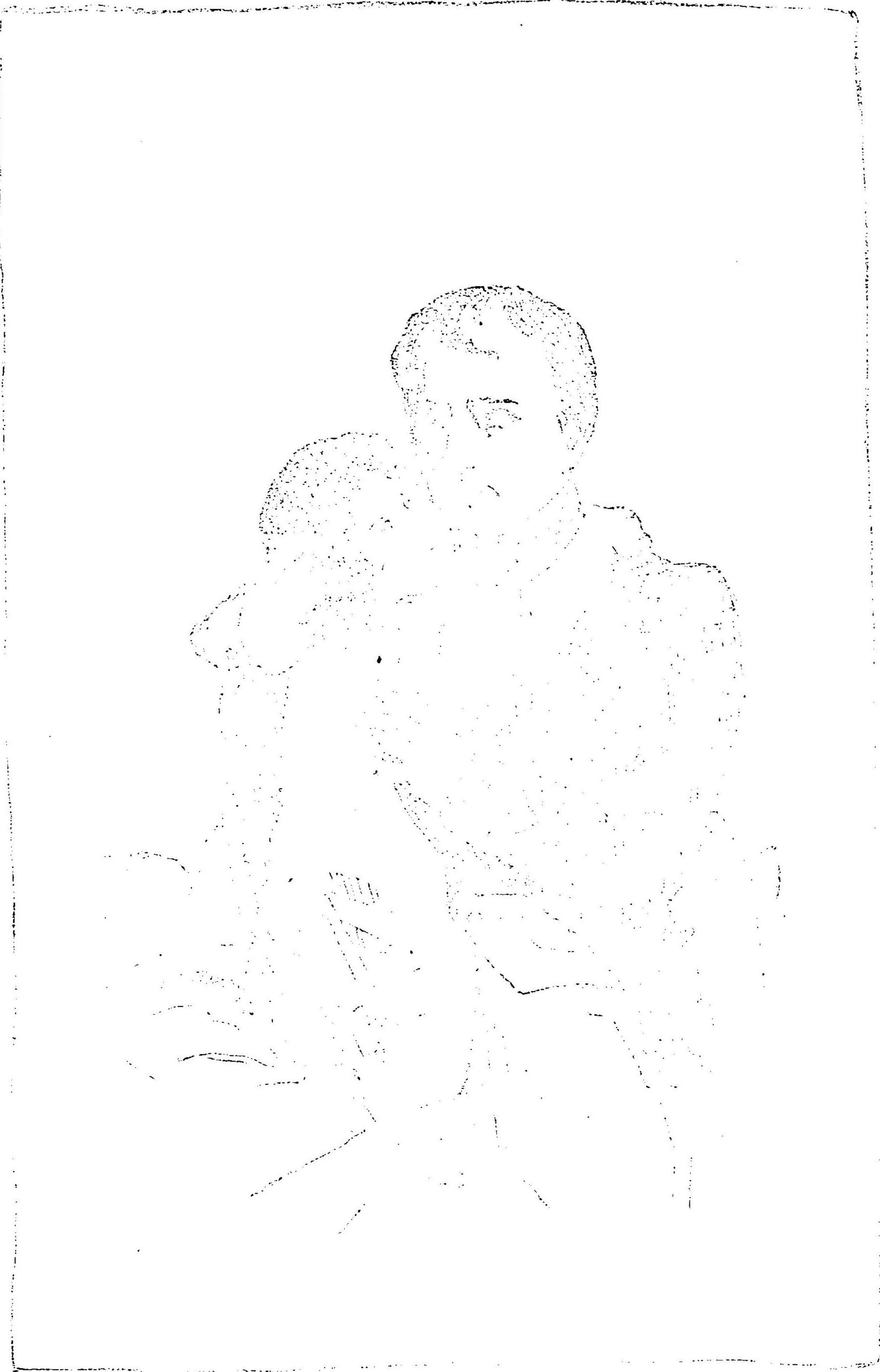


(まかに教育等中)



故今村清之助氏
故エミールユングラ氏



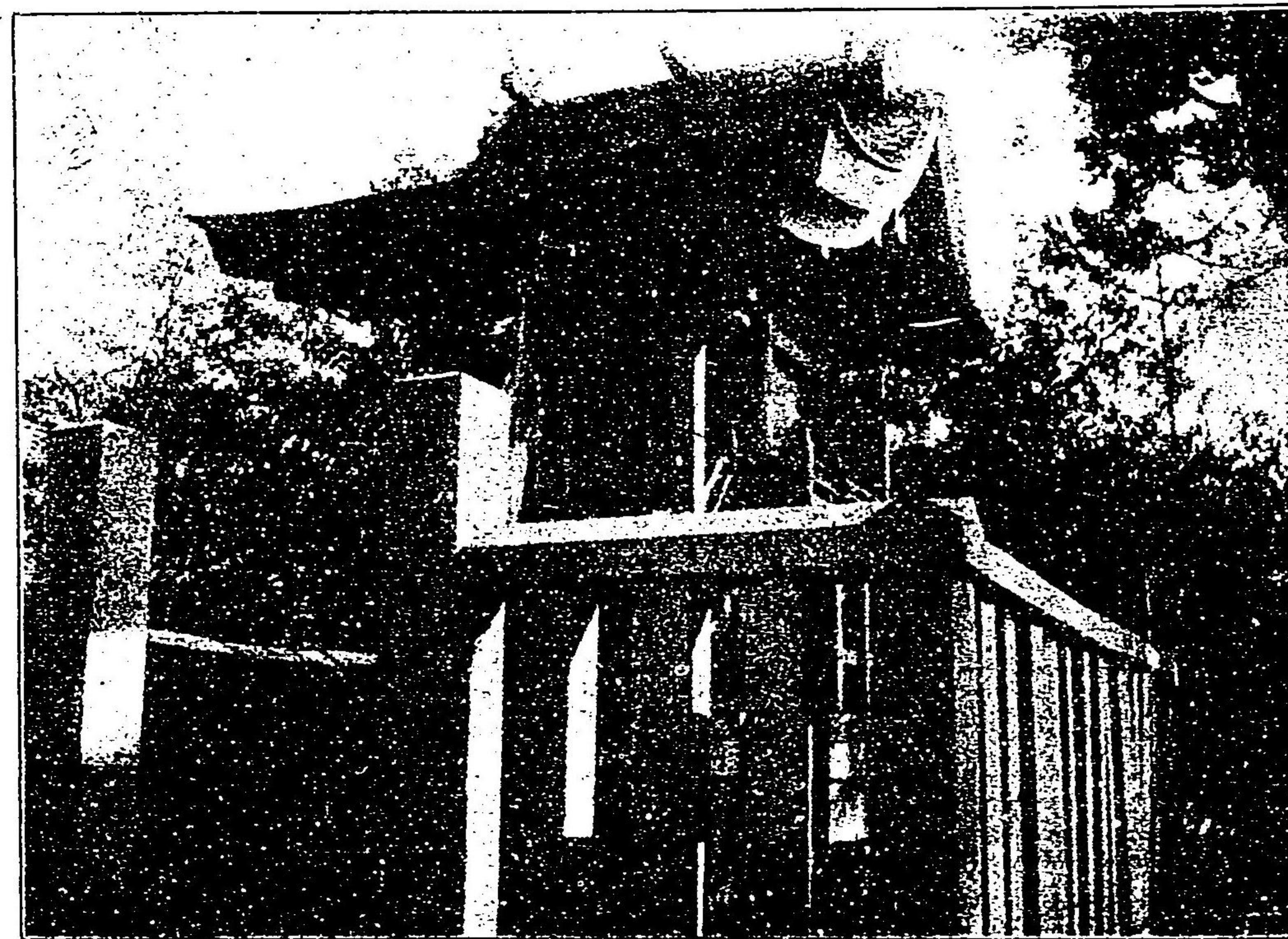


見守る父と子

楠公誕生地と千早城跡



河内國赤坂村楠公誕生地

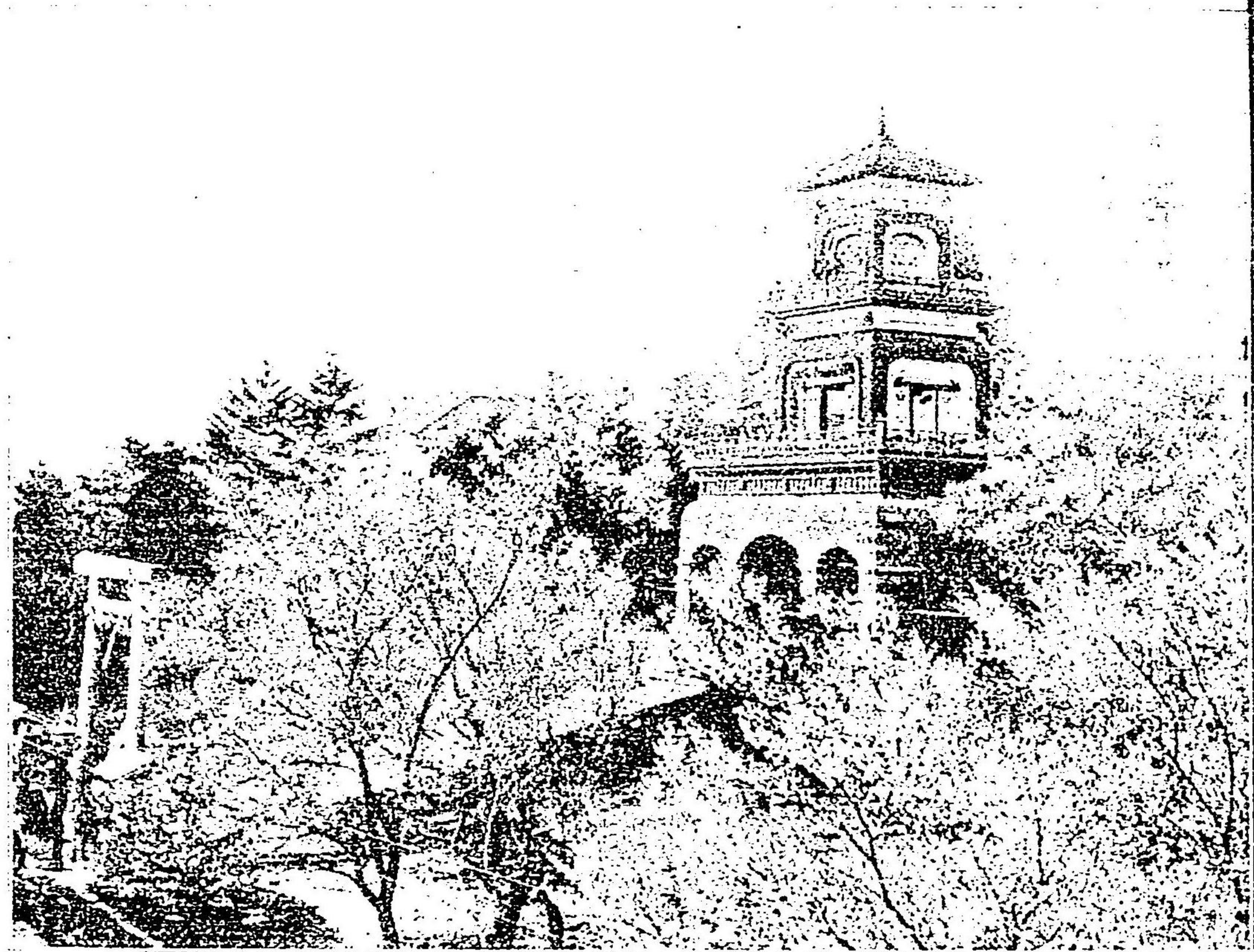


同上千早村千早城跡

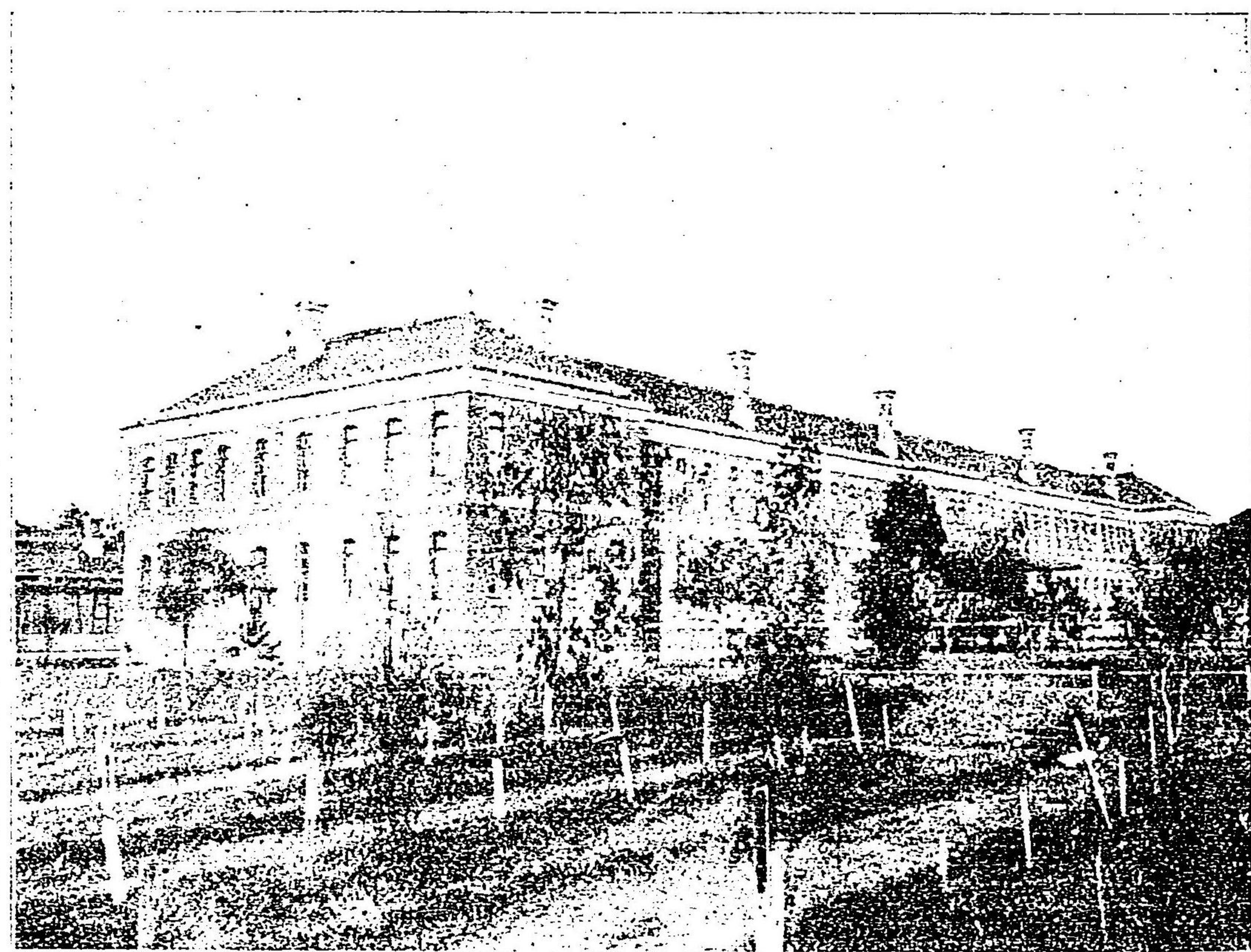
(會員岡田敬一耶氏寄贈)



像のレタピュシ

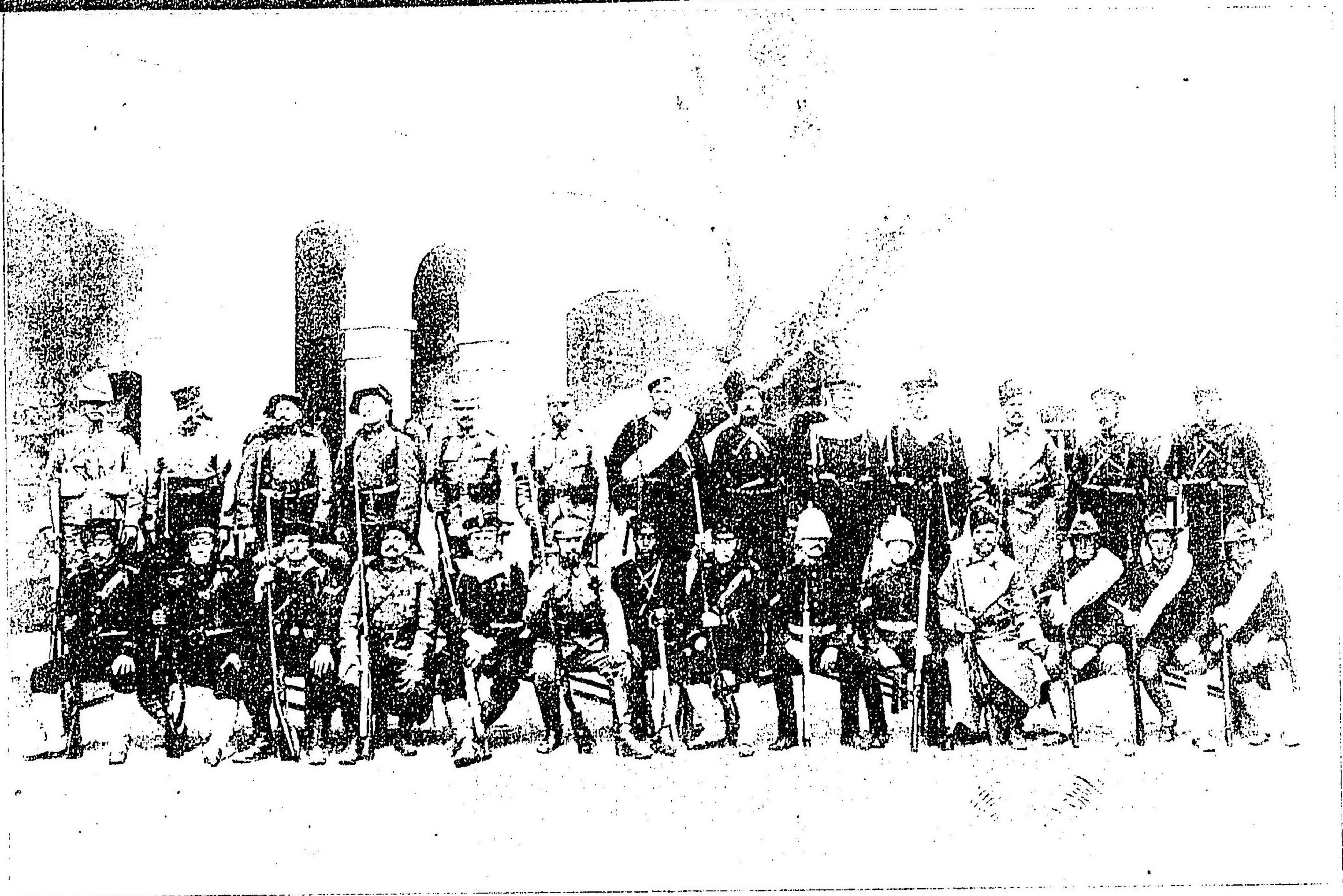


社 神 山 尾 格 別 澤 金



(會員 石川縣 南又平氏 寄贈)

校 學 等 高 四 第 上 同



圖の裝武時戰卒士下隊備守館使公國列京北在



Mr. Gladstone.

Mrs. Gladstone.



小川一景

像 肖 氏 一 景 小



下陸世七ド一ワドエ帝皇國英



(佐藤華江氏撮映)

小川一眞製

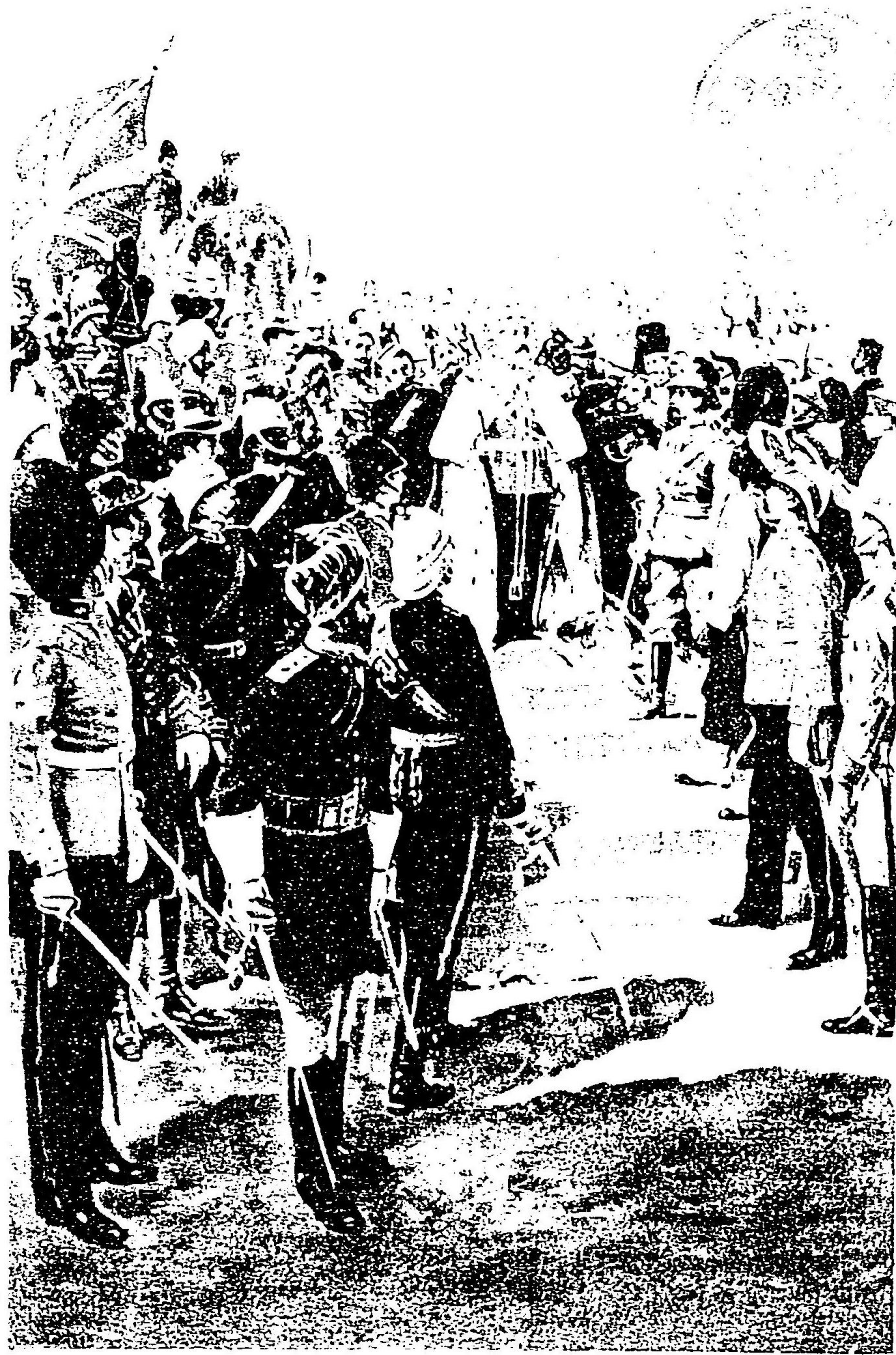
北米合衆國政治家アイラフ氏の車中演説の圖

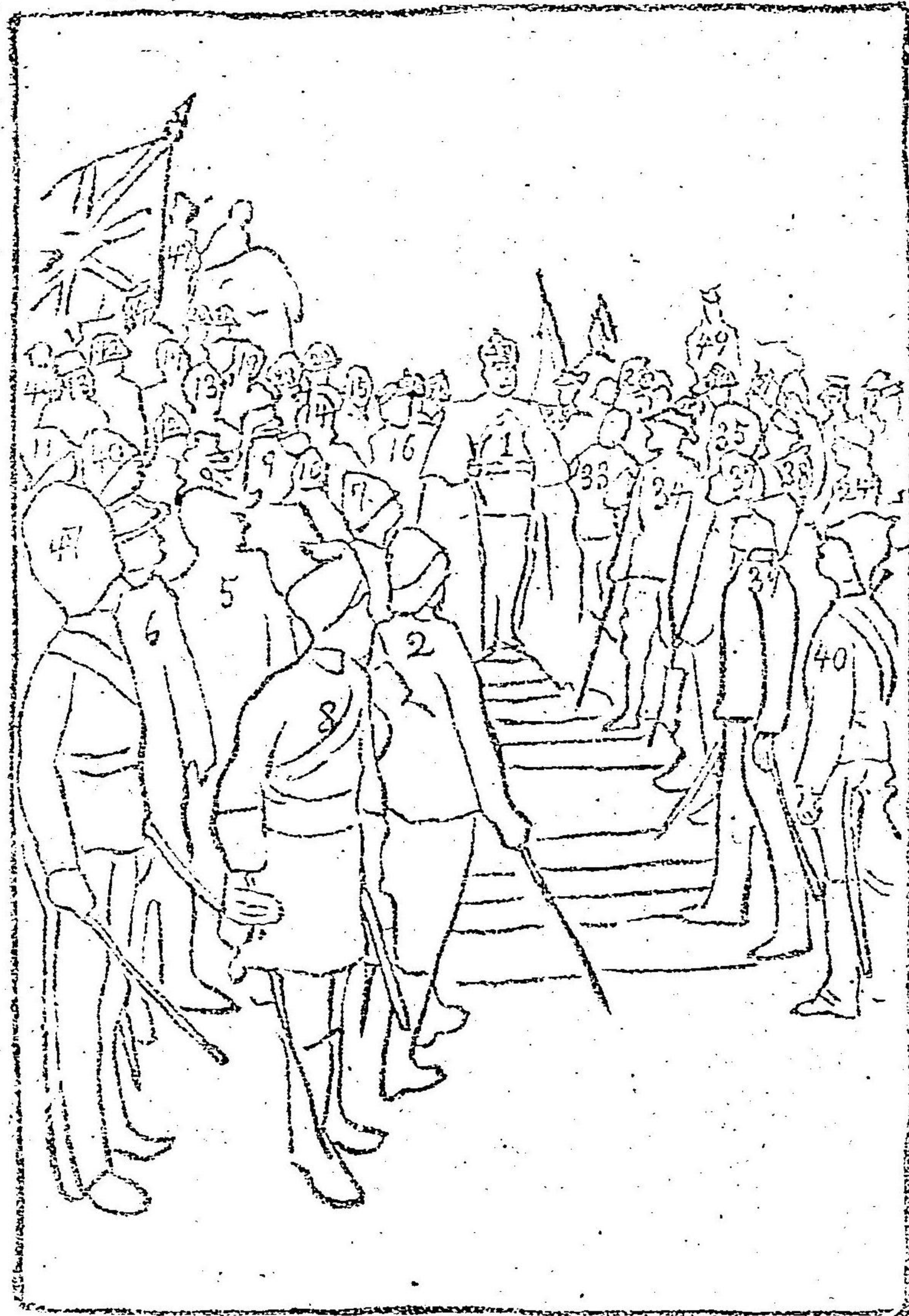


頃は千九百年の夏も早や末つ方の
ことなり前の合衆國大統領マツキ
ンレー氏に對し自由銀派の首領ブ
ライアン氏が大統領の候補を争ひ
し時、いかに其の競争激烈なりしか
は其の當時の新聞紙上にて之れを
詳かにされしことならん。こゝに表
面に刷出せるは其の選舉の當時、北
米合衆國イリノイズ州エツフィン
グハム停車所に於て列車の五分停
車せし際、ブライアン氏を歓迎せん
として群集せし庶民の乞ひを容れて
一等客車の歩場に停みつゝ、喝采の
裡に氏が數分間の演舌を試みし際
の光景を、其の當時イリノイズ寫眞
大學に遊學せし醫學博士佐藤勸氏
令弟華江氏が特に撮映されしもの
なり。



李商隐





歴史

(東洋の部)

地理と人種

文學士 高 桑 駒 吉

亞細亞大陸は天然の形勢によつて、東西南北及び中央の五大部分に分かつことが出来る。其の東方亞細亞と中央亞細亞とを分界せる葱嶺一帯の山脉は實に大陸の脊梁ともいふべきもので、其の脈の横に走つて居るものは、すべて四つある。アルタイ山、一名金山は、最も北方にあつて、北方及び東方亞細亞の界を劃して居り、其の南には天山があつて、謂はゆる天山の南北兩路を分かち、更に、其の南には崑崙山脈があり、西の方はヒンヅクシ山脉となつて、遠く高加索山脉に連り、東の方は西蔵と天山南路とを阻て、其の末は南北の二嶺及び賀蘭陰山の一脈となつて、支那及び蒙古に入つて居る。また最も南の山脉は支那西藏印度の境界をなして居るヒマラヤ山である。

この謂はゆる東洋史は、主として、南はヒマラヤ山、西は葱嶺、北は金山の三山脉に圍

歴史 地理と人種

- 1 エドワード七世
- 2 野戦砲兵
- 3 第二ボクセル銃手
- 4 フォース、ハツサ
- 5 近衛砲兵
- 6 近衛騎兵
- 7 近衛兵の一種
- 8 砲兵の一種
- 9 砲兵の一種
- 10 サイプラス派遣兵
- 11 シヤマイカ歩兵
- 12 ベルムダ砲兵
- 13 ギニア派遣兵
- 14 ケーリナアン砲兵
- 15 ナクル感集砲兵
- 16 カナダバサー
- 17 海峽植民地派遣兵
- 18 マレー派遣兵
- 19 西印度砲兵
- 20 フォース砲兵
- 21 キングストン砲兵
- 22 ケープ騎兵砲兵
- 23 ニューランド砲兵
- 24 ホンコン工兵
- 25 ゴールドコースト砲兵

- 26 ローアミアン騎兵
- 27 北ボルネオ駐在兵
- 28 第四十八ガナダ自由兵
- 29 メイロン騎兵
- 30 クロウランド砲兵
- 31 西オーストラリア派遣兵
- 32 不明
- 33 英領ギニア派遣兵騎兵
- 34 ニューサウスウエールズ砲兵
- 35 カナダ近衛砲兵
- 36 ホンコン派遣兵
- 37 西印度砲兵
- 38 ニューサウスウエールズ野戦砲兵
- 39 ホンコン派遣兵
- 40 不明
- 41 印度歩兵
- 42 等マドラス騎兵
- 43 近衛砲兵
- 44 第十二ベンガル砲兵
- 45 オンタリオ歩兵
- 46 第廿九ボクセル土民歩兵
- 47 カナダ將校砲兵
- 48 不明
- 49 エジプト砲兵隊

まれて居る東方亞細亞に於ける邦國の興亡と、これと直接若しくは間接に、幾多の關係をもつて居るヒマラヤ、ヒンヅクシ兩山以南の前後兩印度アフガニスタン、ペルシヤを含む南方亞細亞と、葱嶺以北シール河に至る中央亞細亞とに於ける諸民族の盛衰とを併せ序するのである。

今地理上から、東洋史の範圍内なる地方を區劃して見ると、東方亞細亞では黒龍江、烏蘇利江以南、興安嶺以東の滿洲地方と、其の西に當りては戈壁沙漠の南北なる内外蒙古地方と、更に其の西方巴顏喀喇祈連兩山間にある青海地方と、また其の西南に當たり、疊山重嶺の内にある西藏と、更に青海及び西藏の北に當たる天山兩路の地を掩ふ回疆と、また是等の地方を塞外として、東方亞細亞文明の中心となつて居る支那本部となどである。支那本部は北には黄河が東流して、河北、河南の地を分かち、南には揚子江が横貫して、江北、江南の地を分かち、西方には四川、雲南、貴州等の地方があつて、別に、山間の一區域をなして居る。支那の東北端には、滿洲の東端に、韓半島が突出して、別に、韓國即ち朝鮮の一區域をなして居るが、其の地の興廢は常に滿洲と相始終して、頗る親密な關係をもつて居る。支那の南方は、海に臨み、其

の西南には、後印度即ち印度支那の諸國があつて、安南は其の最東に位し、其の南に交趾支那、其の西に暹羅があり、暹羅の北に老撾、其の西北に緬甸があつて、印度に連つて居る。印度は北方に越え難きヒマラヤ山の天嶮がある故、古今史上の變異は、常に西北方面、印度河の流域から起こつて居る。印度河以外は、ペルヂスタン、アフガニスタンに接して、更に、中央亞細亞に連つて居る。中央亞細亞は、東の方葱嶺から天山兩路を経て、東方亞細亞に通じ、東西南三方の通衝に當たつて居る故、常に其の影響を受けて、幾多の民族の起仆興廢が頻繁にあつた。此の他、阿姆河以西は、反つて、歐洲の歴史に關係深く、アルタイ山以北は、風土上未だ人文の發達盛んでなかつた爲め、共に、東洋史の中に入らない。

上下數千歳の間、以上の地方に興亡起仆して幾多の邦國を形作つた民族は、如何なる人種であるかといふに、波斯のイラン族、印度のアーリヤ族等のごとく、歐羅亞非利加人種の頗る著るべき事蹟を遺したのもあるが、大体上、東洋史の重要な民族は、皆亞細亞人種である。亞細亞人種には、支那人種、シベリヤ人種の二大別がある。支那人種中、支那本部の漢族は、數千年以前に西方から黄河に沿うて、其の地に移住

まれて居る東方亞細亞に於ける邦國の興亡と、これと直接若しくは間接に幾多の關係をもつて居るヒマラヤ、ヒンヅクシ兩山以南の前後兩印度アフガニスタン、ペルジスタンを含む南方亞細亞と、葱嶺以北シール河に至る中央亞細亞とに於ける諸民族の盛衰とを併せ序するのである。

今、地理上から、東洋史の範圍内なる地方を區劃して見ると、東方亞細亞では黒龍江烏蘇利江以南、興安嶺以東の滿洲地方と、其の西に當りては戈壁沙漠の南北なる内外蒙古地方と、更に其の西方巴顏喀喇祈連兩山間にある青海地方と、また其の西南に當たり、疊山重嶺の内にある西藏と、更に青海及び西藏の北に當たる天山兩路の地を掩ふ回疆と、また是等の地方を塞外として、東方亞細亞文明の中心となつて居る支那本部となどである。支那本部は、北には黃河が東流して、河北河南の地を分ち、南には揚子江が横貫して、江北江南の地を分ち、西方には四川雲南貴州等の地方があつて、別に、山間の一區域をなして居る。支那の東北端には、滿州の東端に韓半島が突出して、別に、韓國即ち朝鮮の一區域をなして居るが、其の地の興廢は常に滿州と相始終して、頗る親密な關係をもつて居る。支那の南方は海に臨み、其

の西南には後印度即ち印度支那の諸國があつて、安南は其の最東に位し、其の南に交趾支那其の西に暹羅があり、暹羅の北に老撾、其の西北に緬甸があつて、印度に連つて居る。印度は北方に越え難きヒマラヤ山の天嶮がある故、古今史上の變異は、常に西北方面印度河の流域から起こつて居る。印度河以外は、ベルヂスタン、アフガニスタンに接して、更に、中央亞細亞に連つて居る。中央亞細亞は東の方葱嶺から天山兩路を経て、東方亞細亞に通じ、東西南三方の通衝に當たつて居る故、常に其の影響を受けて幾多の民族の起仆興廢が頻繁にあつた。此の他、阿姆河以西は、反つて、歐洲の歴史に關係深く、アルタイ山以北は、風土上、未だ人文の發達盛んでなかつた爲め、共に、東洋史の中に入らない。上下數千歳の間以上の地方に興亡起仆して幾多の邦國を形作つた民族は、如何なる人種であるかといふに、波斯のイラン族、印度のアルヤ族等のごとく、歐羅亞非利加人種の頗る著るき事蹟を遺したのもあるが、大体上、東洋史の重要なる民族は、皆亞細亞人種である。亞細亞人種には、支那人種、シビル人種の二大別がある。支那人種中、支那本部の漢族は、數千年以前に西方から黃河に沿うて、其の地に移住

したもので、實に東洋史上に最も大なる事蹟を遺したものである。圖伯特族も支那人種で、史上に顯著なる氐羌月氏吐蕃西夏等の諸民族は、皆是れから起こつた。支那人種中に、また、印度支那族がある。漢族が東下して支那に入る前、黄河楊子江の流域を占領して居たが、後漢族に逐はれて南方の海岸、雲南貴州、後印度方面に退移したもので、古の謂はゆる三苗、荆蠻、後世の南詔等は此の族である。次にシベリア人種は、東方亞細亞の東北から北方にかけて蔓延して居る亞細亞人種で、是れにも、また、數族ある。就中韓半島の北から黒龍江附近にかけて、通古斯族があるが、是れは、漢代の東胡、六朝頃の鮮卑、隋唐間の靺鞨、即ち中唐の渤海、唐末の契丹、宋代の女眞及び現時の清朝も此の種族から出たのである。天山北路の方には蒙古族がある。元朝は此の民族から起つた。故に蒙古、通古斯二族は、支那人種の漢族と合はせて東洋史上の三大族といつてもよい。その他シベリア人種に屬するものには、天山南路から中央亞細亞にかけて土耳古族があつて、古の匈奴、中古の柔然、突厥、回紇及び印度の莫臥兒朝も此の民族から起こり、韓半島の南部から我が邦にかけては、日本族があつて日本及び三韓諸國を起こした。以上は、東洋史中の諸民族の概要で

五

あるが、尙ほ委しくは、本文に入つて其の都度述べやう。

上代の支那

唐虞三代

支那は、東方亞細亞の大平原であつて、東南は太平洋に面し、西南にはヒマラヤ山があり、西は葱嶺、西北はアルタイ山に限られ、北に黄河、南に楊子江があつて、共に西より東に流れ、此の大平原を横断して居る。今を距ること、はば五千年前に漢族が西方より苗族を逐うて東方に來り、黄河の沿岸に留まつて、幾多の部落をなしたが、各酋長を戴いて居て、まだ一統の君といふやうなものはない。その酋長の中で、燧人氏は火食の法を傳へ、伏羲氏は佃漁を教へ、八卦をつくり、神農氏は稼穡交易の道を開いて最も有名なりし故、後世から三皇と稱した。

三皇の後、有熊國、開封府に黄帝が出て、干戈を執つて四方をば征伐し、西は空桐、甘肅州から東は海に至り、北は釜山、直隸省から南は楊子江に至る大帝國を立てた。支那の文明は、上官職衣冠の制より、下宮室、舟車、文字、曆數に至るまで、此の時代に起こ

つたものが多くある。之を支那に於ける統一の始めとする。

黄帝につぎて、顓頊帝せんきつていの二君が出た。帝馨の子の堯は平陽へいりやう山西府に都して居たが、天下に洪水があつたから、鯀に命じ、水を治めしめたが功がなかつた。時に堯は舜を微賤より擧げ用ゐて帝位を譲らんとしたるに、鯀は共工驩兜三苗の族を結託して、之に反抗した故、舜は堯を相けて、此の四凶を除き、遂に讓を受けて位に即き、蒲坂ぼんぱく山西府に都して、鯀の子禹を擧げ用ゐ、洪水を治めさせた。禹は四載に乗り、海内を巡りてよく治平の功を全くした。舜の時代には、中央に司空司徒以下の官を設け、地方には、四岳十二牧などの職を置きて、巡狩朝貢の制を始め、天下が大に治まつた。而して、堯は唐から起こり、舜は虞から出た故、此の時代を唐虞の世と稱し、後世聖代を稱するには、必ず此の代を推すことゝなつて居る。また、黄帝より舜に至るまでの五人を五帝といふのである。

禹は水を治めた功績を以て、舜の禪を受けて、國を夏と號し、安邑あんいふ山西府に都したが、自ら嘗て難苦を嘗めたから、よく民力を休養させた故、民其の徳に服して、禹の死後、其の子の啓を立てた。支那に於ける王家の世襲は、此の時より始まつたのである。

る。啓の孫の相の時に有窮ゆうきゆう山東府の後羿と稱する者、其の臣の寒浞と亂を作した。が、小康の出づるに及んで、之を討ち平らげ、夏道を中興させた。小康の後十一傳して、桀王に至り、暴虐であつた故、民心を失ひ、遂に商の湯王に攻められ、夏國は亡びてしまつた。

湯王は舜の司徒契の後で、商しやう陝西府の君であつたが、賢人伊尹を用ゐて、内には民心を收め、外は諸侯を服し、遂に夏の桀王を南巢に放ち、王位に登つて、亳はく河南府に都して、國を商と號した。其の後、商は盤庚の時に至つて、王室の衰へたのを回復し、都を殷いん河南府に遷した。殷の國號は是れから起つたのである。然るに、其の後、紂王の時になると、税を重くし、刑を峻くし、淫虐を縱にして、箕子微子比干等の諫を用ゐなかつた故、百姓は怨望し、諸侯は離叛して、遂に周の武王に滅ぼされた。

周は姬姓で、其の祖先は舜の後稷しやくから出たといふことである。其の後、古公亶父の時になつて、獯鬻を避けて、岐山きしやん陝西府鳳翔の下に移り始めて、國を周と號した。亶父の孫の昌は、殷の世に西伯となり、徳高くして、諸侯多く之に歸服し、天下の三分の二を保つて居たことである。昌死したる後、其の子の發は、呂尙即ち大公望

の謀を用る諸侯を率ゐて殷の紂王を破り天下を取つて鎬京（陝西西安府）に都を定めた、そこで父昌を追尊して文王といひ宗室功臣を諸方に分かち封じて五等の爵を立てた。周の武王といふは此の人である。武王が死んで後其の弟周公旦が成王を佐けて天下に臨み制度禮樂を作つて範を後世にまで垂れ其弟召公奭もまたよく王室を輔翼した。故成王の子の康王の世を終るまで周は最も隆盛を極めた。然るに康王の孫の穆王は遠略を大層好んで天下を周く遊び歩るき遂に諸侯の心を失ふに至つた。其の後厲王に至つて暴虐で人民を苦しめた故國人に逐はれたから、そこで宰相等が共和の政を爲すこと十四年間であつた。其の子の宣王が立つと猥狃（狃）及（及）び准夷徐夷などを征服して中興の業を成したが終に周初のやうな盛大には恢復することが出来なかつた。後幽王は褒姒を寵して犬戎に弑せられ其の子の平王は戎狄の勢をさけて都を東の方洛邑（河南府）に遷した。是れが周の東遷である。是れより後は諸侯が強横を極めて王の命令を奉ぜず蠻夷は連りに中國を侵して周は王家の名のみあつて統治の實権がない有様となつた。

歴史 (東洋の部)

文學士 高 桑 駒 吉

上古の支那

春秋の世

周は東遷の後勢が衰へて天下を統治することが出来なくなつた故諸侯の大にして有名なる者が出て内は王室の衰微を扶け外は夷狄を攘ふを名として威を天下に振うた。即ち諸侯中の長たる故を以て之れを覇者と號するのである。周の平王の頃には諸侯の数が百數十あつて其の大なるものには周と同姓の者に魯衛晋鄭曹蔡燕の七國があり異姓のものには齊宋陳秦楚の五國があつたが就中覇者の業をなした者は齊宋普秦楚の五國であつて之を五覇といふのである。五覇の外に鄭吳越もまた一時甚だ勢力があつた。さて魯の孔子が此の時代の歴史を修めて春秋と名づけた故後世之れを春秋の世といふのである。

春秋の覇業は齊の桓公に始まるのである。齊は周の元勳たる品尙即ち大公望

の封ぜられた國であつて、薄姑 山東省青州府博興縣に都して居た東海の重鎮で、征伐の權を委任されて居た。桓公に至ると、管仲を重く用ひ、税法、兵制を改革し、富強を圖り、諸侯を北杏山東省泰安府東阿縣に會合して、宋の亂を平げ、次いで魯の侵地を回復し、衛、邢諸國の夷狄に苦しめらるゝを救うて、大に邊境を安んじ、終に、霸者となつた。時に、顓頊の裔孫たる楚の熊渠は、王室の衰微に乗じて、江漢の間を取り、遂に王號を僭して居たが、其の後、武王、文王などの英主が出て、淮南の諸國を併せ、湖北に雄視し、尙ほ北上して中國の方へと迫つて來た。此の時、桓公は、楚を召陵河南省許州府偃縣に屈服させたが、管仲の死んでから以來、間もなく、齊の勢は振はなくなり、次いで桓公が死ぬと、つひに霸業が衰へてしまつた。宋の襄公は、桓公に代はつて一時諸侯を統べて居たが、楚の爲めに泓河南省柘城縣に破られて、其の霸業を墜とした。是れより先き、晋の獻公の子の重耳が國難を避けて十九年間諸國を流寓して居たが、恰も此の際、秦の穆公の助によつて國に歸り、遂に中國の盟世となつて、赤狄を逐ひ、攘ひ、周室を安んじ、また、楚を城濮山東省濮州府濮州に破つて、其の北上の勢を挫いた。晋の文公といふのは、即ち此の人である。後、其の子孫は、皆よく其の遺業を守つて、秦楚と鼎立し、諸侯の間

に重んぜらるゝこと二百餘年の久しきに及んだ。

秦は嬴姓で、襄公の時に周の平王の爲めに、犬戎を攘つた功によつて諸侯となり、周室東遷の後、其の故地を獲て始めて強大になつたのである。晋の文公が歿して間もなく、秦の穆公は、百里奚、蹇躄などを用ひて、鄭を襲ひ、滑を滅ぼし、晋を破つて、河西の地を得た。また、戎を攘うて、土地を拓くこと千里、終に、西方諸侯の霸となつた。後來、秦の起こつたのは、此の時に、其の基礎を置いたのである。此の時、楚には、莊王が居て、庸を亡ぼし、宋を伐ち、陸渾の戎を攘ひ、遂に、兵を洛水の邊に觀して、周室を侮蔑し、また、晋軍を邲河南省開封府鄭州に破つて、威を中國に振うた故、諸侯皆、其の命令に従うて居たが、共王、康王を経て、昭王に至ると、國勢が頗る衰へた。

吳の先は、周の文王の伯父、太伯から出たので、姑蘇江蘇省蘇州府に都して居た。壽夢の時になつて、國勢が強大に赴き、晋と同盟して、頻りに楚を侵略して居た。闔閭が國を承くるに及んでは、楚の昭王の亡臣、伍員の謀を用ひて、兵を發し、大に楚を破つて、其の都を陥れ、之れに代はつて、南方の羈權を握るようになった。然るに、後年、越が新たに興つて、南方から吳を侵した故、遂に、吳越の争が起つた。越は、夏の小康の

後で會稽浙江省紹興府に都をして居た。允常いんじやうの時にになると、屢々、吳と戦ひ戦ふごとくに敗れて居たが、其の子勾踐こうせんの時には、吳王闔閭かうりよを破つて父の辱を雪ぎ、遂に王號を僭するようになった。闔閭の子夫差たさは薪に臥し膽を嘗むること三年にして、大に越を破り、前敗に報いたが、勾踐は身を屈して吳に降り、范蠡はんらい、文種ぶんしゆの謀を用ゐて力を養ひ兵を練つて恢復を謀つて居た。然るに、夫差は越に勝つた勢に乗じて、北の方中國に入り、諸侯を黃地河南省開封府封邱縣に會合して居た所へ、勾踐が其の虚を襲うて、遂に吳を滅ぼし、其の土地を併せ、淮を渡つて諸侯を徐州山東省嶧縣州府に會し、貢を周に致して、中國の羈權を乗ることゝなつた。之れより先き、數年、魯國で麟を獲て、孔子は此の時を以て春秋の筆を斷つた。晋に、周室東遷以來、こゝに至るまで十五主、凡そ二百有餘年である。

周の制度文物——孔子

周の禮樂制度は夏殷の制を折衷し、これに周公の創意を加へた者であつて、後世歷朝の模範となつた。抑、上世の支那は封建制であつて、其の制が夏殷の際に、稍備はり、周に至つて完全した即ち、公侯伯子男の五等の爵を立て、公侯の封地は方百里

で之れを大國といひ、伯の封地は七十里で之れを中國といひ、子男の封地は方五十里で之れを小國といふた。而して、五十里に満たぬ者は、附庸として諸侯に附屬させて置いた。王の領地即ち王畿は千里で、其の中央にある。畿外は五國を屬とし、二屬を連とし、三連を卒とし、七卒を州とし、天下を九州に分かつて、伯正、帥長を置いて地方を制馭した。

周の職官は、天子の顧問に大師、大傅、大保の三公と少師、少傅、少保の三孤とがあつた。行政官には、天地春、夏、秋、冬の六官があつて、其の屬各六十あつた。天官は冢宰を長として、萬政を總べ、地官は大司徒を長として、教化を掌り、春官は大司馬を長として、祭祀禮樂を掌り、夏官は大司馬を長として、兵馬を掌り、秋官は大司寇を長として、刑辟を掌り、冬官は大司空を長として、百工を掌る。田制は、夏の時、毎戸に田五十畝を授け、其中五畝の所得を朝廷に納れしめ、貢法といひ、殷の世には一區七十畝の田地を九區に合はせ、之れを一井と稱して八家に授け、中一區の收入を税とした。井田の法即ち助法といふのは即ち是れである。周に至ると百畝を一區として、井田法と、夏の貢法とを通じ用ゐた故に、之れを稱して徹法といふのである。故に周

の王畿は方千里にて山川邸宅を除き、略ぼ六十四万井田を得る割合で、六十四井を
 一甸として万甸あり、甸毎に一車四馬百兵士を徴發するのである。兵士は五人を
 伍とし、五伍を兩とし、四兩を卒とし、五卒を旅とし、五旅を師とし、五師を軍とする制
 で、天子の軍は六軍七万五千人である。刑は、上世既に墨、劓、剕、宮、大辟の五種あり、周
 の初めに流、扑、徒、贖があり、其の後夷、族、車、裂、體、解の酷刑を生じた。教育は大學では
 有爵者の子弟に禮樂詩書を授け、州に序、黨に庠、閭に塾などの學校があつて、人民の
 子弟を教へた。文字は上古は象形文字を用ひ、伏羲氏は八卦を劃し、蒼頡は黃帝の
 時に文字を作つた。周の宣玉の時に及んで史籀が大篆を作つて文字漸く進歩し
 後、秦の時にいたつて小篆、隸書を生ずるようになったが、當時はまだ筆紙はなく、竹
 木を編んで卷物とし、鐵筆を以て字を刻して居た。書は三墳、五典、八索、九丘などが
 あつたが、今存して居らぬ。今存する古書で、尙書は唐虞三代の績を傳へ、易は諸學
 の本となつたもので、詩は三代の歌謠を傳へ、周禮儀禮は禮法制度を傳へたもので
 皆當時の文運を觀ることが出来る。樂は黃帝の時伶倫が十二律を作り、周に至つ
 て治國の要具となつた。併し、文物典章の盛美は、虛禮飾文に陥つて、綱紀弛び、言論

自由の道開けたから、治國濟民を説く者が多く起つた。就中、楚の李聃は老子五
 千言を著はして、禮制智巧の末を排し、無爲道德の説を唱へたが、終に世を遯れて終
 はる所が知れぬ。聃よりも少し後れて、魯に孔丘が出た。孔丘は字を仲尼といつ
 て、周の靈王の二十一年、即ち西紀前五百五十一年、（終靖）天皇に魯に生まれ、列國を周
 遊して、儒教を説き、仁道を基礎として、修身治國の術を唱へたが、當世に納れられな
 かつたから、退いて先王の禮樂を修めて、易書を明らかにし、詩謠を整へ、春秋を作つ
 て、道を後世に垂れ、年七十三で死んだ。其の弟子三千人の中、六藝に通ずる者七十
 餘人あつたと云ふことである。漢の世に至つて、孔子の教は大に用ゐられ、終に後
 世政教の本となつて、東洋道德の典範となるに至つた。

戰 國

春秋の世、周の王室は既に主權がなかつたが、尙ほ幾分か王家の威を保つて居た
 故、五霸交々起つたけれども、尙ほ必ず尊王を口にして民心を攬つて居たが、王室の
 衰微は年と共に甚だしくなつて、恢復の望み無く、諸侯の勢力日に強大に赴いて、大
 諸侯は何れも皆、侵略兼併を事とし、遂に自ら王號を僭するものあつて、復た一人の

且つ列國の諸侯も或は合従をなし、或は連衡を試みなどして、互に紛争を極めて居る間に一方にて秦は獨り着々として富強の策を講じて一統の計を回らして居た。後、幾ならず、齊、魏は趙を襲ひ、楚は三晋を攻め、齊の湣王は宋を滅ぼし、燕を破つたが、燕の昭王は樂毅を用ゐて齊の七十餘城を降し、殆ど齊を滅ぼさむとした所へ齊の人田單が起こつて燕軍を破り、其の侵地を恢復した。此の間に、秦の勢力は益々強盛となり、惠文王は司馬錯を遣して巴蜀を収め、武王は甘茂をして韓を侵略せしめ、昭襄王になると、范雎の勧めに従つて遠交近攻の策を用ゐ、諸侯を孤立せしめ、また白起を將として頻りに三晋を攻めて、趙軍四十萬人を長平山西省澤州府高平縣に坑殺した。此の時に、周室は東西に分かれて居たが、西紀前二百五十六年、西周の赧王は秦の勢に恐れて地を献じて降つてしまひ、後七年を経つと、東周の惠公も、また、秦に降つた故、周は遂に亡びた。魯も此の年に亡ぼされた。周は、武王から是に至るまで、惠公を合はせて三十八代、八百七十四年である。

秦は、昭襄王の後二世を経て、嬴政に至つて、李斯の計を用ゐ、頻りに反間を放つて六國の君臣を離間して置いて、後から將を遣はして攻むるといふ手段を取り、遂に

西紀前二百三十年に至つて先づ韓を滅ぼし、後二年に趙を滅ぼし、更に三年を経ると魏を滅ぼし、また二年の後に楚を滅ぼし、翌年に燕を滅ぼし、また其の翌年に齊を滅ぼした。是に於て、六國は悉く亡びて、衛君だけ獨り存立して居たが、秦の二世皇帝の時に廢されて、封建諸侯は、こゝに悉く其の跡を絶ち、天下を舉げて皆秦の郡縣となつた。

福島正則の花押



小早川隆景の花押



●支那史籍と佛教傳來

支那史籍に就き佛教傳來の跡を尋ねるに、佛祖統記周の昭王の廿六年(二十四年又九年とするもあり)四月八日の條に

江河池井汎溢、宮殿大地震動五色光氣入

貫太微偏於四方王問太史蘇由曰若

何祥乎對曰有太聖人一生於西方一千年

外聲教及此王命鑄石置之南郊天詞前

とあり。又全書穆王五十年壬申二月十五

日の條に、周書異記の説を載せて曰く

壬申歲二月十五日暴風忽起發屋折木山

川震動西方負白虹十二道南北通貫王問

太史屠多一對曰西方大聖人給亡之相

而して、此に所謂西方大聖人とは、釋迦牟尼

を示せるものなりとの説あり、佛祖統記の

編者の如きも説をなして曰く

佛法東流蓋已肇於穆王之世造像建寺

悉遵先佛之舊制(○中略)至漢明應安

夢三寶並與君臣庶民翕然歸命此蘇由所

謂一千年外聲教及此語應也

即ち佛教の感化の支那に及べるは、周の穆

王の時即ち紀元前七五〇年頃にありとす

ものなり、(史學界)

歴史 (東洋の部)

文學士 高 桑 政 吉

釋迦以前の印度

印度は釋迦の出た國であるので、我が邦にはよく知られて居るが、其の國名は、其の西北の地方を流れて居る大河の名信度(Sind)即ち今の印度河から出たのである。其の隣國の波斯人はシンドを訛つて、ヒンド(Hind)といひ、波斯人から聞いた希臘人は、更に訛つてインド(Ind)というたから、遂に、印度となつたのである。英語でも、Hを發音しない例が多くあるから、ヒンドがインドとなつたことは、讀者はすぐ了解するであらう。そこで、支那人が此の國の名に身毒といふ字をあてたのは、シンドと聞いたからで、捐毒天竺などは波斯語の發音を寫したので、印度の二字は中央亞細亞邊に殖民して居た希臘人から聞いたからである。印度人の祖先は、歐洲人の祖先と同じくアールヤ(Arya)人であつた。アールヤ人は、もと中央亞細亞の地方に居たが、漸々に諸方に向かつて移轉し始め、西の方に進

んで行つたものは歐洲人となり、南に進んだものは印度人と波斯人となつた。印度に移つて来たアールヤ人がヒマラヤ山の西を越えて印度の西北に出で、始めて大河を見て之れに海といふ名を附けたから、遂にシンド河といふ名が出来、今では印度(Indus)河といふのである。併しアールヤ人が移住して来る以前に既に印度にはドラキダ人といふ種族が土着して居たが、アールヤ人は、忽ち彼等を征服して先づ印度河の近傍パンジアブ(Punjab)の地方に土着したのは西紀前千五六百年即ち我が神武天皇即位紀元前千年頃のことである。此の頃の印度人の宗教は自然力の崇拜で、神にはヴルナ(Varna)といふ虚空の神や、インドラ(Indra)といふ雨の神や、アグニ(Agni)といふ火の神や、スールヤ(Surya)即ち太陽などを始め、其の他の三十三神があつた。是等の神々を拜む時に歌ふリグ・エダ(Rig Veda)といふ頌歌が、今傳はつて居るが、これによると、此の頃の印度人は、既に一定の開明に進んで居て、農業にも牧畜にも従事して居り、金銀を以て軍器や裝飾品などを造り、戦争には車や馬を使用し、また商業を営み、黄金の貨幣を使用して居たことが知れる。

アールヤ人が更に東方に進んで行つて、西紀前千年頃、遂に、ガンジス(Ganges)河の畔

に、多くの小王国を建て、漸次に東南の地方を侵略しつゝ、進んで、西紀前第五世紀の頃になると殆んど全半島を占領した。

印度人中には、もと階級や職業などの區別はなかつたが、中印度に移つて其の領地が廣大になり、人口もまた増加するようになり、分業が行はれて、祈禱祭祀の事を掌る婆羅門(Brahman)即ち僧族、文武の諸政を掌とる刹帝利(Kshatriya)即ち武士、商工業に従事する吠舍(Vaishya)即ち平民、賤業を採り、若しくは奴隸となりて使役せらるゝ戍陀羅(Sudra)即ち賤民の四種姓の區別が出来て、尊卑が定まつた。但し、婆羅門刹帝利吠舍の三者はアールヤ人であるが、戍陀羅は被征服者の子孫で、ドラキダ、其の他の非アールヤ人である。

此の頃から印度の宗教も、漸く變化し來たり自然力崇拜の多神教廢れて神學的なる婆羅門教を形成した。婆羅門教にては、これまでの諸神は皆自然力を表章したもので、太陽、雨、虚空、風、曙光などは皆造化の力を離れて成立することは出来なく、此の造化の力はブラマナ(Brahmana)即ち創造者、ヴィシュヌ(Vishnu)即ち保持者、シヴァ(Siva)即ち破壊者及び再造者の三つに現はれるもので、自然力は皆此の造化力の現象に

外ならずとするのである。此の教義の解釋のしやうによつて遂に數十派の婆羅門哲學が興つた。これと同時に科學の研究が盛んになつて語學、數學、曆學、醫學等の發達が著しく遂に近世に於ける科學の進歩と殆ど大差なき有様となつたのは、他の古代國民の及ばぬ所である。西紀前七八世紀の頃にはパニニ(Panini)といふ人が出て發音の事や語句の組織のことを完成して種々の語法規則を發見した。幾何學は希臘人固有の科學で、其の定理は西紀前六世紀の頃に大成せられたように信ぜられて居るが、更に古い印度の書籍に幾何學を説いてゐるのを見ると希臘人は却つて之れを印度人から學んだのであらう。算術も印度人の發明であるが、殊に小數の書き方の如きは希臘人や羅馬人の知らなかつたのに、印度人は既に知つて居た。後印度人と交通したアラビア(Arabia)人が之れを學んで始めて歐洲に紹介したのである。曆學に於ても此の頃の印度人は一年を三百六十日とし、之れを十二ヶ月に分け、一月を二十七乃至二十八日とし、更に五年に一回宛の閏月を置き、又太陽が兩回歸線の間を運行するのを測定した。醫術もまた此の頃既に發達進歩したことは、パニニの文典中に許多の病名を記してゐるのと、此の後西紀前四

五

世紀に希臘のマセドニア(Macedonia)王アレクサンドル(Alexander)大王が印度に侵入した時、印度の醫師を營中に留めて置いて、希臘人が治療することの出來ぬ病氣を診治させたといふことを見ても知れるのである。

此のごとく婆羅門族は宗教、哲學、及び學術に於て精神上の大權を專有して居つたのみならず、自己の階級に好都合なる摩拏法典のごとき法律を發布して政治上社會上にも權力を握つて頗る專横を極め、他の種姓を虐待すること甚だしき有様であつたから、刹帝利族のものが先づ起つて抵抗を始め、次いで婆羅門族の學者中にも自己の種族の腐敗を攻撃するものが多く出るようになったが、遂に西紀前五六世紀の頃に當つて佛教の祖師釋迦牟尼(Sakyamuni)が刹帝利族の中から起つて一大革新を實行した。

釋 迦

釋迦牟尼、姓を喬答摩(Gautama)といひ名を悉達(Siddhatha)というて、中印度迦比羅伐卒都(Kapilavasthu)の王首領擅那(Suddhodana)の子で、西紀前五五十七年即ち我が綏靖天皇の二十五年に生まれた。是れより以前のものとなるが、印度河の河口補

曾て田園に出て一小蟲が農夫の鋤の先きにかゝつて死ぬのを見ては憐れに感じ、市街に出て髪は白く齒は落ち杖にすがつて歩く老人を見ては壯年の永く頼むに足らざることを思ひ將に死にかゝつた病人を見ては人は何時病苦が襲ひ來るかも知れずと悲しみまた葬式に臨んで其の親族が棺を圍んで號泣するを見ては人命の長からざるを悟つて益々無常の悲觀に陥つた。恰も此の時耶輸陀羅は其の子羅喉羅(Rahula)を生んだが太子は益々世累が重くなつて容易に其の苦勞を脱することが出来なくなつたのを思ひ愈々一切の世累を捨て、人生無常の苦を脱すべき道を求めようと思つて年二十九歳の時遂に一大決心を以て出家求道するこゝとなつた。其の年十二月八日太子は帝王の富貴と父母妻子の恩愛の情とを棄て、名馬乾陟(Kanchaka)に跨り夜中宮殿から遁れ出で其の日に跋伽(Balka)仙人の住んで居る森に着いて寶冠錦衣を脱して粗末なる袈裟を着け一沙門となつた。太子は暫らく跋伽仙人に就き其の教を受けたが心服し難い所があつたから去つて摩揭陀國の首府王舍城(Rajagriha)の附近の山林に住んで居る阿羅藍迦藍(Alara Kalama)仙人に就いて教を乞うたが之れにも心服することが出来ないので去つ

て鬱頭藍(Uddaka)仙人の處へ行つた併し其の説にも感心が出来ぬ故また去て之れより摩揭陀國中を遍歴して東北の方尼連禪(Nealijana)河畔の苦行林(Uruvela)に入つて獨りで修行して居たが數年の後大に悟る所あつてこれまでの無益なる禁欲の苦行を捨て尼連禪河の水に浴して其氣力を爽快になし河を渡つて今の伽耶(Gaya)に至り菩提樹(Bodhi-druma)の下に座をかまへて眞の覺りを開くまでは此處を去らずと決心した。此の間太子は種々の惡魔に誘惑され或は妨害を受けたと傳へられて居るがこれは太子が時に心の内に起つた迷ひと闘つたことを形容したのである。其の結果太子は遂に心内の魔を破つて三十五歳の二月八日の朝明星東に現はるゝ頃大頓悟をなして眞理の大光明を發見し此に全く佛陀(Buddha)となつたのである。

是に於て佛陀は其の悟り得たる所の解脱滅苦の大法を擲めて四民を救はうと思ひ先づ鹿野苑(Misudava)に至つて教を説いて男女老若貴賤を擇ばずして之れに解脱の道を傳へまた事火外道として火を神として拜する婆羅門の僧迦葉(Kassapa)を説き破つて其の徒千餘人を弟子とし次いで王舍城に赴いて竹林精舍(Venuvana

Vihara)に於て説法し、摩揭陀國王頻毘沙羅(Bimbisara)を信服させ、また婆羅門の教師舍利弗(Sariputta)と目犍連(Moggallana)とを説破して、其の徒二百五十人を弟子とした。其の後佛陀は父王の招きに應じて、故郷に歸りしに、親族故舊の人々は、佛陀が乞食となりて、もとの悉多太子の様子のないのを見て喜ばないで、或は頻りに家に還つてもとの太子となれと勸めるものもあつたが、佛陀は泰然自若として法を説き、熱心に教化を勉めて、其異母弟阿難陀(Ananda)従弟提婆達多(Devadatta)其の他の人々を服して出家させ、其の子羅喉陀をも僧となした。

是れより後、佛陀は其の門弟子と共にガンジス河の平原を遊歴して、種姓の區別によらず、諸種の人民を誘化したから、佛教に入るものが多く、其の勢力は頗る熾になつた。併し、其の團體が熾になるにつれて、不平分裂などもあつた。即ち、目犍連が阿羅陀の佛陀から厚遇されるのに對して、不平を抱き、提婆達多は佛陀に背いて去つて他の宗教に入つたのみならず、頻毘沙羅王の子阿闍世(Ajatasattu)と結んで、佛教に反抗し、目犍連も遂に、外道の爲めに殺された。

此の後、佛陀は、益々教化に力むること四十餘年の久しきに及んだが、其の年齢も既

に八十歳に達して健康は勝れず、方に其の死の近づいたのを知つて、弟子を毘舍離(Vaisali)の城に會して、最後の説法をなし、夫れより其の東北に當たれる拘尸那揭羅(Kusinagara)に赴いた時、病を發し、遂に死んだ。實に西紀前四百七十七年、即ち、我が懿徳天皇の三十四年である。佛陀が死んでから、今日に至るまで、二千三百七十九年の久しい間を経て居るが、其の説き出した佛教は、我が邦を始め、支那、朝鮮、印度、印度支那及び歐米の諸國までも、廣まつて、幾億萬の信者を持つて居るのを見ても、佛陀が如何に偉大なる人傑であつたかが知れるのである。



茲に人あり、力量骨格互に相同じ。各、堅甲利兵を執つて相戦はむに、一人は志念堅からず、或は疑ひ、或は恐れ、或は戦はむとし、或は走らむとして、死生決せず、進退定まらず、眼目定動し、步驟正しからず、しどろになりて相進まむ。一人は危亡を顧みず、強弱を觀ぜず、一身を必死の地に擲着し、目を据ゑ、齒を切つて、大精神を奮つて、斷々として相進まば、此の兩個の勝敗は、掌を見るが如けむ。十騎にして千騎に對し、百騎にして萬騎に對すといへども、百戰百勝目前に分明なり。譬へば、兩陣相對せむに、一方は金銀を以て募り、備ひたる雜兵十萬、又一方は仁恕を以て志を合はせ、忠義を以て鍊り鍛うたる精兵一千、此の千騎を放つて、此の十萬に當てむに、惡虎の群羊を驅るが如けむ。

（自隱禪師の『遠羅天釜』の一節、禪師は禪宗の高僧、元祿頃の人、其の文の力あるを見よ。記者しるす）

歴史 (東洋の部)

文學士 高 桑 駒 吉

漢の三傑

漢の高祖が項羽を滅ぼし、數年來亂れ居た支那を一統して、都を洛陽に定め、兵士を解散して皆郷里に歸らしめた後、大臣諸將を洛陽の南宮に會して、酒宴をした時に高祖は是等の人々に對つて、さて、朕が天下を得たのはなぜであるか、また項羽が亡びたのはなぜであるか、遠慮なくいうてくれといはれた。其の時高起、王陵の二人が、すぐ起つて、陛下は人に命じて城を攻めたり地を略したりさせて、其の取つた城や地を其の人に與へるから、諸將に勵みが出てよく働く故、遂に勝利を得たのであるが、項羽は之れと反對で功ある者は嫉んで、之れを害し、賢なるものは惡んで、之れを疑ふ風があり、また戦に勝つても人の功を賞せず、地を取つても功のある人に與へないから、皆其の下の大將が背いて、遂に天下を取ることが出来なかつたのでありますと對へた。すると高祖は笑つて、公等のいふ所は、一應もつともであるが、

未だ眞の道理を知らない所謂一を知つて其の二を知らないものである。よく考へて見よ、彼の籌を帷幄の中に運らして勝を千里の外に決すること、即ち軍略のうまいことに於ては、朕は到底張良には及ばない。國家を治め百姓を愛撫してよく之れを懐け、且つ我が戦争中糧食を絶えさせなかつたことに於ては、朕は到底蕭何の技倆には及ばない。また百萬の兵を率ゐて戦へば必ず勝ち攻むれば必ず取ること、即ち戦略に長じたことに於ては、朕は到底韓信に及ばない。實に此の三人は人傑である。つまり此の三傑を朕がよく用ゐたから、天下を得たわけである。然るに項羽には唯だ一人の范増といふ謀臣があつたが、是れとても遂に用ゐることが出来なかつた。それ故、朕に負けたのであるといふたので、群臣皆其の明識に驚き服したといふことである。是れから張良、蕭何、韓信の三人を漢の三傑と稱して居る。よつて此の三人の傳記を述べて見よう。

張 良

張良の家は戰國の時五代續いて韓の相となつた家柄であつたが、張良の十二歳の時、韓は秦に滅ぼされた。後張良は壯年になつて韓の爲めに復讐しようと思ふ

たが、性來多病で虚弱なる體質であつたから、家財を散じて豪傑の士に交はり、蒼海君といふ人に遇ふた時、一人の力士を得て、之に重さ百二十斤ある鐵錐を持たせて、秦の始皇が東方の地へ巡行された時に、博浪沙といふ所で、始皇を狙撃したが、狙ひは外づれて、其の副車に當つたので、志を果たさなかつた。始皇は大いに怒つて、天下に令して其の賊を求めさせたが見附からぬ。そこで、張良は姓名を變じて下邳といふ所に匿れて居た。或時張良が出て橋の上を散歩して居ると、一人の老人が來かゝつて張良の傍へ來ると、履を橋の下へ墮とし、張良を顧みて、孺子、あれを取つて來い、というたから、張良も驚いて、殿らうと思つたが、年が寄つて居るのを見て、不憫に思ひ、忍耐して橋を下りて履を取り、之れを渡さうとすると、老人は足で受けて、禮もいはずに行つてしまつたから、さすがの張良、再び驚いて、老人の後を見て居ると、少時らくして、老人が還つて來て、貴様には教へることがあるから、五日たつて朝早く此處へ來い、というて去つた。張良も怪しみながらも、之れを諾して、五日目の朝早く橋のはとりへ行つて見ると、老人は既に來て居て、張良が遅く來たのを怒り、老人と約束して後れるとは甚だ不都合である、尙ほ五日たつて早く來い、という

蕭何は沛の役人となつて居て常に高祖を保護したとがある。劉邦が兵を起こして沛公と稱した時に蕭何は監督の役を勤めて居た。沛公が遂に秦の咸陽を降した時に諸將は皆争うて金帛や寶物の入つて居る所へ行つて分捕りをしたが蕭何はそんなものには目を着けずに獨りて先づ秦の内閣へ入つて蕭帳簿類や書きもの類を取つて置いた。是れがあつたから後に漢では天下の人口の多少或は租税の徵集の方法などのことを知ることが出来たのである。其の後沛公が漢王となつて愈々項羽と戰を開いてからは蕭何は漢の宰相となつて常に軍糧を送つて絶やしたことがなくまた漢王が項羽の爲めに破られて逃げまはつて居る時にも蕭何は常に補缺の兵を送つて之れを援けて居た漢王が天下を一統することが出来たのは全く蕭何が漢中をよく治めて常に王を援けて居たからである。故に漢王が遂に項羽を滅ぼして天子となつた時に先づ蕭何を鄭侯に封じて食邑八千戸を與へた。すると諸功臣ども皆不平を起こして臣等はこれまで戰場に出て多きものは百餘戰少なきものも數十合の戰をなし或は城を攻め地を取りなどして働いたが蕭何に至つてはこれまで馬に汗をかゝせて働いたことなく徒らに筆や墨を

取つて議論をして居たのみで却て臣等の上にありて莫大なる恩賞を受けるとは實に不都合であるといふと高祖は答へて諸君は獵を知つて居らるゝや。夫の獵をなす時に獸類を追うて殺すものは狗であるが其の狗を彼處此處に走らせて使ふものは人である。これと同じく諸君は徒らによく走つて獸を得たる功狗であるが蕭何のどしきに至つては狗を使うたる功人である故に第一の恩賞を受けるは當然であらうといはれたので皆敢て不平をいふものがなく遂に蕭何を以て功第一とした。其の他蕭何の功績は多いが殊に三傑の一人韓信の技倆を察して之れを高祖に推選したのも實に蕭何の功である。

韓信

韓信は淮陰の人でも其の家は貧しく且つ操行も修まらなかつたから或る時は食ふに困つて洗濯婆さんに飯をもらつて漸く命をつないだこともありまた淮陰の少年どもの侮りを受けて恐んで股の下をくゞり人から臆病者と笑はれたこともあつた。其の後韓信は項梁が兵を起こす時に之れに従ひ項梁が戰死してからは項羽に従うたが項羽が韓信を餘り重く用ゐなかつたから去つて漢王に従う

た。併し漢でも餘り重く用ゐられなかつたが、蕭何は韓信と話をして見て大いに感心して屢々之れを推舉したが漢王は用ゐなかつた。此の時漢王は蜀へ行くことをなつたので部下の將校が途中から亡げ去るものが多く、韓信も遂に亡げ去つたから蕭何は其の後を追うて行つた。すると或る人が蕭何の亡げ去つたを漢王に告げた時には漢王は大いに怒り且つ左右の手を失つたごとく落膽して居たが、二日経つと蕭何が歸つて來たから漢王は大いに喜ばれたが罵つて何故に亡げたかといふと蕭何は答へて臣は亡げたのではなく韓信をつれ歸らむが爲めに追うたのでありますといふた。漢王は更にまた罵つて昨今諸將の遁ぐるものが多いのに之れを追はないで韓信を追うたとは詐であらうといふと蕭何之れに答へて今亡げるような諸將は再び得ることが出来るが韓信のときは再び得難き將校である故に之れを重く用ゐれば項羽を滅ぼすことが出来ませうといふた。漢王は然らば將校に登用しようといはれたが蕭何は答へて普通の將校ぐらゐるのでは韓信は留まつて働かぬであらうといふた。漢王は然らば大將にしようといふて遂に韓信を大將軍とした。韓信の功績は述べつくせぬほどあるが其の中から面

白い二三の例を挙げよう。韓信が張耳と共に兵三萬を率ゐて趙を伐つた時に趙王歇と陳餘とは之れを聞いて二十萬人の兵を井徑口に集めて防戦の用意をして居たが此の時李左車といふ人が陳餘に勸めていふには漢の軍勢は是れまで諸所の戦で勝つて來たから其の鋭い鋒先には當たり悪いが大いに疲れて居るのみならず兵糧が充分でない。そこで井徑口は道幅が狭く到底車を二臺并べるとが出來ず、また騎兵も列をなして進むことが出來ないから此處へ攻めて來るには其の兵糧は必ずズツト後にあるに違ひない。故に、足下若し僕に兵三萬人を假して間道から漢軍の後にいで、其の兵糧を奪うて後から之を攻めさせ、足下は壘を高くし溝を深くして城を守り戦はず居たならば韓信張耳等は進んでは戦ふことが出來ず、また退いて還ることが出來ず、進退谷まつて遂に降るか戦死するか何れにしても、日ならぬ中に二人の首を取ることが出來ようといふたが、陳餘は詐謀奇計などで勝つのは臆病ものゝすることであるといふて聽かなかつた。韓信は間者から之れを聞いて大いに喜び、兵を引いて井徑口の五六里前の所へ進んで留まり、其の夜密かに二千人の騎兵を選んで、各々赤幟を持たせて間道から進んで趙軍に近き

たのである。そこで月氏であるが匈奴の冒頓單子に破られ次いで其の子の老上
 單子にまた破られて遠く西の方へ走り今の伊犁地方に居た塞種即ち希臘人の所
 謂サカイといふ部族を逐ひ拂つて其の地を占領して居たが是れより先き月氏が
 甘肅の西北に居た頃其の近傍に居た烏孫といふ部族を攻めて其の王を殺し其
 地を奪つたから烏孫の人民は走つて匈奴に従ひ其の時生まれただばかりの烏族の
 王子昆莫も匈奴で養はれて此の頃既に成長して居た故父の怨を報はうと思ひ單
 子に請うて兵を率ゐ月氏の居る地に攻め込んで之れを破り其の地を取つて烏孫
 國を再興した。そこで月氏はまた西へ走り今のマム河の兩岸に希臘人の建て、
 居た大夏即ち希臘人の所謂バクトリア王國を臣服して其の地に據り此に大月氏
 國を建てた。此の時塞種もまた月氏に逐はれて更に南に移つて罽賓即ち今の印
 度の北方カシミラに據ることとなつた。是れから大月氏の勢は盛んになつて印度
 や安息波斯の東北バルチアなどの地方を侵して居た時に張騫が漢の使として行
 つたのである。

張騫は同じく募に應じた百餘人のものと出發して支那の西北方から進んで匈

奴の領地へ入り込んだが遂に捕へられて單子の居る所へ送られた。其の時單子
 は張騫等に何處へ行くのかと聞くとき月氏へ行くのであると答へたから單子のい
 ふには月氏は北にある國で吾が國を通らなければ行かれぬのである。若し吾が
 使を漢の南の越の國へ遣らうとしたならば必ず通さぬであらう。故に我れも漢
 の使を通すことは出来ないというて張騫等を留めて置くこと十餘年にも及んだ
 が張騫は其の部下のものと遂に遁れて月氏の國の方へ向かひ走ると五六十日
 今のフェルガナの地方にあつた大宛といふ國へ着き其の國王に面會して漢の天
 子の命を受けて月氏に使用するものであることを述べ尙ほわれを月氏へ導い
 て呉るれば漢から澤山のお禮をよこすであらうというた。大宛でも元來漢が富
 んで居ることを聞いて交際をしたいと思つて居た所であるから宜しいと承諾し
 て張騫等を其の北の康居といふ國へ送り届けた。康居は今シルダリアの河北
 から西伯利亞のキルギス荒原の地方を占領して居た國である。そこで張騫等は
 康居から其の南の大月氏へ送られ漸く着いて其の國王に面會し同盟を申し込ん
 だ。所が此の頃月氏は前にもいうた通り大夏の國を臣服して居り又其の居る所

の地は肥沃で、近隣から攻められるようなとはなくして大いに安樂であるのに慣れて遠く隔たつて居る漢と同盟し、匈奴に向かつて復讐する志などはなくなつて居るから、張騫も遂に要領を得ないで大夏の國へ行き、此に一年餘留まり、支那へ還る途中でまた匈奴に捕へられて止められ、一年ばかり居ると、匈奴では單于が死んで内亂が起つたから、其の騒動にまぎれて支那へ亡げ歸つて來た。張騫が出發した時には同行者が百餘人あつたが、皆途中で或は捕へられ或は死んで張騫と共に歸つて來たものは僅に堂邑父といふもの一人であつた。張騫は元來強くて力があり、且つ其の性質は極めて寛大で忍耐力のある人であつた。また堂邑父といふ男はもとは支那人ではなく、胡人で、弓を射ることが上手で、張騫と共に敵に追ひかけられた時には弓矢で之れを防ぎ、食物の缺乏した時には鳥や獸類を射て飢を凌いだといふことである。かくのごとく張騫等は、大月氏との同盟を結ぶことが出来なかつたが、十三年間艱難辛苦して外國の形勢を見て歸つて來たから、漢では其の功を賞して張騫を太中大夫といふ高官に任じ、堂邑父を奉使君とした。張騫が行つた國々は、大宛、大月氏、康居、大夏等であるが、其の外傳聞した近傍の國々の風俗

形勢等を武帝に申し上げたのみならず、自分が大夏に居た頃、蜀で織り出す布があるのを見た故、是等の品物は何處から得たかと聞いたら、大夏の商人が身毒(即ち印度)から買つて來るのであると答へたが、身毒といふ國は大夏の東南に當たる土地で、其の風俗は大夏と同じく、其の人民は象に乗つて戦ふといふものである。大夏の東南にある身毒の國に蜀の産物が行つて居るので考へると、身毒から蜀へは餘り遠くないように思はれる。よつて此の後は蜀の方から身毒へ通ずる道路を發見したなら、北の方から行つて匈奴に捕へられて困難するよりは便利であらうといふた。此の時に武帝は張騫から尙ほ大宛、大夏、安息等の國々は皆大國で珍らしい者が多くあるが、其の兵は弱く、且つ支那の産物を非常に好んで居り、其の北にある大月氏、康居は強いが、皆利益を以て誘へば必ず漢に従はせるとが出來ようといふて大いに喜ばれ、早速蜀の方から身毒へ通ずる道路を發見せよと張騫等四人の人々に命じて手分けにして進ませた。張騫を始め四人は西へ進んで今の四川、雲南の地方へ出で、至る所これまで知らなかつた人民を従へて進んだが、何分此の地方の人民は皆野蠻で、従つても直ぐ叛いて漢の使者を殺し、其の持つて居る品物を奪

ふので、漢では費用ばかり多くかゝつて身毒まで達することが出来ず遂に中止してしまつた。此の後張騫は校尉といふ官に任ぜられ大將軍衛青の部下に屬して匈奴の征伐に行つた。張騫はもと能く地理を知つて居たから漢の軍には大いに便利であつた。其の功によつて歸ると直ぐ博望侯に封ぜられたが其の後二年を経て衛尉といふ官に任ぜられ李廣といふ人と共に匈奴を撃ちに行き期限を誤まつて後れたので軍法によつて斬られる所を罰金を出して赦され官爵を取り上げられて平民とされた。併し其の後張騫は武帝に勸めて若し烏孫王昆莫と同盟して匈奴を挾撃するなら恰も匈奴の右の臂を斷つような者であるのみならず西域の地方へ通ずる道路が開けて大夏等の國々は皆漢と通ずる事が出来て漢の爲めに大いに便利であらうというたから武帝も尤もと思はれ張騫を中郎將といふ官に任じ士卒三百人馬六百餘疋牛羊數千頭金絹帛價數百萬圓にも上るほど多く持たせて遣つた。張騫は既に烏孫の國へ着いて珍しい品物を昆莫に贈つて同盟のことを勧めたが昆莫も容易には承諾せず要領を得なかつたので張騫は此處から別に使を大宛康居大月氏大夏等の國々へ遣り珍らしい品物を贈つて漢に通ずる

ように勧めさせた。此の時烏孫では張騫に數十人の使を従はせ馬數十疋をみやげとして漢へお禮ながら様子を見せによこした。張騫は漢と烏孫との同盟を成立させる事が出来なかつたが兎に角烏孫の使をつれて歸つて來たので武帝も大いに喜ばれ大行といふ官に任じた。併し惜しいかな一年ばかり經つと死んだ。其の後また一年ばかり經つと張騫が烏孫から遣つた漢の使が皆西域諸國の使と共に歸つて來て是れから西北の國々は皆漢に通ずるようになった。是れは皆張騫の功というてよいのである。張騫の死後漢で西域の國々へ使を遣るには皆博望侯と稱させて外國人の信用するようにしたといふので如何に張騫が西域地方に人望があつたかが知れよう。加之張騫が計畫した漢と烏孫との同盟もなかく成立して漢から天子の親族の娘を昆莫の妻として婚姻を結び遂に匈奴を撃ち破り遠く西伯利亞の方へ追ひ拂つた。全く張騫の計策が實行されたのである。實に張騫は上に述べたような功績のあつた人であるから外交家探検家として史學地理學の上に一大光明を放つたのみならず東西の商業交通の上に一大裨益を與へた大人物と稱しても決して差支はなからうと思ふのである。

一般の史學者の説く所によれば、史に三種あり。(一)平叙史、即ち過去の事實を唯だ順序よく排列しゆくもの、編年史などいふもの之れに屬す。(二)叙説史、即ち事實を録する間に自家の見解を挿入して或は事件の聯絡を明らかにし、或は因果の關係を指摘し、或は盛衰興亡の理を明らかにせむとするもの。(三)推論史、即ち史上の事實の變遷に對して古今を一貫する哲理的解釋を與ふるもの、是れなり。

歴史 (東洋の部)

文學士 高 桑 駒 吉

東洋諸人種の變遷

東洋史の上に活動した諸人種の概略は最初の講話で述べて置いたが、其の後尙は續々讀者からは等諸人種の變遷を述べよとの要求がある故、此に其の大筋を略述する。先づ我が邦人と最も縁故のある

韓 種

韓種は今の朝鮮人のことである。今より二千餘年前即ち我が邦の神武天皇から五六代後の頃、支那では前漢の頃、今の滿洲盛系省から朝鮮の北部に、貊といふ人民が住んで居て、數多の部族に分かれ、各一國をなして居た。其の重なるものは、夫餘、高句麗、沃沮、濊貊などで、夫餘は盛京省の北部に、高句麗は興京附近から朝鮮の平安道の北部に、沃沮は咸鏡道に、濊貊は江原道の地方を占領して居たが、貊種は蓋し通古斯種で今の滿州人と同族であらう。其の頃朝鮮の南部には韓種といふ人民

が住んで居た。此の人民は或人種學者は我が邦人と合はせて日本族というて居る。兎に角、種とは異なつた人民である。此の韓種は馬韓、辰韓、弁韓の三大部がわつて、馬韓は京畿道の南部、忠清道、全羅道に跨がり、五十餘部に分かれ、辰韓は慶尙道の東北部を占領して十二部に分かれ、弁韓は一名を弁辰ともいうて、慶尙道の西部に居り、また十二部に分かれて居た。但し、此の韓種中には支那人も頗る混合して居る。また馬韓の中から興つた百濟國王の祖先がもと高句麗から出たるを見て、韓種中に貊種即ち通古斯族が混合したことも明白である。支那の魏晉の頃に高句麗國が強大となり、近傍の諸部族を併呑して今の盛京省及び朝鮮の北部に據つて居た。其頃百濟國が馬韓の中から興つて、馬韓の全部を併せ、新羅國が辰韓の中から興つて、悉く辰韓を服し、辨韓は我が邦に屬して、任那と稱して居たが、支那南北朝の頃に任那は遂に新羅に滅ばされて、朝鮮半島の地は高句麗、百濟、新羅の三國に分領された。其の後新羅の勢盛んとなつて、百濟を侵し、唐の高宗の時に支那の援兵を請うて、遂に百濟を滅ぼして、其の地を分領したが、是れと同時に高句麗は屢、西の方で隋唐と衝突して居た故、百濟の滅亡後、四五年を経て唐の爲めに滅

ばされた。併し、唐の兵が退却すると新羅人が兵を出して百濟の故地、悉皆と平壤以南の高句麗の舊領土を併呑した。同時に盛京省の地には渤海國が興つて、平壤以北の百濟の故地を取つた。但し、渤海國は通古斯族である故、後に述べよう。時に唐の朝廷では大いに怒つて、新羅を征伐しようとしたが、新羅王が罪を謝して、永く朝貢することゝなつて、事は濟んだものゝ、新羅は全く朝鮮半島を統一したのである。上に述べたごとく、朝鮮半島の人民の多數は韓種で、少數の貊種が混じて居り、其の言語は韓種固有のものが傳はることゝなつたが、言語學者の研究によると、韓語はウラル、アルタイ語系に屬するものであるといふから、韓種ももとは土耳其種から分かれたものらしいのである。さて、新羅は唐の末に大いに亂れ、五代の時に及んで三國に分裂したが、王建といふものが遂に之れを一統して國を高麗と號した。併し、前の高句麗は一に高麗ともいうた故、之れと區別する爲めに、後高麗ともいふが、人種は全く高句麗とは別で韓種である。明の始めに高麗は内部の衰頹と我が倭寇の侵略とで大いに亂れたのに、乘じて其の臣李成桂といふものが國を奪うて王となり、國號を朝鮮と改めた。是れが即ち今の韓帝の太祖である。

通古斯族

通古斯族即ち滿州人の祖先は支那周の世には肅慎氏というて今の吉林省邊に居住して居た大部族である。漢魏の頃には挹婁といひ、後魏の世には勿吉と稱し隋唐に至つて靺鞨といふた。勿吉と靺鞨とは蓋し同音異字であらう。靺鞨は二大部に分かれて一は黑水部といひ吉林省の東北部即ち黑龍江の沿岸に住んで居た故、黑水部の名が起つたのである。また一は粟末部といふたが、是れも粟末水即ち今の松花江の名から起つたので、此の河の沿岸に住んで居た故である。唐の高宗が高句麗を滅ぼした時高句麗の遺民は逃れて粟末部に歸するものが多かつた。其の頃粟末部の酋長に大祚榮といふものがあつてもとは高句麗に従つて居たが、其の滅亡後漸次に高句麗の遺民を集め唐の守備兵が引き上げた後高句麗の故地に據つて國を建て渤海と號し、遂に唐の睿宗から渤海郡王に封ぜられ、其の盛んなる時には今の盛京吉林二省及び朝鮮の北部を領し、我が邦へも來聘し盛んに唐の文物を輸入して一時隆盛を極めたが五代の初めに至つて契丹の太祖阿保機の爲めに滅ぼされた。

黑水靺鞨は初め渤海に屬し、其の滅亡後は契丹に服して女真と稱したが、女真は肅慎と同音異字である。女真部には全く契丹の民籍に入つた熟女真と唯だ貢のみを納れて半屬して居た生女真との二部族があつたが、生女真の完顔部が強盛になつて宋の中世に其の酋長阿骨打は遂に契丹に叛き、熟女真を服屬して契丹の地を蠶食し國號を金と稱し、後宋と共に契丹を挾撃して其の地を奪ひ是れより頻りに宋を攻めて殆んど楊子江以北を取り此に據ること百餘年であつたが、其の北方から蒙古が興つて金を蠶食し遂に南宋と同盟して之れを滅ぼした。金の滅亡する時に女真人の支那に移住して居たものゝ多數は支那人、蒙古人の爲めに殺されたが、其の遺民の逃れたものは盛京省の東北部に移り建夷と稱されたが、此の中に愛親覺羅といふ部落が明末に立つて盛大に赴き、附近の諸部落を併呑して國號を滿洲とも後金ともいひ、其の後益々強大となつて國號を清と改め、頻りに明を侵し其の衰亂に乗じて之れを滅ぼした。今の清朝は此の後である。尙ほ其の他、黑龍江及び松花江の沿岸には夥多の通古斯族が居るが、歴史上顯著なるものは、獨り此の滿洲人のみである。

此の外普通に東胡、烏桓、鮮卑、契丹などの諸部族を通古斯族の中に加へるが、是等は人種としては土耳其族で通古斯族を混じて居る故、普通に通古斯族といふのである。併し之れを土耳其族に入るゝ方が至當と考へる故、此には述べぬ。

土耳其族

土耳其族の中には通古斯族を混じたる蒙古人と之れを混ぜざる土耳其人との二大別がある。先づ支那に最も關係ある蒙古人から述べよう。

(A) 蒙古人の祖先は周の世には山戎と稱し、今の直隸の東北境に居り、戦國の頃に至つて東胡といふた。蓋し支那で匈奴を胡といふたから、之れを區別する爲めに東胡といふたのであらう。漢の初めに東胡は匈奴の爲めに敗られて東に走り、内蒙古の東部に居つて烏桓、鮮卑の二大部に分かれた。其の後鮮卑漸く強盛となつた頃、匈奴は後漢の爲めに敗られて全く瓦解し、其の餘衆は皆鮮卑と稱して居た。故、支那の北邊には遼東から河西に至るまで、鮮卑の版圖となつた。烏桓は後漢の末に曹操に破られて殆ど全部降服し、其の幾分は鮮卑に混じた。晋の八王の亂後、匈奴、鮮卑、氐、羌の五胡が中原に亂入して十六國が交々帝王と稱した中に鮮卑に

屬したるものは燕の慕容氏、西秦の乞伏氏、南凉の秃髮氏、後魏の拓跋氏など、就中拓跋氏は遂に支那の北部を併呑して帝王と稱すること百五十餘年であつた。後魏の後を承けた後周の宇文氏も鮮卑である。此のごとく鮮卑族は多く支那に混入したが、其の支族奚、契丹などは北方に残つて居て、奚は今の直隸承德府附近に居り、契丹は奚の北即ち今の内蒙古の東部に居た。唐の末に契丹が強大となり、奚を併せ、五代の初めに渤海を滅ぼし、後石晋を援けて燕雲十六州、即ち今の直隸、山西の北部を取り、西北の諸部族は皆其の藩屬となつた。其の後契丹は宋と衝突して屢之れを侵したが、宋の中頃に至つて金の爲めに滅ぼされた。是れより先き契丹は國號を遼と稱したが、尙ほ契丹の號を混用して居た。遼の亡びる時に其の皇族に耶律大石といふものが餘衆を率ゐて西に逃れ、今の回疆の地を占領して居た畏兀兒の諸部を降し、更に西北に進んでバルカシ湖の西なる垂河、即ち今の珠河の畔に都を建て、中亚細亞の諸國を服屬せしめた。支那では之れを西遼といひ、西洋の歴史にはカラキタイ(黑契丹)といふ。元史の中にも黑契丹と見えて居る。西遼は四代百餘年間繼續して遂に乃蠻部の屈出律汗の爲めに國を簞はれて亡んだ。契丹の

別部に室韋といふものがあつて後魏の頃から契丹の北方即ち今の外蒙古の東部黒龍江省の西北部に散在して居た。此の室韋の一部に蒙瓦部といふものがあつたが是れが即ち後の蒙古部である。蒙古部は黒龍江の上流斡難河と喀魯連河の間に居て宋の末に至つて俄に勃興し其の酋長鐵木眞は先づ漠北の諸部族を併呑して成吉思汗（權力強大なる君主の義）は南は金の版圖の大半を取り西は乃蠻を滅ぼした。乃蠻は蒙古と同じく土耳古族で其の頃セレンガ河以西即ち今の外蒙古を領して西の方西遼と界を接して居たから乃蠻は王子屈出律は西遼に遁れ遂に其の國を窺ひ蒙古が金を攻めて居る隙に乗じて讐を報いようとしたが蒙古の爲めに攻められて滅ぼされた。此の頃西亞細亞ではサラセン帝國が衰へて波斯には多くの土耳古族の國が興敗して居た中に花刺子模國が一時西亞細亞を一統して居た。西遼が亡びて蒙古と花刺子模と境界を接するようになつたから互に衝突は免れない。花刺子模人が蒙古の隊商及び使者を殺したのが導火線となつて遂に兵端が開かれ花刺子模は成吉思汗に滅ぼされた。成吉思汗は一旦本國に歸つて西夏を滅ぼしたが其の途中で死んだ。是れが元の太祖である。是に於て蒙古の大帝國

511

1115

は太祖の四子に分領された。即ち長子朮赤の子孫には中亞細亞の北部から其の西方悉くを與へ次子察合臺は中亞細亞を取り三子窩闊臺は外蒙古の西部を領し末子拖雷は外蒙古の東部を取り窩闊臺が大汗の位を襲ぐことゝなつた。是れが元の太宗である。太宗の時に遂に金を滅ぼし其の子定宗貴由が位を襲いだすが定宗の死後拖雷の子蒙哥が大汗となつた。是れが憲宗である。憲宗の時に弟旭烈兀を遣はして波斯を征伐させたが旭烈兀は更に進んでバグダードを陥れアッバス朝を滅ぼし西方亞細亞を一統して伊兒汗と稱した。また朮赤の子拔都は歐洲に侵入して露西亞を取り、ザルガ河の畔薩來に欽察國を建て、察合臺の子孫は國名は察合臺と稱して居た。憲宗が死んで其の弟忽必烈が位に即いた。即ち元の世祖である。世祖は遂に南宗を滅ぼして支那を取り、高麗を従へ、印度支那の諸國及び西藏を服し我が邦へも兵を出したが成功しなかつた。此の時元の世祖は亞細亞の東部を領して大汗と稱して居たが他の三汗國は既に皆獨立して互に攻伐を始め是れが爲めに皆國力を疲弊させたが蒙古人は亞細亞の西部から歐洲の東部に至るまで蔓延した。元は支那を領すること百餘年で衰亡し蒙古人は明の爲めに

逐はれてもとの沙漠の地に歸つた。元の滅亡と同時に察合臺も亂れ其の一部の首長中から帖木兒が起こつて察合臺國を平げ波斯の伊兒汗國を滅ぼし、欽察汗を破り支那の新疆から地中海に達する大版圖を領して居た。其の死後忽ち分裂して子孫は印度に入て莫臥兒帝國を建てたが十九世紀に至つて英國に滅ぼされた。欽察國は久しく東歐を治めて居り後分裂して數國となり十九世紀までクリミア汗だけ残つて居たが遂に露國の爲めに滅ぼされ其の支族基華汗もまた二十餘年前に露國に併吞された。元の後裔は屢明に入寇して居たが清朝の興つた頃内外蒙古の諸部族と共に之れに服屬した。また蒙古の別部衛刺特は青海及び新疆の地に居て清朝に従はなかつたが康熙乾隆二帝の爲めに征せられて服屬した。今でも内外蒙古には蒙古の諸藩王が清朝の任命を受けて治めて居る。



歴史 (東洋の部)

文學士 高 桑 駒 吉

東洋諸人種の變遷 (下)

(B) 土耳其人 純粹なる土耳其人の變遷を述べるつもりであるが幾分かは他の種族を混して居るといふことを豫め承知しておいてもらひたい。さて古代支那の西北方に居て殷の世には薰鬻といひ周の世には獯豨といふた一大部族があつたが是れが即ち戰國以後は匈奴というて支那歴史否寧ろ東洋史の上に大關係をもつて居る民族である。匈奴というても純粹なる土耳其人ではなく餘程通古斯族が混じて居た。匈奴と秦との關係または始皇帝が長城を築いたとは普通の東洋史の教科書に書いてある故述べぬが匈奴と漢との關係は頗る重大なるもので漢の高祖は匈奴の冒頓單于の爲めに平城に圍まれ漸く陳平の計によつて圍を解くとが出来てからは歴代の天子皆匈奴に手を出さぬことゝなつた。併し漢の武帝は雄才大略の人で父祖の耻辱を雪いで版圖を擴張しようと思つて匈奴を伐

歴史 東洋諸人種の變遷

で東突厥の衰へたるに乗じて薛延陀は唐兵及び回紇兵と合し、東突厥を夾撃して滅ぼし、遂に其の地に據つた。幾ばくもなくして薛延陀亂れ、突厥の遺衆再び起つたが、回紇に滅ぼされた。回紇は是れより少らく東突厥の故地に據りて隆盛を極め、唐の玄宗の時支那に安祿山、史思明の亂起つた時には、援兵を送つて賊を討平するに盡力したが、後其の西北に匈奴種の黠戛斯といふ部族が勢力を得て、唐の末に回紇を撃破して其の地を奪つた。是に於て回紇は西に奔り、今の新疆の地に遁れた。かく西方に移つて波斯人、亞拉比亞人など、接近した故、西洋の書籍にはウイグル (Uigur) とある。元史に畏兀兒とあるものは即ち是れである。黠戛斯は宋の末に乃蠻といひ今は吉利吉思といふ部族となつて居る。西方亞細亞に於てサラセン帝國の衰へたるころ、突厥族并に回紇族等の土耳古人多く、其の領内に入り込んだものは悉く土耳古人と稱されて居るが、多くは回紇族であつたのである。一時波斯の東部及び印度の北方に據つて勢力があつたガズニ家、波斯の東部に據つたサマニ家、其の後に起つて殆ど西部亞細亞を併呑したセルジク朝、また其の後に起つたボラズムなどは皆土耳古人である。セルジク家の分裂後、小亞細亞

のルム或はイコニウムに據つたセルジク家は、蒙古人の侵略を蒙らなかつたが、蒙古人に逐はれた土耳古人の一派、オスマンリ土耳古がイコニウムの國內に入り、漸次小亞細亞、埃及を取り、希臘帝國を蠶食して今の土耳古國を建てた。かくて土耳古人は支那の新疆より中亞細亞、西亞細亞、歐洲の東部迄擴張して居るのである。

圖伯特族

支那歴史に現はれて居る圖伯特族の最も古い者は戎である。もと黄河、揚子江附近に居て漢族に逐はれ、遠く西に逃れたが、夏、殷、周三代の頃今の甘肅、四川の地には種々の戎が入り込み、周が衰へて鎬京、即ち今の西安府から都を洛邑、即ち今の河南府に移した後、諸戎は往々内地に入り込み、今の河南省までも蔓延した。是等の諸戎は春秋の時には晋が撃ち攘ひ、戰國の初めには韓魏が撃ち却けた爲め多くは西方に逃れ去つた。是れより先き秦も頻りに諸戎を撃ち退けて西方に地を擴張した爲め、今の甘肅の地を去つて青海の地方に移つた。秦が亡びて漢の初頭に河西の地に鬪伯特族の一派、月氏といふ部族が居て頗る強かつたが、匈奴に撃ち破られて西に走り、中亞細亞に入り、大夏、即ちバクトリアを破つて其の地方を取り、大

月氏國を建てた。併し月氏の一部で南山の附近に留まつて居た者は小月氏と呼ばれて居た。前漢の末に大月氏は強大となり遂にバクトリアを滅ぼし北印度を併せて一大強國となり佛教を崇奉して之れを支那に傳へた。爾來數百年の間月氏は中亞細亞に於ける強族であつたが後其の國分裂して亡びた。併し唐の時代までは中亞細亞の諸小國には月氏の苗裔が多く存在して居て後には土耳其人と混合してしまつたのである。氏羌は前漢の代に屢々撃ち破られて衰へたが晋の時塞内に漸く入り込んで八王の亂後は支那の亂れたるに乗じて亂を起し遂に帝王と稱して支那人を服したものである。氏人で帝王と稱したものには前秦の苻氏後涼の呂氏などで羌人では後秦の姚氏などである。また圖伯特族で有名なものには隋の代に青海の地方に黨項が居り今の西藏の地には吐蕃が居た今のチベットといふ名は吐蕃の名から轉訛したのである。吐蕃は唐の代に強大となり唐と通じて支那の文物制度を輸入しまた屢々唐に入寇した。黨項は吐蕃の強大となれるによりて屢々撃ち破られ逃れて支那内地に入り甘肅の東北部に居たが唐の末から支那の内亂によりて漸く勢力を増し宋の初に國を建て帝と稱し國號を

夏西夏又は河西といふた。西夏は此の後宋遼金の間にあつて國を保つて居たが遂に元の太祖成吉思汗に滅された。吐蕃は宋の代にも屢々支那に入寇したが元が西夏金を滅してから吐蕃を撃ち従へた。元の代には吐蕃は烏斯藏といひ明の代には西蕃と呼ばれ今は西藏と名づけられて居る。此の外に圖伯特族は多くあるが皆著名でない。唯だ一寸注意して置くのは緬甸人が圖伯特族であるところである。緬甸人の祖先は唐の代には驃國といふ國を建て居て唐に朝貢したとがあり其の後幾多の變遷を経て元の代に緬甸と名づけてこれに従ひ明から清に至る迄は支那に朝貢して居たが今は全く英國に取られて英領印度の一部となつた。

印度支那族

支那は太古の時には苗族といつて今の印度支那地方に住んで居る人種の祖先が楊子江以南を占領して居り其の北は圖伯特族が占領して居たのである。堯舜の時代に苗民といつて激烈なる抵抗をなした部族もまた印度支那族の祖先である。初め苗族は黄河楊子江の間に蔓延して居たが支那人の祖先たる漢族が西北の方から支那へ入り込んで來て是等の苗族を追ひ攘ひ苗族はだん／＼と南方に退い

が時々勢を得て漢人に抵抗した。故に堯舜以來歴代これを撃ち攘ひ且つ漢人がだんくんと蕃殖するに従つて苗族は南方の山谷に退き後には遂に漢人に服屬したのである。漢の末に巴蠻というて四川省附近に居つた部族は古の苗の遺族であるが遂に晉の衰亂に乗じて巴蠻の中から李雄といふものが成都に據つて興り國を成と名つけ後に漢と改めた。印度支那族で支那に帝王と稱したのはこれのみである。今日でも支那で苗または猺といふ人民が雜居して居て殊に湖南廣東の西部または雲南貴州廣西などには多い。支那以外では安南暹羅東埔寨南掌などの人民は皆古の苗民と同族で古く支那の内地から南に移つたのであらう。

漢族

漢族とは純粹なる支那人をいふのであるがこれはもと支那に居た者ではなく今から五千年前頃に西北の方から支那の内地に移住して來たものらしい。これから漢族は黄河の北を先づ占領し次いで黄河揚子江附近に居た鬲伯特族を追ひ攘ひ更に揚子江南の印度支那族を破つて遂に支那全体を占領したのである。今でも支那の西南の地には是等の諸種族が混合して居るのを見ても知れる。

歴史 (東洋之部)

文學士 高 桑 駒 吉

養蠶術の西傳

古代亞細亞の西部を初め歐洲では蠶糸を貿易上の最上品となし且つこれを用ゐるをも甚だ盛んであつたが其の原料が得られなかつたので蠶卵が始めて東羅馬の都コンスタンチノブル (Constantinople) に輸入せられた迄は蠶糸を産する昆虫の如何なるものであるかを知らず隨つて養蠶の術を興さうと考へたものもなかつたのである。當時地中海を繞れる歐羅巴亞細亞非利加を領有して居る羅馬人の殷富奢侈なる絹糸の需要は甚だ多かつたのであるが此の物は遠く中アジアの險しい山や人の住まぬ原野を過ぎて困難なる長い旅ゆゑに漸く得られるのであつた。極めて古い頃にはアッシリア人やメデア人ばかり此の商業を專有して居たから絹布の衣服をメデア服というたこともある。其の後ペルシア人がメデア人について益此の商業をして居たから蠶糸はギリシヤやシリアの商人の手を

る方法を考へ先づ其の同盟國で且の耶蘇教を信奉するアビシニア (Abyssinia) 王と謀つて其の力を借り、ペルシア人の手から蠶糸商業の權利を奪はうと思つて、頻りに其の手段を廻らしたが成效しなかつた。然るに偶然多年の望を達するを得て、隊商および船舶によらず充分これを供給する目的を達したのである。

此の頃印度に布教して居たペルシア人の耶蘇宣教師二人、西紀五百五十一年支那へ赴き、滯留して居る間に養蠶の方法を學び、歸つてコンスタンチノブルに行ひて其の學び得たる養蠶の方法の詳細をユスチニアヌス帝に奏したから、帝は大いに喜んで重賞を與へようと約し、二人に命じて蠶種を取りに再び支那へ遣つた。支那では蠶種を外國へ持ち出すことを嚴重に禁じてあつたが、二人の僧はいくらかの蠶種を得て、陰に之れを杖の空洞の中に隠してコンスタンチノブルに還り、帝に献じた。帝は更に二人の僧侶に命じてこれを飼育させ、其の結果遂に立派なる蠶糸を得られるようになったのである。

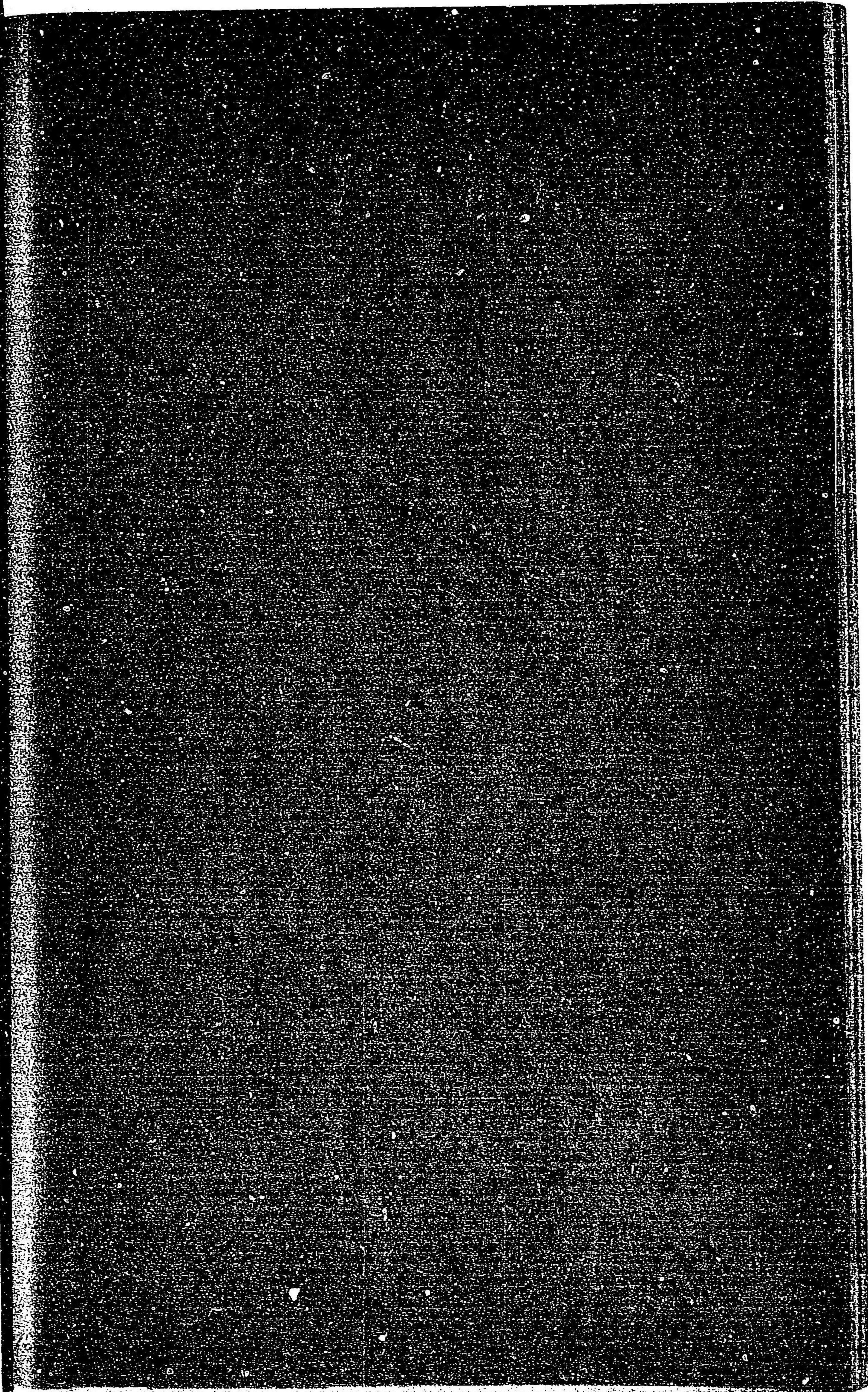
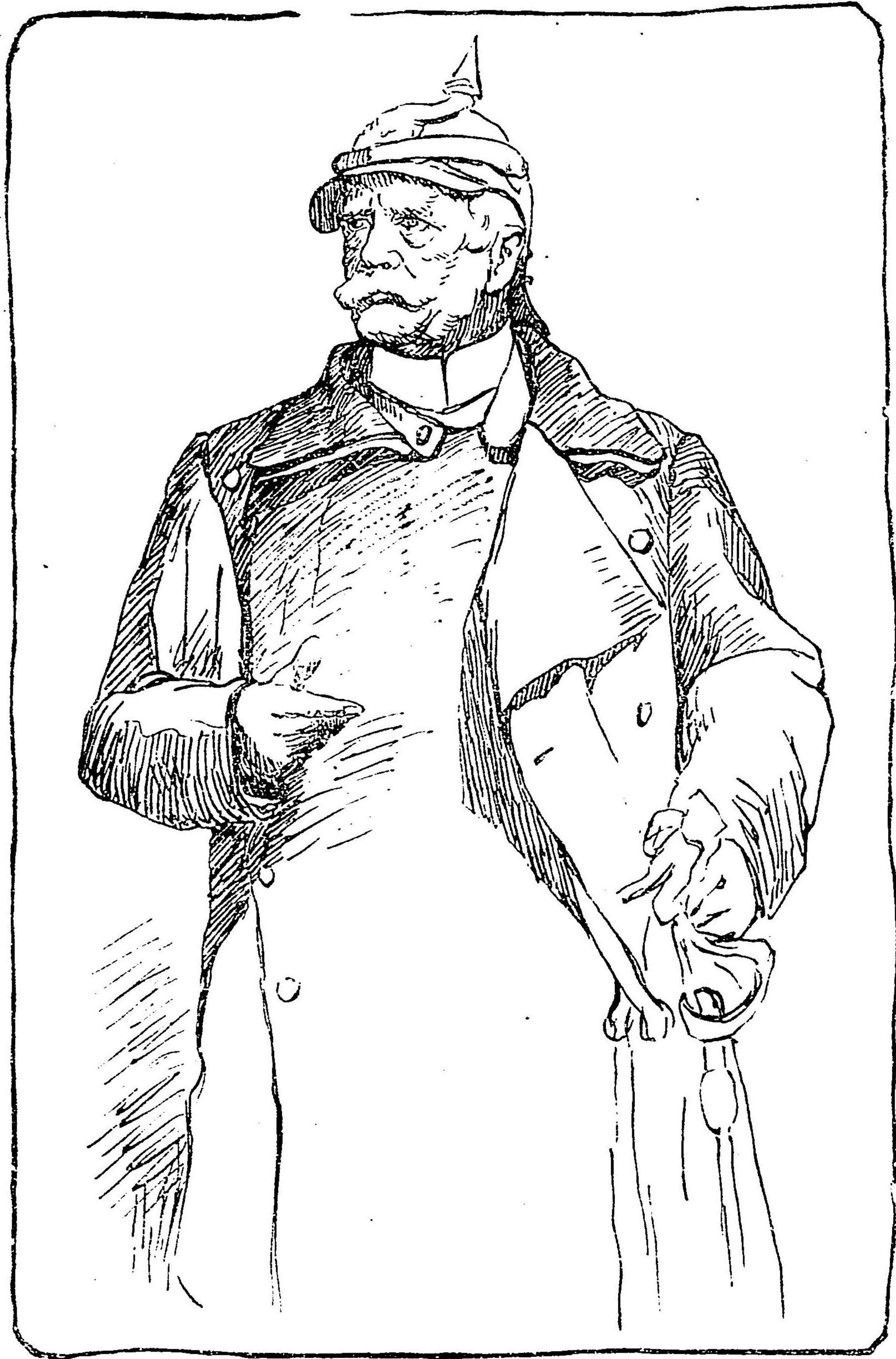
ペルシア人は蠶絲貿易の利益あるのを見て、ペルシア灣から海路支那との往來交通をして居たから、此の如く歐洲に養蠶術が興つた以來、全く其の利益を失つ

たであらうと思はれる證據は、西突厥の使者が矢張り一部分通商の目的を以て、西紀五百七十一年東羅馬に赴いた時に、養蠶術が開けてから後二十年たつたかたゝぬに、東羅馬では人民自製の蠶絲があるのみならず、其の製造法も頗る精巧を極め、殆んど支那産に譲らないのを見て、大いに驚いたといふことが傳はつて居るのを見ても知れる。

これからギリシアでは養蠶業が益々進歩して、蠶絲は其の特産物となり、其の後六百年間は他國でこれを知らなかつたが、或る時シリア (Syria) 王ロジエロ (Roger) 一世が東羅馬と戦を開いた時に、圖らず養蠶術及び蠶絲の製造に熟練したものを擧げ、これを使役して其の都パレルモ (Palermo) に製造場を設立してから、漸く伊太利、佛蘭西、西班牙に蔓延するようになったのである。併し是等の中で今でも最も佛蘭西が養蠶も絹の製造も盛んである理由は、有名なる佛王ヘンリー四世 (Henry IV) が非常にこれを奨励した結果である。王は廣大なる養蠶園を作り、盛んに桑苗を培養して、若し桑を植へ付けむと欲するものには其の望にまかせてこれを分配したから、佛蘭西に蠶絲業が勃興して今日の盛大を來たしたのである。英國で

はジームス一世 James I が養蠶業を開いて國産の一とせやうとしたが成功しなかつた。此の後英國では屢々これを試むるものがあつたが遂に功を奏さなかつた。今日英國が絹布の製造國でないのは此の原因があるからである。

尙ほ終はりに臨んで一言いふが、蠶種を支那から耶蘇教の僧侶が東羅馬へ持つて歸つたことは、これより少し後に書いた書物に記してあることである。疑ひない事實であらうが、蠶種は支那ばかりでなく、印度にも古くからあつた確かな證據があるのを見ると、何も苦しんで態々支那から取り寄せるよりも、古くから盛んに羅馬と交通が開けて居て、而も道中も樂で便利な印度から取り寄せなかつたのであらうか。殊に命を受けて支那から蠶種を持つて還つた僧侶が、もとは印度に派遣されて居たペルシア人の僧侶であつたといふことでも、少しおかしいのである。故に余はこれは支那よりは寧ろ印度から持つて行つたものであるまいかと疑ふのである。今學期はつい急がしいので是れだけしか書けないから、余は第二期で充分書く積もりである。



6. mai 1814
 Le prince de Joinville par la main de son fils
 a été obligé de signer le traité de Fontenay
 sous le sceau de la trêve. Le prince de
 Joinville a été obligé de signer le traité de
 Fontenay sous le sceau de la trêve. Le prince
 de Joinville a été obligé de signer le traité
 de Fontenay sous le sceau de la trêve.



205 - VERSAILLES. - LE MUSEE - L.P. phot
 Napoleon I^{er} à ses derniers moments par V. de

ナポレオン 晩年の肖像の其の書翰

歴史 (西洋の部)

講師 浮田和民

第十九世紀の英國

(上) 革命に依らず改革に依る

講 話

物事は先づ近きより遠きに及ばし既に知る所の事よりして漸次未だ知らざる所に至る。是れ正當の順序なり。此の原則によれば自國の歴史を先きにし次ぎに他國の歴史に及ぶと同時に先づ現在よりして過去に溯るが正當の方法なるが、一の不便は現在の事は複雑にして之を知ること困難なること是れなり。故に歴史は太抵古より今に及ぶを從來の叙述法とせり。是れ簡單より複雑に至るの原則に適へり。併し乍ら興味の少なき過去の事を先きにするの利益あり。されば余は先づ困難なれども興味の多き近世の事より始めて漸次古代の史談に及ばむと欲す。

「世界の歴史は大人の傳記なり」とは、カーライルの名高き言なるが、是れは眞理の一

半のみにして、其の全部に非ず。真理の全体を言へば、世界の歴史は、大國民の傳記と大個人の傳記とを以て組織せらるゝなり。社會及び歴史は、一方には、多數の人民あり、又た、他の一方には、少數なる偉人ありて出來るものなり。社會と大人物とは、即ち、史學の研究する二個の目的物なれば、常に之れに着眼するを要す。

前述の原則により、余は、先づ現今我が國に最も關係多き偉大なる國民及び、其の國民を代表せる偉大なる人物の事蹟を叙述する積りなり。即ち、先づ、第十九世紀に於ける英國の事を述ぶるは、我が國民に向かひて最も興味多かる可し。本年一月三十日倫敦に於て、日英同盟締結せられたる以上は、其の同盟を賛成すると否とに拘らず、英國近世の歴史を知らんと欲するは、自然の人情なり。況んや、我が國に於ては、御一新以來、英語は最も廣く行はれ、近頃は、全國の大小學校に於いて、正科として教へらるゝ所の外國語なるに於いてをや。何故に、英語は是の如く我が國に於て勢力を有するに至りしかば、抑、英國の歴史を知りて始めて理解し得べし。

英國は、其の實、大ブリテン及びアイルランド合衆王國と稱する國にして、イングランド、英吉利といふは、合衆王國の一部分のみなり。然かも、其の最も主要なる部分

なるが故に、便宜の爲め、之を總稱して英國といふなり。今を去ること百九十五年以前、西曆一七〇七まで、英吉利と蘇格蘭とは、君主のみを共同にしたる二個の獨立王國にして、英國及び蘇格蘭に、各々、獨立の議會存したり。然るに、此の年、兩國全く合併して一となり、其の名を大ブリテンと稱したる譯は、日本が、大日本と稱し、清國が、大清國と稱するとは、少しく其の意味を異にせり。元來、英國には、紀元後第五世紀の半まで、今の英人種居らずして、其の頃までは、ブリトンと稱する土人ありしが、其の頃より、歐洲大陸の方面、今の丁抹及び北部獨逸より、英人種即ちアングロサクソン人侵入して、遂に、ブリテン島及び、其の土人を征服し、爾來、南部は英吉利となり、北部は蘇格蘭となり、且つ、古來蘇格蘭の王は、英國の王を君主と仰ぎたることあれども、中頃、獨立して、對等國となり、一千六百三年以來、兩國の君主同一に歸したるも、國家は依然として、一千七百年まで、二個の獨立國家なりしなり。此の時、合同することとなり、偕て、何と名を附くべきか。全体をイングランドと言へば、蘇格蘭人、不承知を唱へ、また之をスコットランドと言ふことは、固より英吉利人の承知せざる所ゆゑ、遂に、古代の名稱、ブリテンといふことに決定したり。然るに、第五六世紀の

と定まりたる以上は喜んで多数の意見に服従す。是れ英國及び英國の殖民地に於て必ず議會政治を行ふことを得る所以なり。第三、彼等は偉大なる保守的精神あると同時に活動進取の精神に富める民族なり。彼等の法律は習慣律にして、特に廢止せざる所の慣例は、何時までも其の効力を有す。英國民は歐洲大陸に於て最も進歩せる國民なり。大陸諸國には、今猶ほ決闘の蠻俗行はるれども、英國には、既に其の消滅したるを見ても知らるゝなり。然かも英國の王室は歐洲第一の舊き王室なり。今王エドワード七世は英國一統の祖たるウエツセクス王エグベルト紀元後八三〇より三十八代の孫又ウイリヤム一世紀元後一〇八七より三十六代の王にして、皇統連綿たり。又英國は歐洲第一の貴族國にして、全國の土地概して貴族の所有なるに拘らず、其の貴族は、古來歐洲第一の平民的貴族なり。古來法律上貴族といふは、唯だ各貴族の長男のみに限り、其の長男とても父の存生中は法律上平民なり、故にマコーレーは英國の人民は古來最も貴族的なり、而して其の貴族は世界に於て最も平民的なりと言へり。

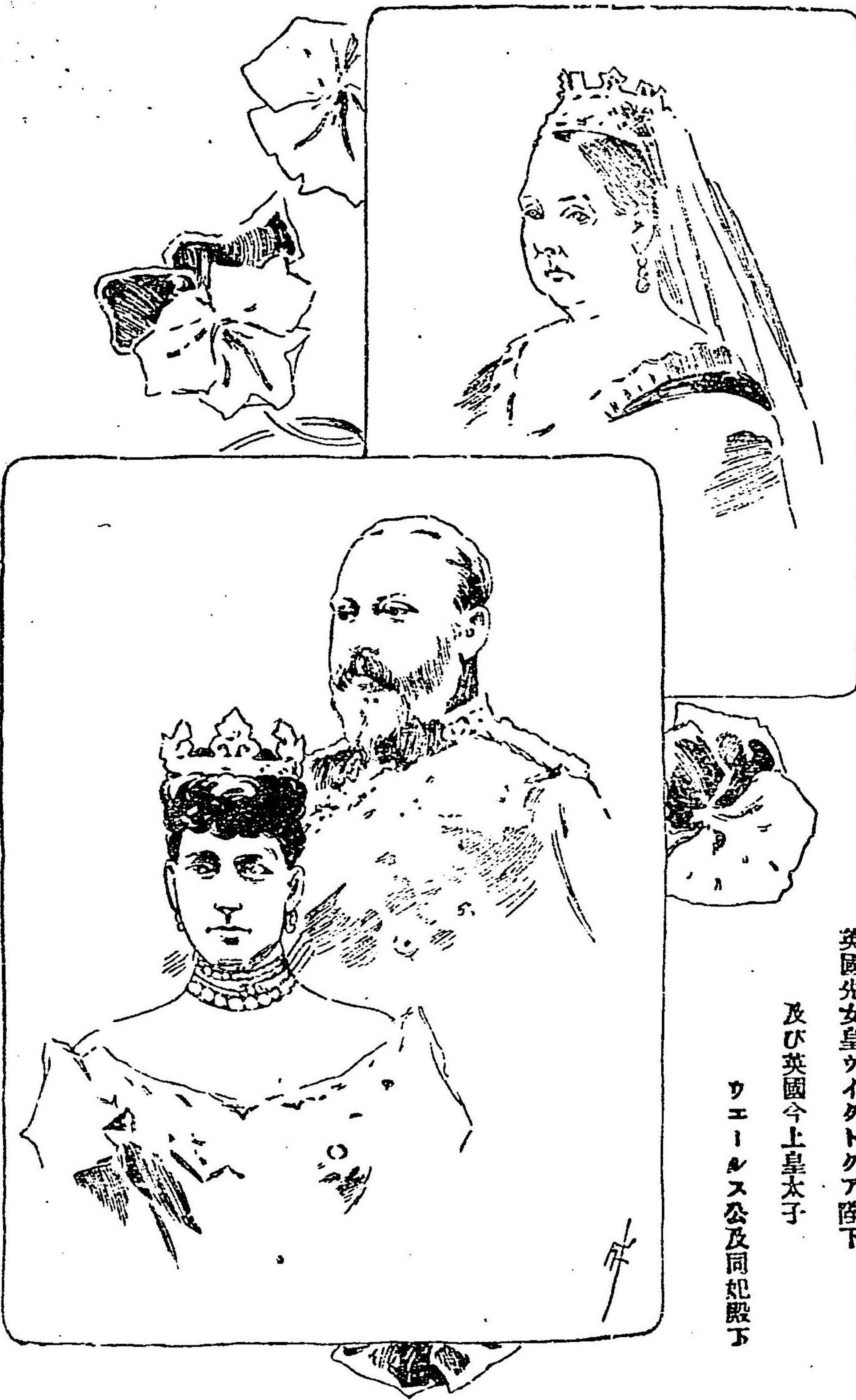
佛國は過去百年間に於て十四回その憲法を破壊したれども、英國の憲法は、今猶ほ

一千二百五十五年(六百八十七年前)の大憲章を基礎となせり。要するに英國人民は歐洲列國民の中にて最も善く祖先以來の美風俗善習慣を保守し、又漸次に其の弊害を除き去りて之を改善することを爲し、國民として最も偉大なる成功を爲したる人民なり。彼等は革命に依らず、改革によりて進歩する人民なり。其の事蹟は、一千八百三十二年の改革に於いて明白なりとす。

英國は第十四世紀以來二院制の議會を有したりと雖も、一千八百三十二年に至るまで、議會は上下兩院とも貴族の專制に屬したり。其の故如何となれば、二百年來選舉區の改正なかりしが爲めに、世態の變によりて、或る選舉區は僅かに貴族の所領あるのみとなりし處あり。而して選舉權には、非常の制限ありて、マンチエスタ、パーミンガム、ゾーグ等の諸地方は、近世商工業の發達により、人口、或は五万、或は十萬を有しながら、一人の代議士をも出だすこと能はざりき。故に多數選舉區の中には、殆んど人民なき處もありて、其の代議士は、單に、其の地の領有する貴族の選出に外ならずして、選舉毎に買収の悪弊甚だしく行はれたり。

チラムといふ土地は、二人の代議士を出だしたれども、其處には、一人の住民も居ら

ず、又ガットンといふ處も同様なりき。是等は、其の一例にして、斯かる選舉區の地を領有する貴族等は、或は其の投票を賣りて財源となし、或は其の欲する所の者を擧げて代議士たらしむることを得たり。されば、下院議員三分の二は、實際、貴族の推舉によりて選出せられ、大貴族は、各々下院に於て、其の自由に指揮することを得べき數人の代議士を有したり。又市の代議士も、市民全体によりて選舉せらるゝに、あらず、多くは市會若しくは市の特權を有する人民のみに限り、是れ亦少數の人民にして、投票を代議士に賣るの習慣、公然流行し、或は之れを以て市の負債を償却するあり、或は、廣告して、最高價を出す所の候補者を求むる處あるに至れり。又第十八世紀の後半期に於いて、ワットが完全なる蒸氣機關を發明せし以來、英國の北部は、石炭及び鐵材の産出地なるが、人口北部に輻輳したり。然るに、一千八百三十一年南部の十州は、人口三百二十六万にして、代議士二百三十五人を有し、而して北部の六州は、人口三百五十九万を有し、乍ら僅かに六十六人の代議士を有したり。是の如く、英國は、貴族專制の時代なりしかども、貴族等は、能くナポレオン及び佛國の強大に反抗して、英國の獨立を維持し、遂に國民と共にウオータールーの大勝利



英國先女皇ヴィクトリア陛下
及び英國今上皇太子
ウエーリス公及同妃殿下

を得且つ又戦勝の餘力により、一千八百三十年まで保守党政府の權を掌握したり。蓋し當時英國の法律は苛酷を極め、其の議會及び撰舉制度は腐敗甚だしかりしにも拘らず、ホイッグ黨自由黨は佛國革命に賛成を表したる結果、國民の信用を失したればなり。されば佛國革命(一千七百八十九年)以前より撰舉區改正の必要明白なりしかども、佛國革命の結果英國は却て、凡ての改革を拒絶し、遂に一千八百三十二年まで之を改革することを爲さざりしが、一千八百三十年再び佛國に革命起り、其の影響は列國に波及したり。

是れより先き、ウォータールーの名將ウエルリントンは英國の大宰相にして、彼れは嘗て、大ナポレオンの大軍を防ぎたる時の勇氣を以て、改革の氣運に反抗したりしが、勢當たる可からずして、遂に、一千八百三十年、その職を辭したり。是に於て、グレイ卿總理大臣となり、ジョン・ラッセル卿改革案を下院に提出したり。然れども、議會には、反對者多かりしが故に、解散を行ひ、全國改革案を旗幟として、選舉を争ひたる結果、新議會には、ホイッグ黨大多數を占めたり。然れども、上院の反抗によりて、改革案は、尙ほ、議會を通過すること能はざりき。其の報全國に傳はる

や、各地に大集會行はれ、ゾリストルに於いては、暴動起り、家屋焼かれ、人民殺傷せらるゝに至れり。一千八百三十一年十二月、改革案は三たび下院に提出せられたれども、翌年三月、上院は再び之を討議して、大修正を行はんとしたり。

グレイ卿は、國王ウイリアム四世(同千八百三十七年)にて、改革案賛成の議員五十人を上院に加へんことを請求して、聽かれざりしが故に、遂に、其の職を辭したり。ウエルリントン内閣を組織せんと欲して、能はず、又も、グレイ卿大宰相となり、前述の新議員を上院に加へて、以て、改革案を通過せしめんとするに至り、上院の反對議員等は、ウエルリントンの忠告により、遂に、缺席して、改革案を通過せしめたり。其の結果は、四十一の撰舉區を廢し、三十餘の撰舉區より、一人の議員を減じ、而して、其の代はりに、從來代表せられざりし都會に撰舉權を與へ、又大に、選舉者の財産制限を寛大にして、選舉權を中等社會に擴張せしめたり。是に於て、從來上下兩院を左右したる貴族の專制止み、漸次、人民の勢力、下院を支配し、上院は單に急激なる改革を制止するのみの機關となるに至れり。是れ、實に、一千八百三十二年六月七日(天保三年)のことなりき。

此の改革は如何にして成就したるかといふに、貴族中の一部は、改革の首唱者となり、而して、人民は急激なる要求を避け、貴族の主張に出でたる穏和的改革案を賛成し、之が後楯となりたるが爲めなり。マグナ、カルタ(大憲章)以來、英國の貴族の中には人民の利害休戚を忘れずして、貴族の利害と人民の利害とを一致せしむるの習慣存したり。是れ、英國が、大陸諸國とちがひて、革命を爲さず、常に、改革によりて國家の進歩を成就する所以なり。

第十九世紀の歴史は、第十八世紀の晩年、佛國より起りたる政治的大革命と、英國より起りたる産業上の大革命とを以て、其の二大要素と爲す。爾來立憲政治世界に流行し、又蒸汽機關製造大工場、天下に普及するに至れり。一千八百二十一年以前、英人ヘンリー、ベル及び、米人フルトン蒸汽船を完成し、一千八百二十五年、英人ジョージ、スチヴンソンの功によりて、鐵道建設せられ、又、一千八百三十七年に至りて、ウイットストーンは完全なる電信器を成就したり。是等の大發明は、固より、一人の發明に非ず、又一國民のみの發明に非ずと雖も、亦以て、第十九世紀の如何に驚く可き世紀なりしかを知るに足れり。

是れは、唯だ、物質上の進歩なるが、第十九世紀に於いて、列國道徳上の進歩は、更に驚く可きものあり。一千八百三十三年まで、英國の殖民地(西印度)には、奴隸の制度行はれ、奴隸は、最も慘酷に待遇せられたり。西印度に於いて、黒奴の婦人は、其の主人の女を譴責したる爲めに、越權なりとして、主人より百七十五笞を與へられたり。クラークソン、ウイナル、バーフォース、及び、バックストン等の志士仁人が、奴隸解放説を唱へて、社會に率先したると時勢の傾向とは、遂に、英國の殖民地に於いて、奴隸に自由を與へ、而して、其の所有主には、賠償を與ふるの議案、國會を通過し、米國に於けるが如き内亂を要せずして、平和に、三十万の黒奴を解放するの美舉は、行はれたり。

二千八百三十三年。次ぎに、同年を以て、始めて、英國に於て、工場條例制定せられたり。是れより先き、大工場起り、工業上の競争盛んにして、廉價なる婦人及び小兒の勞力を利用し、五歳六歳の小兒、毎日十二時間、若しくは十三時間の勞働を爲さしめらるゝに至れり。博愛なるアシレー卿後に、シャフツベリ、伯之れを憐れみ、終に、英國最初の工場條例を制定し、十三歳以下の小兒は、其の勞働を一日八時間、十三歳以上十八歳迄の小兒

して無事の音信を郷里に傳ふるの便法とは知られたり。コレリッチは此の物語りを郵便局の役員ローランド、ヒルに告げたり。是れよりヒルは郵便制度の改革せざる可からざるを悟り郵便局を經過する書狀の數、其の人口に對する比例、運送の費用等を精細に調査して、一書狀の爲めに郵便局が費やす所の費額を確定し、遂に一片四錢郵便税法の案を提出するに至れり。彼れは、實際、書狀運搬の費額甚だ小にして、且つ距離の爲めに増加すること、亦微々たる事實を發見したり。故に従來政府は郵税を高くすれば、従つて、收入多しとの原則を以て、郵便事務を取り扱ひしに、ヒルは郵税を廉にすれば、従つて、收入を増加することを得べしとの原則を主張したり。(一千八百三十七年而して、ヒルは、目方半ウオンス(三匁七分六厘)に一片の郵税を課し、而して、書狀受取人より税を取り立つるの不便を廢し、差出人をして郵便印紙を購ひ書狀に貼用せしむるの新案を發明したり。一時は、郵便局吏及び、議會の反對甚だしく、或は、之が爲めに政府の歳入を減ずること必然なりとて反對する者あり。又時の郵便局總裁リッチフィールド卿は、人民、此の制度を歓迎し、郵便局は其の事務と費用とに堪へずして、破裂す可しと非難したり。然れども輿論は

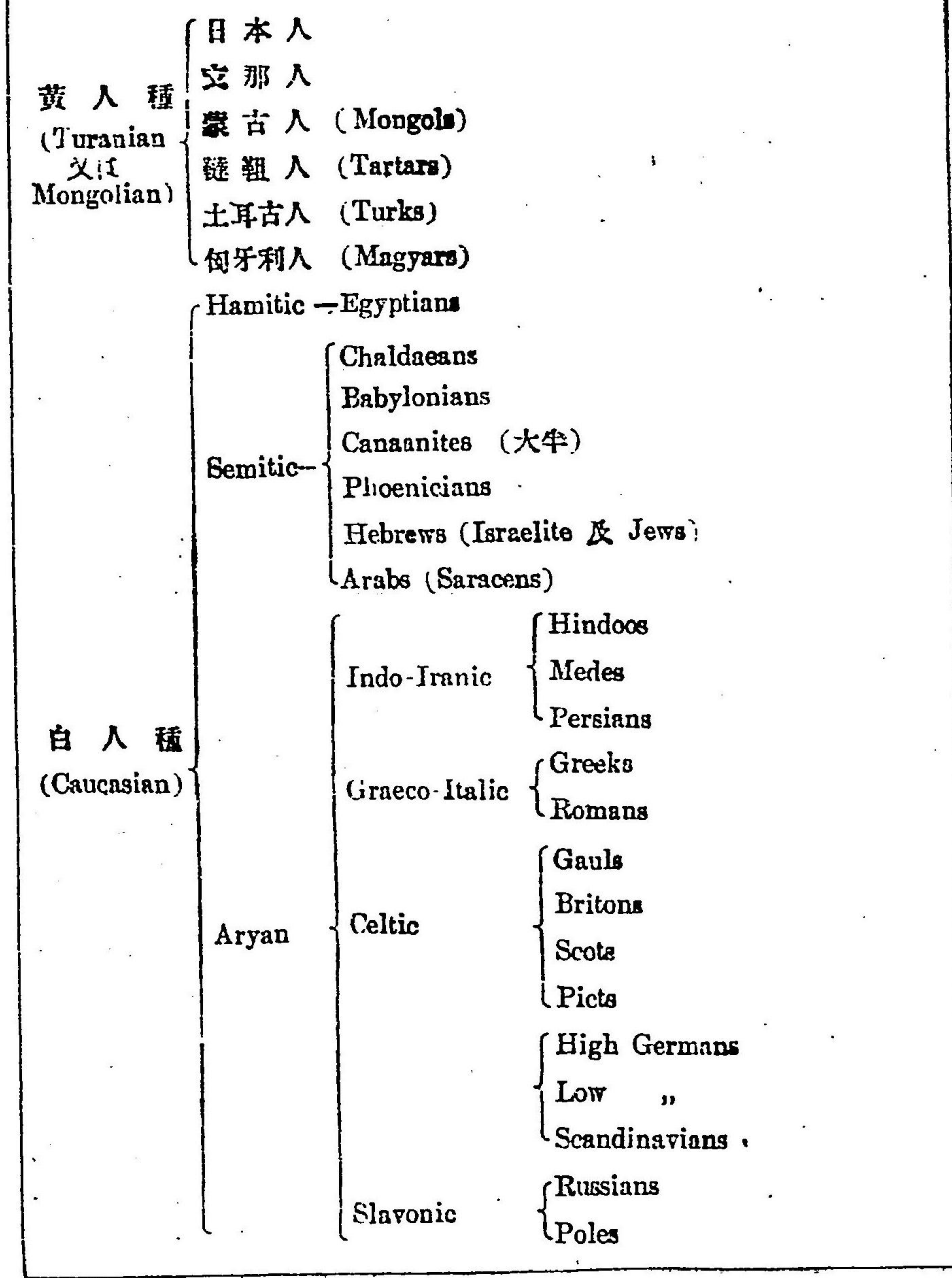
ヒルの新案を賛成して、請願書は、雨の如く國會に差出だされ、議會は、試みに國中遠近に拘はらず、一書狀半ウオンス(二片)の郵税となして、議案を通過せしめたりしが、(一千八百三十九年翌年一月遂に一片制度を採用したり。是れ現今文明諸國に行はるゝ郵便制度の起原なり。

●十九世紀の物質的進歩

カー、アイザック、ニュートン(一七二七)理學の基礎を開きラヴオアシエ(一七九四)化學を起し、より理化學の發達著しく十九世紀の始に於て、パリは科學研究の中心となれり。獨逸理學者アレキサンデル、フチン、フンホルトの力に依りベルリンに於ても科學研究漸く盛なり、フンホルトの『コスモス』(一八四五及び四七)ヘルムホルツの『コンサーヴエーション』、オヴ、エナジー(一八四七)チャールズ、ダーウソンの『マリジン、オヴ、スペシース』(一八五九)等世に出でしが、猶ほ科學の應用としてはスコットランド人ジェームス、ワットの蒸氣力利用法(一七六八)四(八四)米入フルトンの蒸氣船(一八〇七)同

トクステイヴンソンの蒸氣車(一八二六)は著しき物質的進歩を來せしものなり。▲その他一八二二(ロンドン)に於て瓦點燈始まり、一八三三に於てガス及びウエーベルの發明せる電信米入モース、英人ホイトストーンに因り完成せられ。尙ほまた一八五〇頃寫眞術發達せしが、▲それと同時に都市生活の大變動土地及び植物の化學的研究に依り農業は著しく進歩し、化學的肥料は發見せられ、農耕器具は改良されしことなるが、▲他の方面に於ては米入エチソンは蓄音器をグラハム、ベルは電話を、獨人ウヰルネル、ジイメンはダイナモ(一八六六)を發明する等その他最近の物質的進歩は一々枚舉するに遑あらずと知るべし

世界史に關係ある人種



歴史 (西洋の部)

講師 浮田和民

第十九世紀の英國

(下)偉老人グラッドストーン ("The Grand Old Man")

英國の歴史家フラーマン曰はく、歴史は過去の政治なり、政治は現在の歴史なりと。此の定義も亦、カーライルの定義と同じく、真理の一半にして其の全体に非ず。何となれば、歴史は社會の進化に關する凡ての現象を包含すべきものにして、單に政治上の現象のみを記載する筈の學問に非ざればなり。且つ政治は必ずしも社會現象の中、最も偉大なるもの、若しくは最も高貴なるものにも非ざるなり。社會現象の中、最も貴きものは、其の社會の中に行はるゝ人民の道德的生活にあるなり。此の意味に於ては、宗教、文學、美術、科學、哲學等は、却つて政治よりも高尚なりと言はざる可からず。然れども、政治が社會現象の中にて最も重要な所以のものは何ぞや。他なし、是れ、政治なければ社會に道德的生活成立するを能はざるが故なり。

文學哲學科學美術宗教等凡そ人間の精神的生命に關するものは其の經濟的
 活と同じく國家及び其の政治的保護なければ善良に養成せられ完全に發達する
 こと能はざるなり。されば歴史上専ら國家及び政治に關する事項を掲ぐるは之
 れを以て人間無上の貴きものと爲すが爲めに非ず唯だ之れを以て人間無上の貴
 きものを成立せしむる爲めに最も重要なりと爲すが故なり。人間の中政治家の
 み最も偉大なるに非ず又政治家のみ最も高貴なりといふに非ず。然れども政治
 家は社會の爲めに最も重要なるものにして彼れの一行一爲は國家の興廢社會の
 盛衰に關すること最も大なり。吾人は皆悉く政治家たらむことを期す可きに非
 ず。人生まれて一國の大宰相となるものは千萬人中幾人もなかる可し。然れど
 も人生まれて苟くも一國の臣民たる以上は國事に關して忠實なる判斷を爲し忠
 實なる行爲を爲すの義務あり。吾人は皆大宰相となることなかる可しと雖も一
 個の市民として國家の事を思考するに當たりては身自から大宰相の心事を以て
 之れを思考せざる可からず。

さて西曆一千八百三十二年は英國の歴史に於て二重に記憶す可き年なり。一は

英國が大陸諸國に反して平和に近世稀有の大改革を舉行したる年なり。又一は
 第十九世紀英國の大政治家グラッドストーンが始めて下院議員となり其の公共
 的生活の道途に上りし年なればなり。女皇ヴィクトリア一千八百三十七年の治世
 中英國に於て精神的に偉大なる個人は彼れの外に數多ありき。大文學者カーラ
 イルの如き若しくは大詩人テニソン若しくは大科學者ダルウインの如き即ち是
 なり。然れども彼等をして其の高尙なる生活若しくは貴重なる著作發明を爲す
 ことを得しめたるは他にグラッドストーン若しくはデスラエリーの如き人物あ
 りて國家の爲めに粗大なる政治上の任務を爲したるが故なり。政治家にして臨
 機應變の才に富み能く奇功を奏したるはデスラエリー後にビーコンスフィールド
 伯に及ぶものなかる可し。然れども彼れは元來猶太人にして生來の英國人に非
 ざりき。グラッドストーンの公共的生涯は一千八百三十二年下院議員に選舉せ
 られてより一千八百九十四年明治二十七年政治界を退隱するに至るまで六十二
 年の長年月間屢々要路に當たり四たび一國の大宰相となり且つ僅々一年半を除
 くの外常に議會の人として世に生活したり。一千八百三十二年の改革以後英國

史上の大事事件は海の内外を問はず、間接直接此の老偉人の生涯に關せざる者なく而して、彼れの生活は其の長所短所ともに最も能く英國民の性格を代表せりと云ふことを得べし。彼れは、ヴィクトリア女皇の即位に先だつこと五年にして政治界に入り、女皇の崩御に先だつこと七年にして政治界を退き、又之れに先だつこと四年にして、遂に他界の人とはなれり。女皇の治世は、英國王室ありて以來、最も長くして六十三年間に亘り、グラッドストーンの公共的生涯も、殆んど之れと同年月なりしが故に、第十九世紀の過半英國は万乗の君主としてはヴィクトリア女皇の治世なり、而して政治家としては老偉人グラッドストーンの時代なりといふことを得べし。

彼れは、其の名をウィリアム、エワルトと稱し、千八百九年十二月二十九日、リヴァプールに於て生まれたり。十二歳にして英國有名のイートン中學校に入り、在學六年にして、一千八百二十八年オックスフォード大學に入り、名譽を以て一千八百三十二年同大學を卒業したり。彼れの祖先は蘇格蘭の小貴族なりしが、後世に至り商業に従事したり。彼の父母は、純然たる蘇格蘭人なりしが、商業の都合により、遂

に英蘭のリヴァプールに轉居したり。彼は其の第三子なりき。彼れの生まれし頃は、大ナポレオン全盛の時にして、歐洲大陸は戰亂止む時なき有様なりき。彼れの父は、元來自由主義のホイグ黨なりしが、佛國革命の過激を厭ひて、遂に保守主義のトーリー黨となり、特に、第十九世紀の初期に於ける英國第一流の外交政治家カニンギングの政策を賛成したり。

グラッドストーンの家庭既に是の如く、而して、オックスフォード大學は、古來保守主義の城廓なりしが故に、青年のグラッドストーンは、最も純清なる保守主義者として世に出で來たれり。彼れが一生の大政敵たりしヂスラエリーは、最初急進黨として選舉を争ひ、遂に保守黨員として議員に選舉せられたり。グラッドストーンは保守黨として議員となり、次ぎに自由黨となり、遂に急進黨となりき。然かも、何人も彼れの誠實を疑ふ者なかりき。彼れは年二十二にして議員となり、ヂスラエリーは三十二にして、彼れに後るゝこと五年、遂に議員たることを得たり。此れは内治の改革に長じ、彼れは外交の政策に長じたり。此二大政治家の競争は、第十九世紀の後半期に於ける英國史上の一大偉觀にして、彼等が代表したる二大主義は今猶

は英國の政治界を支配しつゝあるなり。社會は活動進化して、須臾も同一なる位置に在ることなし。個人も亦其の思想及び主義に於て生涯同一なること能はざるは、自然の結果なり。要唯だ其の變遷進化の方法及び其の動機どうきの正不正如何にあるのみ。保守主義者としてのグラッドストーンは誠實なる保守主義者にして、人その誠實を疑ふ者なかりき。彼れは、一千八百三十二年の改革に反對して議員に擧げられたり。然かも彼れは、一旦成立したる改革を破壊せむとする頑固なる守舊主義者に非ざりき。彼れは、此の上の改革を以て國家の基礎を危殆きがいならしむる者とし、勉めて國家の善良なる要素を保守せむと決心したり。一千八百三十二年の改革案通過以後、總改選そうかいせんの結果、新議會は、翌年一月二十九日を以て開かれき、青年のグラッドストーンは、始めて議會に着席したり。彼れは、ロンドンの南西十六哩まいの處にあるニューアムクニューアムクの代議士として議場に上れり。當時、改革の結果によりて、政府は下院に於て多數を占めたり。然れども、其の多數中には、急進黨あり、又漸進黨ありて、從來の黨名たりしホイグは、以て、之れを包含するに足らざりしかば、これよりして、此の派は自由黨じゆうだうと稱し、又反對派は從來のトーラートーラーを改めて保守黨ほしうだうと稱

するに至れり。前者は四百八十六人、後者は百七十二人、而して議員の總數は六百五十八人なりき。保守主義者は、賢明なる首領サー、ロバート、ピールピールを戴きて、一致團結したる少數黨を爲し、又、第十七世紀以來、英蘭貴族の厭制に苦しめる愛蘭の議員も、亦政府に反對し、英邁不撓の辯士、オー、コンネルコンネル、之れを率ゐたり。元來、一千八百三十二年の改革は、中等社會に選舉權を分與したるのみにして、一般の人民には及ばざりしが故に、自由黨の政策は、保守黨より觀れば、早きに過ぎ、急進黨より觀れば、遲きに過ぐの憾ありき。一千八百三十四年、ウィリアム四世は、内閣を罷免ひめんして、ロバート、ピールピールに新内閣組織しんないかくそくしきを命ぜられたり。是れ英國に於て君主が議會の多數に拘らず、内閣を罷免したる最後の例なりとす。ピールは、グラッドストーンの才を認識して、之れを大藏省の高等官たらしめ、翌年彼れを殖民次官に登用したり。然れども、第一ピール内閣は議會に多數を制する能はずして、辭職し、グラッドストーンも、亦彼れと共に野に下れり。グラッドストーンの始めて議會に入るや、世間多數の代議士が爲す如く、唯だ自己の評判を高くせむが爲めに遊説を爲すの陋習を用ゐざりき。彼れは、言ふ可き事

なければ決して口を開かさざりき。故に、彼れの口を開くや、議會は必ず其の言ふ可きことあるを豫想して、之れに耳を傾けたり。彼のヂスラエリーは、一喝して議會の耳を聳てしめむと欲し、大失敗を爲したりき。此くの如きは、容易に着實なる青年政治家の倣ふべき方法に非ざるなり。グラッドストーンの首領サー、ロバート、ピールは、決して頑固なる守舊主義者に非ざりき。彼れは、改革の必要ある場合には、固より、改革を非難せざりき。唯だ、之れを爲すに當たりては、漸次に、沈着に、又、熟慮の上に爲すに非ざれば、其の永續するをなきを確信したり。一千八百卅五年、議會解散となり、グラッドストーン再び選舉區民に訴ふるに當たり、彼れは、最早舊來のホイグ及びトーリーの争に非ずして、保守黨と破壊黨との争なりとて、大に愛蘭黨の首領オーコンネルを攻撃し、王室、教會及び貴族の制を保守せざる可からざることを主張せり。一千八百三十七年、ウイリヤム四世崩御せられ、皇姪ヴィクトリヤ即位せられたり。翌年を以て、グラッドストーンは、國家と教會との關係と題する一書を著はし、國家も個人と同じく良心あり、故に、同時に二個の宗教を信ずる能はずとの論據よりして、大に國教主義を唱道したり。有名なるマコーレーは、此の書

を批評し、且つ其の著者は保守黨の望を負へる青年政治家なりと言へり。

一千八百四十年、英國は支那と第一回の阿片戦争を起すに至りしかば、グラッドストーンは大に其の不義を唱へ、支那政府の權利を主張したり。是れ彼れが終生用ゐたる道徳主義の外交政策にして、之れが爲めに、彼れは自由黨の諸友とも其の意見を異にしたり。一千八百四十一年、第二ピール内閣成立し、グラッドストーンは商務局副總裁に擧げられ、同四十三年總裁に擧げられ、始めて内閣に列したり。然れども、同四十五年、彼れが數年前、その著書に發表したる主義の爲めに、其の職を辭して野に下れり。

此の時に當たり、穀物條例の存廢は朝野の大問題となれり。此の穀物條例は、一千八百十五年の法律にして、内國生産の穀物を保護せむが爲めに、外國より穀物を輸入することを禁止する條例なりき。其の頃英國の議會は、殆ど全く地主の議會なりしが故に、此くの如き條例は、容易に制定せられたり。然るに、其の結果は、下等社會の人民をして、其の食物の爲めに高價を拂はしむるのみならず、大に商工業の發達を傷害したり。

一千八百三十八年、マンチエスターに於て、非穀物條例同盟會起り、コブデン及び
 プライト最も盛んに自由貿易の主義を唱道したり。ピールも亦漸次保護主義を
 撤去するの必要を悟り、一千八百四十二年、大いに保護税を輕減したり。同四十五
 年、更に數多の保護税を廢止し、或は之れを輕減し、同時に輸出税を全廢し、いよ
 自由貿易主義者たることを發表したり。
 然れども、彼れは保護主義によりて議會に選舉せられ、且つ、内閣を組織することを
 得たりしが故に、彼れの黨員たりしデスラエリーの如きは、翻つて大に、其の首領を
 攻撃し、彼れはホイグ黨の入浴中、その衣服を奪ひ去れり、彼れの内閣は組織的偽善
 内閣なりと非難し、自ら、ピールに代はりて保守黨の首領たる可き將來の運命を開
 きたり。此の時に當たり、非穀物條例同盟會益々其の勢力を増加したり。加るに
 一千八百四十五年の夏、愛蘭に饑飢起りて、人民饑餓に迫りしかば、之れを救ふ術
 は、外國より廉價なる穀物を輸入するの外なく、ピールも斷然意を決して、穀物條例
 を廢止せむと欲したり。然れども、閣員彼れに従ふことを拒みしかば、ピールは遂
 に同年十二月五日を以て、其の職を辭したり。然れども、新内閣成立せずして四月

三

二十日、ピールは、又内閣を組織したり。此の時、グラッドストーンも、ピールと同じく
 保護貿易主義を捨て、自由貿易主義を賛成し、殖民大臣として内閣に列したり。
 従來グラッドストーンの選舉區は、保護貿易主義なりしが故に、彼れは、直ちに、選舉區
 に向かつて、辭任の意を發表したり。一千八百四十六年一月五日。之れが爲めに、彼れは、自由貿易全
 勝の大議案討論中、議會に在りて、内閣を擁護すること能はざりき。保守黨分裂し
 て、一部はピールに反對したれども、自由黨の賛成により、穀物條例廢止案は、遂に議
 會を通過したり。五月廿五日。然れども、ピールは保守黨を分裂し、而して、未だ全く自由黨に
 も非ざりしが故に、遂に、其の内閣を保つこと能はずして、辭職したり。七月廿日。是に
 於て、グラッドストーンは、一時議會にも、又内閣にも、其の席を有せざりき。是れ、彼れ
 が公共生涯六十二年の長時間中、僅に一年半のみ議員に非ざりし時期にして、グラ
 ッドストーンの生涯に於ける第一期の終局なりとす。
 ジョーンラッセル卿内閣を組織し、尋いで翌年七月議會を解散し、グラッドストーン
 は、オックスフォールド大學を代表して、議場に出でたり。爾後、ラッセル内閣は、自由黨
 と保守派の一部たるピール黨員との賛助によりて、支持せられたり。一千八百四

十八年二月、佛國には第三回の革命起こりて、國王ルイ、フィリップ位を失し、共和政治設立せられ、ルイ、ナポオン大統領となり、列國その革命の爲めに動搖し、埃地利、普魯西、皆内亂を生じたり。伊太利も、亦同様にして、ネーブルス國王フェルヂナンド二世も、一時憲法を發布したりしが、爾後之れを破毀し、國事犯罪者二万人を禁錮し、普通の犯罪人と同様に之れを虐待したり。一千八百五十年の末、グラッドストーンは伊太利に旅行して、此の狀態を目撃し、公開狀を發して、英國及び文明諸國の輿論を喚起し、大に伊太利の自由の爲めに聲援を與へたり。

一千八百五十二年、ラッセル内閣倒れて保守黨之れに代はり、ダービー卿の第一内閣成り、ヂスラエリーは、一躍して出納尙書(大蔵大臣の次位上)及び下院首領となれり。然れども、彼れの提出したる豫算案通過せずして、内閣の瓦解を來たせり。蓋し、總選舉の結果保守黨は議會に多數を制するを能はざりしなり。是れより後廿五年の間、彼れは下院に於て保守黨の首領なりき。彼れは猶太人にして、百挫不屈、遂に英國の貴族を支配し、三たび出納尙書となり、二たび總理大臣となれり。彼れも、亦一世の大政治家なりしと固より論なし。彼れとグラッドストーンとの競争は、此の

時を以て始めり。英國の議會は、往時午前十時を以て開會し、次ぎには十二時より開會し、又現今は午後四時より開會するの習慣にして、議事往々夜を徹すること少なからず。一千八百五十二年十一月十六日、ヂスラエリーの財政案議題となりしに、多數は反對黨にして通過の望なく、彼れは獅子奮迅の勢を以て、容赦なく、反對者を痛罵し、全院之れに當たる者なく、討論は十七日午前二時に至りて尙ほ終結すべくもあらずしが、此の時グラッドストーン起立してヂスラエリーの強辯を挫き、其の財政案の基礎薄弱なることを指摘し、午前四時採決に及びて、ヂスラエリーの財政案は、遂に全く否決せられ、同日内閣は辭職したり。

是に於て、アパーヂーン卿内閣を組織したり。此の内閣は、自由黨とピール派との聯立内閣にして、グラッドストーンは乃ち出納尙書に擧げられたり。一千八百五十三年四月十八日、彼れの第一豫算案提出せられたり。彼れは、之れを説明するに五時間を要し、而して無味乾燥なる數字を以て、全議院の耳を敬てしめ、彼等をして恍惚心酔せしめたり。彼れの財政計畫は、直ちに成立して、非常の成功なりしが、同年、東方問題起り、翌年クリミア戦争一千八百五十四年同五十六年となり、英佛聯合して、土耳其格を保

全し露國の南進を防止せざる可からざるに至れり。當時グラッドストーンは平生の平和主義に反して猶ほ此の戦争に賛同したりしこと或人々の大に怪しむ所なりと雖も元來グラッドストーンは實際政治家にして絶對的に又抽象的に全然平和主義を主張する人に非ざりき。此の戦争に處するに彼れの財政的手腕は最も其の功を奏し遂に公債を募らずして悉く支辨を爲すことを得しめたり。彼れは一年の支出は一年の収入を以て補充せざる可からず且つ國家の戦争に際しては國中凡ての階級其の費用を負擔せざる可からずとの主義により所得稅酒稅等を増加して財源とはたりき。

クリミヤに於ける英軍の状態甚だ不結果にして政府は其の信用を失しアバーヂーン内閣辭職したり千八百五十五年一月然れども純然たる保守黨若しくは純然たる自由黨内閣共に成立せずして再び聯立内閣組織せられパーマーソン卿總理大臣となり。ピール派一時彼れの下に立ちグラッドストーンも猶ほ出納尙書として其の任を持續せしが幾程もなくピール派は分離して辭職しグラッドストーンも亦下院の一員のみとなれり同年二月。是れより以後彼れの位置は暫時未定なりき。彼れ

の同情は尙ほ保守黨にありしも彼れの意見は自由黨に符合せり。一千八百五十八年一月伊太利人オルシーニは佛帝ナポレオン三世を暗殺せむことを企て事成らずして死刑に處せられたり。彼れの計畫は英京ロンドンに於て準備せられたり。此の故に佛國政府は英國が外國犯罪者を保護するを詰責しパーマーソン之れに依りて一の議案を提出したりしが國論之れに反對して彼れは遂に其の職を辭し同年。爰に純然たる保守黨を後楯としてダービー卿の第二内閣成り、ダストラエリー其の出納尙書となれり。此の時までグラッドストーンは猶ほ全く保守黨と其の關係を断たざりしかばダストラエリーの如きは膝を屈して彼れを内閣に入れむことを勉めたり。此の時ダストラエリーは下院の保守黨首領なりしが故に内閣の實權は彼れに存したり。グラッドストーン豈に彼れの下に屈する者ならむや。是れ彼れが保守黨と最後の交渉にして爾後愈々自由黨に接近するに至れり。彼れは野に下りて以來三年の間單に議員として議場に列し而して特に希臘文學を研究しホーマーの詩に關せる一書を著はしたり一千八百五十八年。一千八百十五年維納會議の決議によりて希臘の西にあるアイオニヤ七島は英國の保護に屬したり。一

選舉權を擴張せむと欲したれども、保守黨は極力反對し、自由黨は一致を缺き議會の多數は、改革を欲せずして之れを否決したり。内閣は辭職し、ダービー卿の第三内閣成立し、ヂスラエリー、また出納尙書兼下院の首領となれり。議會は改革案を蔑視したれども、當時、労働者の階級は選舉權を渴望しつゝありて、特に北部の大都會には其の爲に大集會を爲し、運動甚だ盛んなりき。慧眼にして且つ急進的トリー主義のヂスラエリーは、改革の止む可からざるを察し、自ら之れを施行して、以て保守黨内閣の功績に歸せしめむことを欲したり。當時保守黨内閣の成立したるは偶然にして、議會に自黨の多數を有せし結果に非ず、唯だ反對黨の一致せざりしが爲めなりき。當時英國本部の人口凡そ三千万にして、一千八百三十二年の改革により、選舉權を有するもの猶ほ三十万人に過ぎざりき。政黨にして政權を握らむと欲せば、勢ひ改革を爲さざる可からず。唯だ、改革に反對するを以て政黨の主義と爲すが如きは、愚の至りと言はざる可からず。ヂスラエリーは元來急進主義にして終始中等社會と連結したるホイグ黨に反對したり。彼れ以爲へらく家屋を有する労働者の階級は、一千八百三十二年の改革によりて選舉權を得たる中

等階級よりも保守的なりと。是に於てか、彼は反對黨の改革に反對する能はざることを看破し、内閣員三人の辭職するをも顧みず、改革案を提出したり。グラッドストーン及び急進黨の賛成及び修正によりて、改革案は、一層選舉權を擴張し、其の結果は、ラッセル及びグラッドストーン内閣の提出したる改革案よりも更に急激なる改革、保守黨内閣によりて成就せられたり。一千八百六十七年八月十五日 保守黨は、自由黨内閣の改革案に反對して之れを倒し、却つて其の政策を奪ひて自黨の勝利と爲したり。ヂスラエリーも亦、ホイグの入浴中其の衣服を奪ひ去りたるものと言はざる可からず。翌年二月、ダービー卿健康上の理由により其の任を辭し、六十三歳のヂスラエリーは、之れに代はりて始めて首相の位に就きたり。改革案は、保守黨の爲めに奪はれたり。グラッドストーン乃ち兵法を一變して愛蘭問題を提出し、愛蘭教會を廢止するの決議案を通過せしめたり。首相ヂスラエリーは議會を解散したりしが、新議會は、自由黨多數を占め、グラッドストーンは年五十九にして始めて首相の位に昇り、一千八百六十八年十二月九日より同七十四年二月二十一日まで内閣を維持したり。此の間に於けるグラッドストーンの事業は、第一着に愛蘭教會アイルランドカトリックを廢止して、

ブルに會議を開き、土耳其政府に交渉を始めたれども、土耳其は一切改革の提議を拒絶し、露國は遂に基督教徒を保護するの權利によりて、土耳其に開戦を宣告したり。英國の輿論大に動き、土耳其の暴虐を忘れて露西亞の野心を憤り、全國頗る露國に向かつて開戦せむとするの姿勢を表はし、かば、グラッドストーンは畢生の力を以て輿論を制し、内閣をして容易に輕舉を爲すことを得ざらしめたり。當時、グラッドストーンは、倫頓及び下院に於て最も人望を失し、彼れの家は暴民の襲ふ所となり、夫妻倫頓市に於て安全に通行すること能はざりしことあり。一千八百七十八年、露土戦争の結果、土軍敗北して、遂にサンステファアの條約となり、英國の輿論は、ビーコンスフィールドの干渉政策を贊翼し、露國をして其の條約を伯林會議に附せしめ、伯は平和と光榮とを携へて歸國することを得たり。且つ、伯は、土耳其格をしてサイプラス島を英國に讓與せしめたり。ビーコンスフィールドは、此の光榮によりて、少なくとも二十五年間、保守黨の内閣は安全なる可しと思考したり。爾後英國政府の外交政策、益々外部に向かつて雄飛するの大勢を示し、一千八百七十七年には南亞弗利加のツランスワール共和國を合併し、翌年亞細亞に於

てはアフガニスタンに干渉して露國の南進を遮ぎり、次ぎには南亞の土人ズール種族との戦争起こり、政府は餘りに國權擴張に偏して其の止まる所を知らざるの感覺を興へたり。四年の間、グラッドストーンは極力ビーコンスフィールド伯の外交政策に反抗し、凡そ國民として自由と偉大とを兼有し、永久に大成功を爲さむと欲せば、自國の利益のみを眼中に置き、他の國家若しくは、民族の利益を無視するは短見なる政策なりとの大義を天下に唱道したり。一千八百七十九年、七十一歳の老翁グラッドストーンは、蘇格蘭ミッドロシアン州に於て、選舉を争ひ、十一月二十四日より十二月九日まで、日々一回若しくは二三回の大演説を爲し、壯者も及ばざる大活動を爲し、翌年の新議會に於て、自由黨は優に多數を制することを得たり。是に於て、グラッドストーンの第二内閣成立し、一千八百八十五年まで、自由黨政權を握り、再び内治の改革に着手したり。一千八百八十一年、ビーコンスフィールドは、七十九歳にして死し、グラッドストーンは一世の好敵手を失ひたり。然かも、グラッドストーンは、猶ほ此の後に於て大活動を爲さざる可からざるの運命を有したり。彼れの第二内閣に於て成就せられたる主要の改革は、一千八百八十三年に於

て腐敗手段禁止條例を通過し、國會議員候補者が正當なる選舉運動に支出し得べき費額及び其の正當に支出せらる可き費途を規定し、腐敗手段を用ゐる者を嚴罰し、以て投票買収の弊害を制止し、又一千八百八十四年自由黨保守黨協議の上第三の改革案を通過せしめ、更に選舉權を擴張し、三百萬人の投票者を加へ、殆ど普通選舉に等しき程度に進歩せしめたり。一千八百七十二年の秘密投票法、一千八百八十三年の腐敗手段禁止法及び同八十四年の第三改革案は、是れ今日英國が天下に於て最も純清なる議會政治を享有するに至りし所以なり。グラッドストーンの第二内閣は内は英國の世襲問題たる愛蘭事件の爲めに苦しめられ、外は前内閣が海外に於て施行したる武斷的帝國主義の結果、現内閣に報復し來り、一千八百八十年ツランスワールの叛旗を翻し、英軍を擊破するあり、翌年埃及にはアラビイ、パシヤ兵を擧げて歐羅巴人を驅逐せむとし、又次年スーダンには、偽聖マーデー回教徒を率ゐて埃及に獨立せむことを圖れり。グラッドストーン内閣はツランスワールが外國と條約を締結するに當たりて拒否の權を英國に留存し、其の自治獨立を許可し、埃及事件に關しては、英佛議協は、ずして英國獨り干渉し、アラビイ、パシヤの軍を

破り爾後埃及を以て英國單獨の保護となしたり。前者は自由主義の自然的結果而して、後者は前内閣帝國主義の結果にて、實は自由黨内閣の本意に非ざりき。スーダン事件に關しても同様にして、現内閣の方針は、前内閣方針の結果、首鼠兩端に流れ、空しく義侠の將軍ゴルドンをしてカルツーム城の露と消えしめ、一千八百八十五年に至りて、民心遂に反動し、サリズペリー卿をして保守黨内閣を組織せしむるに至れり。一千八百八十五年總選舉の結果、自由黨は三百三十四人、保守黨二百五十人、愛蘭自治黨八十六人なりき。是れより兩黨の勢力は、愛蘭黨の向背如何に存し、愛蘭黨は勢力の權衡を掌握し、而して其の首領バルネル能く、此の大勢を支配したり。愛蘭自治黨は、愛蘭議會を再興して自治權を得むことを要求したり。元來愛蘭の地主は英國の貴族にして、第十七世紀以來、征服の結果、地主となり、而して其の人民は、皆借地人となりて、地主の專横に苦しめられ、其の結果、愛蘭人民は常に英國に向かつて獨立せむことを希望し、且つ地主に向かつて人民の暴行止むことなかりき。一千八百七十年グラッドストーン第一内閣の時、愛蘭土地條例を制定して、借地人を保

まで持續したり。是れより以後議會の勝敗は、一に愛蘭問題に關し、愛蘭黨は、全く自由黨に合同し、而して、英蘭の北部蘇格蘭及びウェールズの人民、多く、愛蘭自治案に賛成したり。然れども保守統一兩派の多數に對しては、如何ともなすと能はざりき。然るに、グラッドストーンは、七十七歳の高齢にも拘はらず、自由黨中少壯者等の逡巡して分離したるにも拘はらず、毫も退隱する氣色なく、ミッドロシヤンの代議士として自由黨を引率し、六年の間、愛蘭自治案の爲めに奮闘したり。此の間、愛蘭の形勢益々非にして、或地方には、地主と借地人との戦闘を生じ、自由黨は、漸次その舊黨員を回復し、内閣は、漸次其の多數を失ひつゝあるを自覺し、議會を解散したりしが、一千八百九十二年七月の選舉の結果、自由黨三百五十五人、保守統一派三百十五人にして、八十二歳のグラッドストーンは、四たび英國の内閣を組織するに至れり。是れ、固より輿論の大勢愛に到りたるの結果なれども、此の大勢を作りたるは、専ら、偉老人グラッドストーンの力なりとす。翌年二月十三日、彼れは、前回の自治案を修正して更に下院に提出し、八十餘日の間、非常なる激論紛擾の後、九月一日、遂に下院を通過せしめられたれども、上院の爲めに直ちに否決せられたり。此くの如く、自

治案は、法律とならずして止み、且つグラッドストーンは、高齢の爲め、翌年政界を退隱し、ローズベリー卿之れに代はりて、内閣を維持したれども、英邁非凡の首領去りて、黨勢振はず、一千八百九十五年七月、又サリズベリー卿の第三内閣組織せられ、今に、此の内閣持續しつゝあるなり。

グラッドストーンは、退隱後も、尙ほ、天下の大勢に就いて、時々意見を吐露して止まざりしのみならず、土耳其人がアルメニヤ人を虐殺するの事件起りしかば、一千八百九十五年八月、チェスターの大會に臨んで、其の人道に反するを痛論し、英國政府は、土耳其に干渉して虐殺を停止せしむる義務あり、又權利ありと主張したり。

彼れは、多忙なる公共的生涯の間にありて、多大の著述を爲し、大小十八部、又外に其の諸雜誌に寄稿したる論文のみにても、八冊の多きを成すに至れり。一千八百九十四年大任を解く日に於て、彼れは、羅馬の詩人ホレースの古詩を翻譯し了へたり。此の詩は、未だ曾て英語に譯されたることあらざりしなり。ヂストラエリーは、小説家として名を爲し、グラッドストーンは、神學者及び文學者として、優に其の名を著したり。現首相サリズベリーが科學に通曉せるが如き、また以て英國政治家の如

何に趣味多方面なるかを知るに足れり。且つ、グラッドストーンは生涯嚴格なる宗教家にして、日曜日に俗務を談じ又之れを爲すことを固く禁じたりしことは、彼れをして久しく世務に堪へしめたる一原因なりき。彼れ曾て、小學生徒に告げて曰はく、走るときは一生懸命に走り、飛ぶときは一生懸命に飛ぶ可しと。彼れの生涯も亦此くの如くなりき。而して、彼れは安息すべきときには固く安息することを生涯の規則となし、又其の郷里ハワルデン城に於て伐木を爲すことを無上の遊戯となしたり。彼れは元來保守黨より身を起し漸次自由黨となり遂に急進黨となりしも、彼れの品性は確乎として動かす可からざる保守的大特質を有したり。彼れは終始正統主義の基督教徒なりき。凡て現存の制度に對して、必ず敬重の念を發するは、彼れの自然的特質にして、正義の爲め、又國利民福の爲め改革の止む可からざることを證明せらるゝまでは、之れを保守することを勉めたり。故に彼れが爲したる所の大改革は、一として其の始めに於て、彼れが反對したる所の事ならざるはなかりき。然かも、改革の必要及び其の正義なることを確信するや、如何なる大困難の途に横はるゝありとも、必ず之れを貫徹せざれば止まざるの剛氣を有し

たり。彼れは愛蘭自治案を以て、寧ろ復舊政策なりとし、一千八百一年に廢止せられたる愛蘭議會の再興なりとし、且つ、帝國の統一及び平和を保守するの政策なりとして、之を主張したり。人として、若し社會上の大改革を成就して、永久に成功せむと欲せば、如何なる急進政策を採用するに當たりても、其の根底には偉大なる保守的精神なくんば、あらざるなり。青年の時には、何事にも急進説を主張し、老年に及んで、全く保守的となるは、常人の通弊あり。是れ人が年に負くる結果にして、經驗の進歩發達とは言ふ可からず。社會に此の如き青年と老人とのみ多きときは、社會は常に急激なる革命と頑固なる守舊的的反動との間に彷徨して、着實健全なる進歩發達を爲すこと能はざるなり。是れ余がグラッドストーンを以て、アングロサクソン人種の代表的人格なりと爲す所以なり。彼れは、一千八百三十九年三十歳にして結婚し、數人の子女を産み、一千八百九十八年五月十九日六十年間の夫婦永別を爲し、獨逸の鐵血宰相ビスマルクに先だつこと、僅かに二ヶ月餘を以て逝去したり。其の翌日を以て、女皇及び議會より、彼れに國葬の榮を賜ひ、且つ、ウエストミンスター寺院に彼れを葬り、其の傍に、夫人の墓をも設け置く可しとの命令發布せ

五〇
られたり。是れ彼れが國家より受けたる唯一の特典にして彼れは屢々貴族に叙せられむとの恩命ありしも終身下院議員たらむことを欲して其の恩命を固辭したり。然れども誰れ言ふとなく偉老人の稱號は彼れの晩年一般に行はれて彼れが名譽の緯名とはせられたり。

此の如く第十九世紀の英國は他の列國と異にして何等の内亂もなく平和的に改革進歩の發達を爲したり。然れども是れ其の内部の歴史にして斯かる自由發達の結果外部に向かつて英國の爲したる大膨脹あることを忘る可からず。第十九世紀の初年に罪人の捨場所なりし濠太刺利亞洲は今や儼然たる六大聯邦となり又個人の事業としては本年三月死去したるセシル・ローヅ一人にて南亞弗利加に於て英國本部に五倍せる大版圖(ローデシヤ)を開拓したり。以て内部の自由は外部の膨脹となることを記憶すべし。グラッドストーン死し且つツランスワール戦争起りし爲めに愛蘭問題も一時休息の姿なりきと雖も今や戦争終局したれば又愛蘭問題復たび其の解決を促がし來たり到底グラッドストーンの精神を以てするに非ざれば解決せられざることを示す可し。

歴史 (西洋の部)

講師 浮田和民

鐵血宰相ビスマルク

(一) 獨逸帝國の由來

英國は議會政治の本家本元だけに其の政治家も亦議會的政治家なり。グラッドストーンと云ひヂスレエリと云ひ何れも政黨の首領にして其の成敗は多く議會の上に存したり。之れに反して歐洲大陸の政治家は多く外交政治家なり。是れ大陸にては列國地を接して互に競争甚だしく第十九世紀の後半期まで列國の關係は往々干戈に訴へて是非曲直を決する場合多かりしが故なり。新獨逸帝國の創業者たるビスマルクは徹頭徹尾外交政治家なりき。彼れの成功は四方強國に圍まれて進退自由ならざりし普魯西國をして現今の如く獨逸を統一し獨逸帝國を組織して歐洲の大強國たらしめたるに在り。

現今の獨逸帝國は歐洲の中部に位し東は露西亞、南は佛蘭西、西は佛蘭西、白耳義

及び荷蘭の三國に接し、南は奧地利、瑞西の二國、北は北海、丁抹國及びバルチック海によりて圍まれ、其の人口は六千万人以上、其の面積は二十万八千八百三十方哩ありて、日本帝國よりも大なること四分の一強に當たれり。其の組織は所謂聯邦帝國にして、四王國、六太公國、五公國、七小諸侯、三自由市府及びアルサース、ロレーシの二領土より成り立てり。就中、普魯西は聯邦中第一の大王國にして、人口面積ともに全帝國の半を占め、且つ其の王は、代々、獨逸皇帝の位に就くの憲法なり。帝國議會は二院制にして、上院には聯邦中の各州政府より議員を出だし、下院には一般人民より普通選舉納税制限なく、丁年男子を以て代議士を出だすの方法なり。以て封建時代の遺風、顯然として、其の憲法に存するを見るべし。こは一千八百七十一年以來の憲法にして、全く普佛戰爭に於ける勝利の結果なり。而して實に鐵血宰相ビスマルクの功業に外ならず。

中世シャーレメーン大帝の帝國瓦解して、獨逸、佛蘭西、伊太利の三國に分裂し、紀元後八四三爾後獨逸王オットー一世、伊太利を征し、九百六十二年、シャーレメーンの例に従ひ、羅馬に於て皇帝の位に就きし以來、代々、獨逸の王は、同時に伊太利に於て羅馬教の

法主羅馬法王羅馬皇帝の帶冠式を爲すの習慣を生じ、第十二世紀より神聖羅馬帝國の名稱起り、獨逸、伊太利は久しく同一帝國の下に屬したり。而して其の皇帝は獨逸七大諸侯によりて選舉せられ、皇帝を選舉する諸侯を司選侯と稱したり。中世の晩年、土耳其格起りて、歐羅巴の患となるに及び、奧地利は防禦の衝路に當たりしかば、其の太公、ハブスブルヒ家は、代々、神聖羅馬皇帝に選舉せられたり。而して第十六世紀宗教改革以後、羅馬に於ける帶冠式廢止せられき。然るに、中世の間、皇帝は常に伊太利を服従せしめむことを勉めて、却つて、獨逸の統一を怠りたるが故に、獨逸の諸侯は漸次、その封土及び權力を増長し、皇帝は諸侯として土地人民を領するの外、皇帝としては殆んど何等の土地及び人民をも有せざる程となり、且つ伊太利も漸次、數多の獨立國に分裂し、獨伊ともに、第十九世紀の後半期まで、統一に歸すること能はざりき。他の列國は、中世より近世に進むに従ひて、漸次國內統一に赴くの大勢なるに、獨逸は却つて、益々分裂割據の姿となり、第十七世紀三十年戰爭の爲めに、皇帝の權は殆んど有名無實に歸し、常に佛蘭西の爲めに國命を制せられたり。近世史上に於て、佛國の霸權は常に、獨逸の分裂を意味し、佛國は隣國なる獨

逸の不統一によりて、其の勢力を逞しくすることを得たりき。中世以來、西歐羅巴に於て皇帝と稱し得るは、神聖羅馬皇帝一人のみにして、英佛、其の他は皆、王國若しくは諸侯と稱したりしに、一千七百八十九年、佛蘭西大革命起り、尋いで、ナポレオン第一世英雄の天資、革命の風雲に乗じて、頻りに列國を蠶食し、一千八百四年、自から皇帝と稱するに及び、獨逸の南部諸國は、ライン同盟を組織して、ナポレオンの節度に従ひしかば、神聖羅馬帝國は、名實ともに消滅し、其の皇帝フランシス二世は更に、墺地利を帝國と爲し、自から墺地利皇帝フランシス一世と改稱せられたり。是れ、今日、墺地利が帝國と稱する所以にして、西歐羅巴に一個以上の帝國を見るに至りし濫觴なり。

(二) 普魯西王國

普魯西王國も、亦、大ナポレオンの爲めに非常なる大打撃を蒙りたり。元來、普魯西は公國領なりしが、一千七百一年、皇帝の許可によりて、王と稱し、第十八世紀の中葉、フレデリク(フリードリヒ)大王の治世(一七四〇—一七八六)に至りて、歐洲列強の一となるを得たりき。第十九世紀の初年、墺國を首めとして、佛國の四隣ナポレオンに屈服し

たりしが、普魯西は、中立して、猶ほフレデリク大王の遺業を保ちたりき。然るに、一千八百六年、國王フレデリク、ウイリヤム(フリードリヒ)ウイルヘルム三世ナポレオンの輕侮を憤りて、兵を擧げたりしが、エーナの一戰、普軍の敗北となりて、擧國佛軍の爲めに、征服せられ、一千八百七年、チルジット條約によりて、領土半ばを失ひ、ナポレオンの大陸政策を奉じ、英國船舶の入港及び英國との通商を拒絶し、四万二千以上の常備軍を置くことを禁止せられたり。又、莫大の償金を科せられ、其の皆済に至るまで、十五万の佛軍は、普國の領内に駐在し、普國は、其の資力によりて、之れを扶持するの義務を負はせられたり。是れ、實に普魯西の爲めには、會稽の恥辱なりしも、悲しい哉、全國猶ほ未だ封建時代の陋習を脱せず、農民は半奴隸の状態に在りて、二十年間、兵役を強迫せられ、士官は、悉く、貴族に限りて、平民の就官を許さず、而して、商民は、軍隊に入るの權利なく、又、義務もなく、更に愛國心を有せざりき。然るに、佛國は、革命の結果、四民平等となり、町人も農民も、自由權利を得て、愛國心一般に普及し、破竹の勢を以て、君主專制貴族暴横の列國を蹂躪したり。是に於て、普國の君臣始めて、改革の必要を自覺し、此の國難によりて、將來復活の端を開くに至れり。

此の時普魯西の宰相に擧げられたる偉大の人物あり。之れをフォン、スタインと言へり。一千八百七年十月九日、彼は解放令を發して、貴族、商人、及び農民の制限を廢し、彼等をして自由に其職業の選むの權利を與へたり。從來農民は、代々、或る貴族の領土に住して、其の土地を耕へし、且つ、其の子女は、貴族の邸宅に就きて無給の奴婢たるの義務を負ひたりしが、是に於て、彼等は、唯だ貴族に對して地主と借地人との關係を有し、始めて、自由の人民となることを得たり。スタインの改革は、實に普國に於ける自由の大憲章と稱せらるゝなり。彼れは、ナポレオンの忌諱に觸れて翌年、その職を辭せざる可からざるに至りしかども、彼れは、塊地利に往き、遂に、露西亞に往き、以て、ナポレオンを倒し、祖國を興すの畫策を爲し、遂に、一千八百十五年、ウオーターローの戰勝を見るに至れり。

スタインの改革の一部分にして、然かも、現今獨逸の勃興に大關係を有するものは、軍務委員長、シャルンホルストの兵制改革なりき。エーナの一戰以來、普國は、全國人民を皆兵となすの必要を悟りしかども、國土その半ばを失ひ、戰敗の餘、免ても四万以上の兵を蓄ふること能はざりき。是に於て、彼れは、現役を三年となし、豫備兵

後備兵、及び國民軍の新制を定め、漸次、國民をして兵役に習熟せしめたり。是れ一千八百十三年、普魯西が遂に露英と同盟して、佛國の束縛を脱し、ウオーターローの勝利を得るに至りし所以なり。而して、一千八百七十年、普佛戰爭の結果、普國の勝利となりし以來、此の兵制は、歐洲大陸諸國一般に行はれ、現に我が國に於ても、兵制の原則として採用せられたる所なり。

三、ウオーターロー戰後の獨逸

一千八百十五年六月十八日、ウオーターロー（白耳義、ワイターロー）に於て、大ナポレオン敗軍し、セント、ヘレナの孤嶋に流されたる後、獨逸は、維納會議の結果として、散漫なる聯邦制を組織し、遂に、神聖羅馬帝國を復興すること能はざりき。佛國革命以前、獨逸は、二百餘の列侯、及び五十の自由市府（自治權を有する共和制の市府）あり、其の外、數百の騎士（小貴族）ありて、人口三四百の土地を領有したりしが、ナポレオンの爲めに、小諸侯騎士及び自由市府は、多く消滅し、戰後の獨逸は、三十九ヶ國を以て聯邦を組織し、塊地利を議長として、フランクフルトに聯邦議會を常設したり。聯邦の中、サクソニー、ウーラテンブルグ及びパウリヤは、大ナポレオンより王號を許されたりしが、維納會議

(四)ビスマルクの出處

ビスマルクは、一千八百十五年四月一日(ウオーターール戦争前)普魯西の一州マグデブルグ縣の一村落シエンハウゼンニ生まれたり。彼れの名は、オットー、エツアルド、レオポルト、フオン、ビスマルクと謂ひ、又ビスマルク、シエンハウゼンと稱したり。彼れは騎士の家に生まれ、父の名はカール、ウイルヘルム、フエルデナント、ビスマルクと云ひ、其の母はルイゼ、ウイルヘルミナと云ひ、ビスマルクは其の第四子なりしが、一兄一妹の外、他の同胞は、皆早世したり。彼れの家は舊家にして、祖先皆武人或は政治家として、名を顯はし、者多し。彼れの曾祖父アウグスト、フリードリヒ、フオン、ビスマルクは、フレデリク大王の一騎兵として、一千七百四十二年奥國との戦に討死したり。母方の祖父は一平民なりしかども、フレデリク大王に事へて、其の外務に參與し、又同様の資格を以て、フレデリク、ウイリヤム二世及び三世に事へ、樞密議官の稱號を附與せられたり。ビスマルクの外交官たるの資格あることは、其の母の夙に認識せし所にして、母方の血統を受けたりしを明白なり。而して彼れが外交政略の後詰は、常に軍隊にあるを確信し、其の身も亦武人の品格を具備

したりしは、祖先以來父方の系統に出でたりと云ふことを得べし。彼れの父は、一千八百六年に結婚したりしが、是れ則ち普魯西が大ナポレオンの爲めに覆へされたる年なりき。されば、彼れが祖先以來の領地たりしシエンハウゼンの莊園も、佛兵の爲めに掠められ、家財及び貴重なる系圖を破壊せられたり。是等の事件は、疑ひもなく、父母の物語により、ビスマルクの青年時代に於て佛國に對する憤慨の念を深くせしめたるや知る可きなり。

ビスマルクは六歳にして伯林の小學校に入り、十二歳にして中學校に入り、在學五年、其の間最も歴史を好み、而して佛英兩國語に習熟したり。是れ後年、ルイ、ナポレオン(ナポレオン三世)として彼れが佛語の發音の正確なるに驚かしめ、又伯林會議の時、英相ビーコンスフィルド伯をして、其の英語を用ゐるの巧妙なるを歎美せしめたる所以なり。一千八百三十二年、英國に於ては、二十二歳のグラッドストーンが始めて國會議員となりし時、ビスマルクは、年十七にして法律學を修めむが爲め、ハノーヴァーの大學ゲツチンゲンに入ることを得たり。獨逸の大學は、荆棘に満ちたる人生の中の一樂園と見做され、國中の青年が磊々落落々の生活を爲す所なり。後

には規律嚴なる中學の教育あり前には社會の制裁及び國家の要求横はるあり。此の中間に在りて自由の天地を爲すもの實に、獨逸の大學的生活なり。ビスマルクも亦如何に其の仲間入りを爲したるかば、彼れが在學一年半の間、二十八回の決闘を爲し、一回を除くの外、毎度對手をして負傷せしめたるを以て知らるゝなり。獨逸大學に行はるゝ此の習慣は野蠻の遺風に相違なしと雖も、其の實、ビストルを用ゐるに非ざれば、一種劍術の仕合に外ならず、且つ、一定の式ありて助手その危険を豫防するなりと云へり。兎に角、ビスマルクは幼少よりヤーンの愛國的體育を受け、疾走、飛躍、水泳、操舟、乘馬、射術等、凡べての男らしき遊技に長じたりしは何人も好く知れるところなり。

一千八百三十三年、ビスマルクは、伯林大學に轉校したり。中世以來、大陸の大學生は、終始一大學に留まることなく、自由に他の大學に移轉するの習慣あり、當時ビスマルクは未だ慈母の希望せし如く、外交官たる志はなかりしも、兎に角、地方の紳士として行政事務に適合するの資格を具備せんと欲し、遂に試験に及第して、伯林の一裁判所に書記となることを得たり。彼れが職務に忠實にして、且つ、如何に勇往

果敢なりしかば、次の逸事にて知らるゝなり。或る時、一證人、頑然として裁判官の命に従はざりしかば、ビスマルクは叱咤して曰はく、氣を附けよ、然らずんば、我れ汝を蹴出だすべし」と裁判官、彼れの暴言を制して曰はく、書記君よ、蹴出だすことは我が職務なり」と。然るに、ビスマルクは、證人の證言を更に改善せざるを見て、又大喝して曰はく、氣を附けよ、然らずんば、我れ、裁判官をして汝を蹴出ださしむ可し」と。後年、彼れが塊地利を獨逸より蹴出だし、又、ナポレオン三世を佛國より蹴出だしたりし意氣既に顯然として見るべきなり。

一千八百三十六年、エークスラ、シャベル(アーヘン)に轉任し、此處にては専ら行政上の任務に従事し、同三十七年、更にポツツダムに轉任し、此處に於ては一年志願兵となり、次ぎにはボマレニア(ボムレン)にある父の領地を管理し、或はシエンハウゼンに歸りて、父を助け、或は遊獵を事とし、或は英佛に遊び、或は歴史を讀み、或はスピノザの哲學を學び、數年の間、一世の偉男子、未だ其所を得ずして無聊に苦しめるの状ありき。當時、普國には未だ國會あらず、而して大臣及び高等官の引援なしには、昇進の路甚だ遅々たりき。

（五）ビスマルクの政治的立脚點

ビスマルクの母は、一千八百三十九年に死去したり。彼の女は自由主義の婦人にして、彼の女の父も亦自由主義改進黨の人なりき。一千八百三十二年、ビスマルクの大學に入るや、彼れは當時獨逸の統一及び自由を以て理想となせる學生の同盟ブルシエンシャフトに加はれり。彼れの父も元來小貴族なりしに拘はらず、毫も貴族の偏僻を有せず、人間平等の感覺強かりき。されば、ビスマルクも元來貴族主義若しくは專制主義の人には非ざりき。彼れは小學時代に於ては有名なるベスタロツチ及び武術と愛國的自由思想を鼓吹したるヤーンの教育法により、薰陶せられ、其の大學に入りし頃は共和政体を以て理想的政体と思考せむとするの傾向さへありき。然れども、彼れが祖先以來普魯西人としての天性は彼れをして王室に忠を盡くし、國法を重んずるの精神を失はしむることなかりき。又、彼れは、史識及び人情を知るの明ありて、急進的自由主義者が君主制を批評するに拘はらず、幾百万の人類をして一人の君主に服従せしむるの原因を深く思考したり。雅典の古史に於て執政者を刺殺したるハルモデイアス、アリストガイトンの二人及び

羅馬の英雄シーザルを刺殺したるブルタス、又、瑞西の愛國者として世人に持て囃さる、ウイリヤム、テルの物語の如き、彼れは、小兒心にも、猶ほ犯罪人なり謀叛人なり殺人者なりとの感覺を有したりき。

一千八百三十年二月、佛國に第二の革命起りて、餘波隣國に及び、同三十二年五月、獨逸聯邦の一部分なる。バラチネート（ファルツ）領のハムパツハに三万の人民全國より來たりて大集會を爲し、激烈なる辯士は頻りに人民主權説を唱へ、獨逸を統一し、之れを共和制となす可しとの意見を演説し、頻りに兵を擧ぐ可しと主張し、遂に、パワリヤ侯の軍隊を煩はし、又、翌年四月、フランクフォルトに於ては、一層甚だしき暴動激發し、獨逸の統一及び自由を急進せしむることを介てたりき。是れ、ビスマルクが大學に入りし後の事變にして、彼れの普魯西的訓練は、之れに反動して、益々自由主義者の急進的思想及び非法律的行爲を嫌惡するに至れり。

一千八百四十七年、普魯西の國王フレデリク、ウイリヤム四世は、時勢最早や止む可からざるを察し、一千八百十五年以來の勅約を履行し、國會を開設せむと欲し、普魯八州の地方議會を伯林に召集し、以て、一大國會となすとの勅令を發布せられたり。

は自由解放の法令行はれたる結果、人民は王室を肩に擔ぎて血戦し遂に大勝利を得るに至れりと陳述し、以て自由憲法の効力は如く著明なりとて、頻りに成文憲法を要求するやビスマルクは憤然として起立したり。彼れは、一千八百十三年普魯西人民が舉國一致して佛國と戦ひたるは一に外敵の束縛を脱して國民の獨立を全うせむとの趣旨に外ならず。此の時普國人民は豈に戦争の報酬として憲法を得むが爲めに戦ひしものならんやと抗辯したり。此の一言は忽ち議場を沸騰せしめ、ビスマルクは暫時演説を爲すこと能はざりき。彼れの自言に曰はく、余の演説は暴風を生ぜり、余は演壇に立ちつゝ、其處にありたる新聞紙を披見し、議場の鎮靜するを待つて余の演説を終はりたり。彼れは外敵の束縛を脱せむとするとき愛國の精神ある人民豈に何等の報酬を望まむや、國家の爲めに戦うたる爲めに國王に辨償を求むるを以て陋なりとなしたるなり。王竊かにビスマルクの依頼すべきを悟りしが、此の時は特に彼れを親信することを外間に知らるゝことを避けられたり。國王と議會との間には遂に調和成り立たずして議會は空しく閉會せられ、ビスマルクは國事の非なるを思ひ衷心怏々として伯林を辭し去れり。

實に一千八百四十七年六月のことなりき。

數月の後彼れは新婚旅行を企て、伊太利のヴェニスに到るや、國王フレデリク、ウイリヤム四世も偶然該地にありて、ビスマルクの在るを聴き、直ちに召して謁見并に陪食を賜ひければ、兼ねてビスマルクは我が勤王の精神反つて陛下の意志に適はざりしかと疑惑を挟みたりしが、是に於て其の疑惑忽ち氷釋し、感激に堪へざりき。彼れは事餘りに不意にして正當の禮服を調ふるに違なかりきと言へり。陛下はビスマルクと會談して益々彼れの信任するに足ることを知り、歸來國務大臣として陛下の爲めに力を效すべきことを約して訣別せられたり。

明くれば、一千八百四十八年二月佛國巴里には三回目の革命起り、國王ルイ、フィリップ放逐せられ、其餘波忽ち隣國に及び、獨逸、埃地利及び伊太利、一時に自由民權主義者の暴發を見るに至れり。埃國首府維納も暴徒の手に落ち、久しく歐洲の外交界に牛耳を握りたる自由撲滅主義の宰相メッテルニヒも其の職を辭して英國に逃がれたり。四月十五日其の影響によりて普國の首府伯林にも四月十八日より暴動起り、市民と軍隊との間に戦闘ありて、軍隊却つて敗を取り、皇弟ウイリ

ヤム(後)に皇帝ウイリヤム一世英國に脱奔し守舊内閣倒れて自由主義の新内閣任命せられ神權主義の國王却つて市民の爲めに制せられて自由の行動を爲すこと能はざるに至れり。伊太利の旅行より歸りてシエンハウゼンの邑にありたるビスマルクは輕佻浮薄なる市府の人民が外國の風潮に驅られて此の暴動を惹起したるを憤慨し如何にもして國王の身軀を市民の手より救ひ出ださざる可からずと思惟し我が所領の一邑を固守して王室の爲めに盡くさむものと決心したり。蓋し彼れは急激なる思想は都會の人民のみに流行して地方の着實なる人民に感染し居らざることを知り獨逸の最大急務は空想的民權自由主義者の希望せる方法にて成就せらるゝものに非ざることを見破したればなり。ビスマルクは國王を救ひ出ださんと欲し、ポツダムに赴き皇弟チャールズに其の手書を請うて陛下に謁見するの紹介を得たり。是に於て彼れは伯林人民に認識せられざらんが爲め鬚を削り廣邊の帽を被り大禮服を着して首都に赴き宮中に入り一書を認めて國王に奉呈したり。彼れは革命の氣焔は單に大都會のみに限り國中一般人民は依然として王室に忠實なることを言上したり。彼れは大都會は革命の醸成所な

るが故に之れを一掃せざる可からずと思考したり。是れより彼れは市府破壊者の綽名を得るに至れり。

從來一步も推譲することを爲さざりし普國王フレデリクウイリヤム四世は革命の結果によりて遂に人民に成文憲法を與へむことを約し又憲法を制定すべき議會開設の準備として地方議會の合同會議を伯林に開くべきことを布告せられたり。此の會議は四月二日を以て開かれ直ちに近時國王の行爲に對する信任の上奏を爲したりしがビスマルクは獨り毅然として之れに反對の意を發表し國王の自から推譲せられたるは國家の大綱を緩くする一大不幸なりと演説し流涕嗚咽して壇を下れり。世舉つて自由民權を呼ぶに彼れ獨り國王の特權を主張せり。彼れ豈に獨り奇を好む者ならむや。普魯西人は古來王室に忠實なる國民なるが故に一千八百四十八年の春人民の中にも國王の讓歩を歎きし者なきにしもあらずりしがビスマルクは常に王室に忠なる普魯西人なるのみならず世の風潮に卓立して能く之れを發表するの勇氣を有したり。

憲法制定の爲めに特別の議會開かるゝこととなりしかどもビスマルクは此の議

會に列することを厭しとせざりき。此の立憲議會は六ヶ月の間五月廿二日|討
論駁議に時日を消費し、彼等は主權在民主義を固守して一も國王の穩當なる發議
を容れざりしかば優柔不斷のフレデリク・ウイリヤム四世も議會をブランドン
ブルグに移し終に軍隊の猶ほ恃むに足るを見て遂に議會を解散し五月廿二日國王の勅
斷により別に憲法を發布せられたり六月十二日

此の憲法は主權君主に在り而して成文憲法、二局議院、普通選舉制なりき。ビスマ
ルクは此の憲法に不同意なりし其の欽定なるの故を以て之れに服従し、將來國
王の大權を擁護せむと欲して又議會議の議員たらむと決心したり。彼れは其の
選舉區民に對して曰はく、革命の害惡を防がむと欲せば、眞に愛國の心ある者は政
府の新自由政策を賛成せざる可からずと。彼れは全心全力を盡くし、祖國の大義
を以て自己の主義となし而して第一着に國王と人民との間に弛みたる信任の紐
帶を復た結び付くることを勉むべしと公言したり。此の議會は既に發布せら
れたる憲法を修正可決せむが爲めの議會なりしが國王と議協はずして解散せら
れたり六月十八日四月廿七日

更に新選舉法によりて選出せられたる第二の議會一八五〇年八月廿六日にもビ
スマルクは暴民の爲めに石を投ぜらるゝの危險を経て選出せられ憲法修正問題
に關して常に國王の大權を擁護するを以て已れが任となしたり。議員等は頻り
に英、佛、白耳義等の例に従ひ議會をして歳入の供給を拒否し以て議會の意志を君
主の上に置かむと欲したりしがビスマルクは是の如きは普魯西の國情に通ぜず
して不測の禍を生ずべし問題は如何にせば普國の爲めに利益となるや否やにあ
り。他國の憲法を直ちに普國に移植せんとするは不可なり。英國にては下院が
租税を拒否するの權を有し而して其の結果英國の幸福となりたれども英國の例
は以て普國の模範となすべきものに非ずとの意見を固持したり。彼れ以爲へら
く英國の憲法を普國に採用して英國と同様に利益ある結果を收めむと欲せば凡
て英國が有する所の社會的諸元素を有せざる可からず。英國人の宗教的信念其
の法律に對する畏敬の精神英國の貴族制度英國人の富及び英國人の常識特に訓
練ある政黨の規律によりて進退する英國の下院を有せざる可からず。是等の諸
要素なくして英國の憲法を用ゐむとするは迂愚の極みにして國家の爲めに甚だ